

---

# 後日談

runaway

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

後日談

### 【Nコード】

N3626W

### 【作者名】

runaway

### 【あらすじ】

天軍と魔軍による永劫の戦争が繰り広げられる世界に“就職”した魔術師アーフィア。ある日戦いに明け暮れる彼女のもとへ、大剣を担いだ戦士が現れる。「こんなところにいたか」「見逃してくれないか。私はラトールレになんか会いたくない…」異世界でヤバイ相手に目をつけられた主人公が、頑張ったり頑張れなかったりする話です。 完結しました。

01 プロローグ 億劫戦争（前書き）

ムーンライトノベルズから転載になります。

## 01 プロローグ 億劫戦争

「では希望をあげよう」

「え……？」

「耐えるがいい、アーフィア。我が愉悦の刃から。

心が折れればお前の負け。贄として自ら魂を差し出すことになる。

だがいくら美味でも同じ酒は飽きる。その時はお前の勝ち。

正気が残っていればどこへなりとも行くがいい」

努力の甲斐あって魔王軍のスカウトがやって来た。

魔法を学ぶ人間たる者、誰しも天界か魔界の戦士として、億劫戦争おくこうせんを担う一角たることを夢見るものだ。

神懸かりの奇蹟で戦況を維持する天軍は、一騎当千のため人員補充の必要に乏しく、いきおい魔軍のほうに門戸が広い。言い換えれば死ぬ確率が高いということだが、中には人の身でありながら最高位將軍たる魔王子の地位まで上り詰める者もあり、その魅力に違い

はない。

人余りにあえぐ魔術師業界は、今や練達者や熟道者の称号を得ても小さな塾の講師にすらありつけないのが現状だ。

年棒は300靈気圧とあまり芳しくかんぱはない。が、入隊のおまけとしてミスリルより遥かに稀少な魔界の重金属カルテナデ製の杖をつけてもらい、将来の栄達を信じて契約した。

それから3年。

同期入営の人々の多くは出世を急ぐあまり実力の及ばぬ前線に立ち、昇進を待たずに昇天 いや、降天していった。(魔の狡猾さよ。己の実力は自己申告制なのだ。欲をかけば早死にし、その魂を奪われる。永劫に)

生き残った同僚たちはさすがに用心深く、周到だった。

常に他の仲間の陰に隠れ、拝領した靈力の大半を護りの結界に蓄え、実力の計れぬ相手には決して手を出さず、己が武器の強化に腐心した。

同期の生き残りは、少数ながら皆魔軍にとっても精鋭と言えるようだった。

例えば戦士バディッシュは聖気を毒し腐らせる大剣「破天黒流」はてんくろりゅうで天の眷属けんぞくを大地の汚泥と変え、司祭りゲイルの祈りは天を汚し聖なる盾を打ち砕いた。

中でも天軍の誘いを蹴って魔王軍に志願入営した詩人ラトーレの呪歌は、凄まじいの一言に尽きた。絶対の信仰に護られているはず

の天軍僧兵の心を魔に捻じ曲げ、曲がらぬ心はそのまま折った。

正直な所、自分がかれらを始めとするメンバーの中で生き残っていることが不思議なほどだった。

最初の契約の際に新聞の勧誘に対するが如くに粘って、おまけの杖を得たのが幸運に繋がったようだ。

杖は今や呪力に満ち、望み一つで攻撃を撥ね返し敵に暗気を注ぎ込むことができる。

さらに時が過ぎ。

もつどれほどの間戦っているだろうか。

かつて組んだ同僚たちもそれぞれに出世、破滅した。

億劫おくじょうの戦争は今日も果てることなく世界と魂を呑み込んでいる。

潰れた階層は数知れず、私の出身世界も、もはやない。

杖は私の一部となり、今日も天軍の奇蹟を撥ね返していく。

己の力で稼ぐ靈気圧は給料として与えられるそれを遙かに上回っている。かつて怯える鼠のごとく慎重に避けていた絶命の死地にスリルを求めて自ら赴き、魂を削り合う戦いに恍惚こくごっくとなる。

例の三人は更に苛烈な戦場を求めて位階を駆け上がっていった。

私とは言えば魔王子の地位までは手が届きそうになかったが、少なくとも今周囲にいる戦友らの中に人族の姿はない。

もしかすると私自身、もう人ではないのかもしれない。

共に戦う魔の一人が、杖を鑑定し独自の魔力を帯びたとして「反鏡杖」という銘を与えてくれた。

武器に名がつくことはその威力と使用者が、憶えるに足るとして認められたことを示す。

戦場で天犬使いに畏怖を込めて名を呼ばれたときは、歓喜に心が震えるのを感じた。

当初の目的は果たすことができた。

これで「魔術なぞ」に手を染めたことを親戚一同に馬鹿にされることもあるまい。

一つ問題があるとすれば。

報告すべき相手が誰一人生きていないこと、だ。

## 01 プロローグ 億劫戦争（後書き）

姉妹サイトからの転載で、あちらを読まれた方は重複で申し訳ありません。少し振り仮名を振っている程度で内容は同じです。もともとR16程度の描写（多分）だったので、R15を目指して修正したいと思います。

初めましての方、よろしければお付き合いください。



## 02 失言

「こんなところにいたか」

声に振り向くと、大剣を背負った戦士が歩み寄ってくるところだった。

がっしりした体躯たいくと迫力のある太い笑みが、忘れようのない名を記憶から呼び覚ます。

「バディッシュ」

だがそれはこの場にいるはずのない者の名でもあった。

「何故ここに？」

鎧なき重戦士は近くまで来て立ち止まり、答える代わりにからかうように眉を上げた。

「ずいぶんゆつくりだな。最後に会ったときから二段しか昇ってないとは。前は半年遅れくらいで追い付いていたろっが」

苦笑で返すしかない言葉だった。

「ああ、ずいぶん無理をした。だがイドウも遅れ、アロニムが斃たおれ潮時だよ。メリエは追っていったはずだが……」

「知らん。今一段ずつ降りてきたが見た顔はなかった」

「……そうか」

ちらりと彼女の狡猾周到な戦術に似合わぬ、一途な瞳がよみがえ

る。

「残念なことだ」

だが、肩をすくめて言ったのはそれだけだった。

あまりにも多くの死が蔓延し、悼<sup>いた</sup>みはしても折り合いをつけるのも早い。

「潮時とも思えんな。まだ行けるだろう」

バディツシユも早かった。

或いは最初から何の感慨も抱いていないのかも知れぬ。

彼の振るう剣は敵を狙ってはいたが、軌道上に自軍を巻き込んでもまるで頓着しなかった。今も死んだかも知れぬ同僚のことよりも、生きた目の前の話し相手のことを優先した。

「あと幾つかは。でもそこまでだ。どちらにせよ、いつまでもあなたたちについて行けるわけじゃない」

少し迷ってから続ける。

「実は幾つか戻ろうかとも考えている」

明かす必要はなかったのだが、重戦士の視線は楽しげな割に心を見透かすように鋭く、つい口を滑らせる。彼の能力の一つなのだろう。

「ほう」

意外そうな、興味をそそられたような、相槌。

死地と判つて魔軍に志願する人々は、地位にせよ力にせよ例外なく上昇志向が強い。己の限界を見極めて留まる者はいても、降る者はまずいない。

だからバディッシュがこの階層に降りてきたことに驚き、バディッシュはこちらの言葉を聞きとがめた。

「何故？ そこまで言うなら理由も教えてくれるんだろう」

「……武器を造り直す。これでは、もう役に立たない」

うまく乗せられたことに舌打ちしながら、右手で支える身長ほどの高さの杖を示した。

はなまきしじょう  
反鏡杖。

あらゆる力を撥ね返し、触媒として行使した術を増幅して解き放つ。

バディッシュは示されるまま杖に目をやった。

す、と細められた目が込められた魔力と履歴を正確に読み取っていく。

この世界では不可欠な観察・分析能力だが、彼の鋭すぎる眼光は時としてこちらの背筋を冷えさせる。

「いい道具じゃねえか。磨き抜いた鏡つてところか。銘もあるんだろ？」

やがて彼は言った。

銘を得たのは、彼らが行ってしまつて大分経つてからのことなのにも関わらず。

「役に立たないってこともなかるうが」

「そうだな。もうしばらくはいい武器として使えるだろう」

嫌な感じだ。

自分が丸裸にされ、無力さをさらけ出しているような気分だった。

彼と、あの二人は昔から他の「仲間」とは違う雰囲気まを纏まとっていた。装われた気安さの陰に、何か異質な冷たさを感じることがあった。

「味方」ではあるが、あまり近寄らないように気をつけていたのだが。

黙っているのも得策とは思えなかった。

力の差が開いた今は尚更だ。

できれば早くやり過ぎしたかった。

「だがあなたの言う通りだ。そこから先はこれはもういい道具ではない。敵の攻撃を弾く防具でしか」

限界を悟ったのはかなり前のことだ。

撥ね返した攻撃で弱らせ、止めを自前の魔術で刺すのが私の戦法だった。だが位階が上がると敵の攻撃の属性が固定され始める。

天軍の属性は神聖。

聖なる炎を操る相手に聖なる炎を返したところで、ダメージを与えることはできないのだ。

そしていくら強くなったとはいえ、人の身に魔性の気を操るのは根本的なところで無理がある。

人の気力を魔の力へと変換する媒体が必要なのだ。

「武器が欲しい。そしてそれを使いこなすための相手には、ここは強すぎる」

「最初の選択を誤ったってことか」

「そもそも思っていない。」

どうせ魔王軍にとつて人なんて使い捨ての道具だ。死んだら死んだで魂も取れる。始めから攻撃力に重点を置いていたら、便利な爆弾として天軍巻き添えに玉砕して終わりだったろう。

遠回りでも魔にも天にも守りを確立してから次の段階に移ったほうがいい。

多分あなたと同じように」

言った瞬間戦士の目が細まり、失言に気が付いた。

いや、失言　なのだろうか。

バディッシュが面白がるように唇の端を吊り上げるのを見て、後悔とも不安ともつかぬ感覚が湧き上がってくる。

バディッシュは実に楽しげに言った。

「今のことを指してる雰囲気じゃないな。気付いてたのか。いつからだ？」

口調とは裏腹な、逆らい難い尋問の気配が滲<sup>にじ</sup>んでいた。

応えられずに見返していると、戦士は笑みを貼り付けたままこちらの目を覗き込んだ。

同時に脳に異物が侵入してくるような耐えがたい感触に捕らわれた。

思わず杖を掲げて後退ると、楽しげな声が繰り返した。

「いつからだ？」

「……忘れた。だが、相当前から……」

遮断するだけで大量の精神力を削られた。よろめき、体を支えるために杖を地に突く。

「ここまでとは……思ってなかった……」

闇の戦士はこちらの様子にはまるで頓着しなかった。

「で、どうして？」

### 03 単なる好奇心

「で、どうして?」

「……破天黒流<sup>はてんこくりゅう</sup>。最初から銘のある武器なんて変だろう。しかも普通人界で付与できるような魔力じゃない。明らかに天を滅すための、武器」

カードを隠しておくことはできないと判った。黙っていればバディッシュはこちらの頭から直接情報を引きずり出す。

しかも読まれた脳は、少なからぬ障害を受けそうな気配だった。そしてなおかつ彼はそんなことを気にしない。

「明らかに変だ。誰でも、気付く」

「それがなかなか気付かんのだ。こっちも段々強くなっていくふりを一応するしな。で?」

「で?」

「惚けるなよ。あとの二人だ。俺に気付きゃあいつらのことも見当つくだろ」

バディッシュは太い笑みを浮かべた。

同時に探査の触手がぞろりと額を舐める。

たまらず、頭を振る。声が裏返ったのは仕方なかった。

「判っているなら、いいだろう!？」

「怒るなよ。単なる好奇心だ」

楽しげな声。嬉しげですらあった。

「で？」

憤りで頭がくらくらした。

ここまで強引で相手を気にかけない人物だとは思っていなかった。こうなったら一刻も早く話を済ませて好奇心を満足させ、本来の目的のほうに戻ってもらうしかない。

「魔族、もしくはそれに類する存在だな。

あなたは人かもしれないが、あの御二方ははどう考えても人ではない。むしろ、あなたより早い時期から疑問に思っていた。

私は魔術師だからな。媒体に頼らずに、あれほど魔の側に寄った術を使う能力は人にはないことを、知っている。だからできるだけ関わらないよう気をつけていた。はずだが」

訊かれていないことまで喋り、最後は当てこするようにつてみた。

少なくとも、挨拶以上の言葉を交わすような仲ではなかった。こちらは三人の強さに憧憬こぼれと畏怖を抱いていたが、彼らはどちらかというと誰も個体として識別していないように感じられた。

今の話で確信できたことでもある。

魔軍では上位の者にとって下位の者はその他大勢の駒に過ぎぬ。

誰が誰かなぞどうでもよいのだ。

思い起こせば自軍を巻き込んで顧みぬバディッシュの戦いぶりは、まさしくそれであった。

バディッシュは声をあげて笑った。

「そうだな。だがお前や今回の奴らは悪くなかった。馬鹿じゃなか



ったからな。こんなに死ぬ前にもっと話してみてもよかつたかもな」

まだ生きている相手に対して完全に過去形で語るバディッシュにまた神経がささくれ立つのを感じたが、気取られる前に何とか押さえ込んだ。

法衣の外套を身に巻きつけ、突き立てていた杖を引き抜く。

「もういいだろう？ 何をしているのか知らないが、邪魔して悪かった。目的の階層なり場所なりに行かれるがいい」

だがバディッシュは動かなかった。

あまつさえ去ろうとした私の影を踏み、動きを止めさせた。

「待てよ」

首を捻って振り向くと笑みをさらに深め、影を縫う足を横に摺った。

身体が強引に半分回され、再び向き合う形になる。

「俺はこれ以上戻らんよ。お前を捜しに来たんだからな」

彼は言った。

「」

しばらく沈黙が流れた。

彼はこちらの反応をじっくりと観察していたが、啞然とした表情を隠すことはできなかった。

やっと反問の言葉が喉まで上がってきたとき、魔戦士が先に口を開く。

「捜して、連れて来るよう言われている」

「

再びの沈黙。

無防備な驚きの表情をバディッシュは満足げに眺めていた。

観察されているのは判ったが、それに怒りを感じる余裕がない。

「……なんで……？」

やがて、かすれた言葉がもれた。

思考の空白を埋めるように、今度は過熱気味に頭が回転し始める。歯車が足りない状況では空回りに近かった。同じ疑問がぐるぐると渦を巻く。

「何故……？ 誰が……？」

個人主義の魔王軍においては、それほどありえないことだった。誰かが下層の誰かに使いを超越するなどということは。

バディッシュは問われたことだけ簡潔に答えた。

「欲しいんだと。ラトールが」

「ラトール……？」

「ああ。お前をな」

欲しい。

ラトール。

自分。

歯車が増え、思考が抑制と理性を取り戻し始める。

詩人の魔性に満ちた歌声と、白く謎めいた美貌が記憶の海から浮かび上がった。

まだわけは判らなかったがとりあえず精神的には立ち直り、今度は慎重に問うた。

「ラトーレが、私の何を欲しいと？」

「お前の何が、じゃない。お前が、だ」

すっかり堪能したといった様子でバディッシュは答えた。あからさまな笑みは消え、いつものからかい含みの表情で情報を伝え始める。

「疼きを鎮めたいんだと。判るだろ。ここのところ、随分と折伏したからな」

「……ああ」

必要なピースが揃い、理解の絵図面が見え出した。

ラトーレの避け難い悪癖。

思慮深かったメリエを狂わせ、破滅の旅路へ突っ走らせた原因。

彼は己の歌が描く魔性の絵画に酔ってしまっただ。

酒は酒でも狂気の靈酒とでもいうべきもので、天上の眷属を貶め、墮落させる度に媚薬のように愉悦の中枢を刺激する。

詩人ならその夢幻の快樂に身を委ねてしまえばよいものを、彼の複雑かつ強固な精神は決して現実から遊離することはなかった。

いきおい、昂ぶった精神と肉体を鎮める相手が必要になる。

ラトーレはそのため私を求めたということらしい。

## 04 前菜だかデザートだか

「……前から訊きたいと思っていたが」

「なんだ」

「“あれ”は墮としたほうの　それこそ天使とかとやったほうが効果的なんじゃないか？

天が魔に抱かれて泣き喚くなり歓喜に打ち震えるなりというのは、かなり嗜虐的しやくてきで魔族好みの状況だろうに」

バディッシュはにやりと笑った。

「想像力豊かだな。そういうのが好きなのか」

「嫌いだな。相思相愛で、できれば子供も欲しい」

別にそこまでは思っていなかったが、魔族相手ではないことを強調する。

遠まわしな拒否だが、無論バディッシュにとっては面の皮を撫でることに成りはしない。かえって面白そうに見返され、嘆息が漏れる。

「だが魔の性癖からすると、そうならないか」

「俺はラトールじゃないからな。何を考えて人の弱い魂ばかり選んで壊したがるかは判らんよ」

バディッシュの答えは判らんとはいつつ真実の一面を衝いていた。こちらの含みに対してもごく丁寧に返している。

つまり、彼に連れられて行った先で魂は壊される。

「だが聞いたこともある。折伏じやくした時点で奴らの軋きみはあらかた喰  
つちまつてるとかな。どっちかがメインディッシュで、もう片っぽ  
が前菜だかデザートってところなんじゃないか。」

まあ何がどっちでお前の気分が変わることもあるまいが  
「まっただ」

実は一度だけ、メリエの代わりに捕まってしまったことがあった。  
一度で充分、と心の底から思わされた出来事だった。

あれだけほつそりと中性的なラトールが、実に健全かつ凶悪な欲  
望を持つ男性であることを思い知らされた。それ以来ラトールには  
近寄り難い以上の注意を払って、近づかないようにしていたのだっ  
た。

だがメリエはそのラトールを求めるあまり。

追憶が疑問の糸に引つ掛かった。

「何故私なんだ。メリエがいたろう。コリンだって、よく相手をし  
ていた。本当に私なのか」

バディッシュは眉を上げた。

「往生際が悪いな。聞きたいことがそんなにあるのか」  
「前から、は一つだ。それに往生際はたいそう悪いぞ。あなたがた  
はどの魂も一緒かも知れないが、私の命はこれっきりなんだ。足掻  
きもするし、どうせなら冥土の土産は多いに限る」

笑い。

楽しげな。

「面白い奴だな、お前。      ラトーレの注文は確かにお前だよ。お前だけだった。名指しで、髪と瞳の色まで教えられた。慰めになるか知らんがラトーレが人を憶えるって、滅多にないことだ。少し驚いたな」

何かを思い出そうとでもするように首を傾げる。

「お前の言った二人は      俺は憶えてないな。少し昇ったあたりで、今回は女が結構多いと思ったような気はするが。」

ラトーレは多分もつとひどい。五人並べれば顔も見ないで端から順番に使っていくからな。

何か憶えるってのは本当に珍しいんだぞ」

「……感想を聞きたいなら、私は今己の不幸を噛み締めている。何かの間違いであることを祈るばかりだ。」

そもそも上の階層や人界にラトーレの相手はいないのか。メリエのように喜ぶ女も私のように嫌がる女もいるだろう。私じゃなくても。何故私なんだ」

バディツシユは肩をすくめた。

「さてな」

恐ろしいことに、この話題に飽き始めているようだ。

「俺に答えられることは、最近大物を仕留めて以来、鎮めに呼んだ相手を何人潰しても満足できないってことだ。人でも魔でも天使でも。」

その上でお前が欲しいって言い出した。だから俺はお前を連れて

行く」

「……何故ラトーレが自分で来ない」

「ラトーレのほうが身分が高い、とか考えたことないのか」

唇を歪めた笑み。

あの三人を避けていた理由である、底の知れない不安感が呼び起こされる不穏な表情。

「あんまり失望させるなよ」

「もう一つだけ。ラトーレの位階は魔王軍では一体……」

「どの辺だと思う？」

「まさか、魔王子とか……」

ありうる話だ。

だとすれば、答えなぞ聞かずに逃げ出したかった。

入営前には憧れたりもしたが、内部の事情を知るにつれて尋常の人が踏み込める領域ではないことが判っていた。魔王子の下たる爵位級の称号ですら、人の身には余りに過ぎる。

そしてラトーレやその配下らしいバディッシュとリゲイルの力は、どう考えても「尋常でない」のだ。

バディッシュはこちらを見た。

つかみ所のない飄々とした表情であっさりと言う。

「ラトーレがか？ 違うな」



そして不意に彼は、うわべの気安い仮面を脱ぎ捨てた。  
不安などという曖昧な感覚とは比べ物にならない、冷たい迫力が  
塊となつてのしかかつてくる。

「それで、どうする？」

圧倒的な力を持つ者に相応しい、太い笑みを刻んだ唇が、語る。

「……どう、とは」

「大人しくついて来るか？ それとも足掻くか？

言つておくが、お前の能力じゃ俺には絶対に勝てん。お前の見抜  
いた通りの方法で俺はのし上がったからな。巧い手はあるか？」

知らず、杖を構えて後退っていた。

バディツシユは嘲い、背負った大剣を音もなく引き抜いた。魔剣  
の切っ先がついと上がり、突きつけられただけで痺れたように動き  
が封じられる。

天を破る武器ではあるが、人に対しても凶悪な呪いを有している  
のは一目瞭然だった。

楽しげな、声。

「お前のこと結構気に入ってきてるんだぜ。失望させるなよ」

「お前のごと結構気に入ってきてるんだぜ。失望させるなよ」

「……言っつていいことなのかは判らないが」

背筋をじつとりと汗が伝う。

望みを失っているのはこちらのほうだった。バディッシュの気は、こつして対面しているだけで心身を蝕んでいくようだった。

「私はあなたとリグイルが嫌いだった。強すぎるし得体の知れない厭な気配をいつも撒き散らしていたから。だがラトールは」

バディッシュを見る。

彼がラトールの名を口にした瞬間、悪寒が疾った。

そして今それを思い起こしただけで震えがくる。

「……恐ろしかった。いや、恐ろしい。今でも。彼の歌と、歌がもたらす信じ難い光景が、怖くて仕方ない。あれは存在が許されるよなものじゃない。」

「……バディッシュ、見逃してくれないか。私はラトールになんか会いたくない」

「見逃して、だと？」

バディッシュはじろりとこちらを見た。

凄まじい威圧感。

身を護るために握り締めている杖が、ただの枯れ枝であるかのごとく頼りなく思えてくる。

それでも強張った首を、なんとか前に傾け、頷いた。我ながら油の切れたからくり人形にでもなってしまったかのようだった。

「会いたくないんだ。それにありえない話だ。きつと憶え違いか勘違いだ。」

あなただつて不審に思っていたようじゃないか。口を利いたことすら、ほとんどないんだぞ。

何人潰しても鎮まらないような疼きが、私を抱き潰して解決する理由なんてあるはずない。

死んでいたみたいだ、と一言報告してくれば済むことだ。私は、  
私は――

言葉を重ねるほど、自分が惨めな命乞いみじをしていることが実感された。情けなさに滲にじんできた涙をやつとの思いで呑み込むが、声のかすれは隠せなかった。

「もっと強くなつてみたい……。こんな、わけの判らない死にかたはしたくない……」  
「……」

目の前の剣先が下にずれ、息苦しいほどの圧迫感が消えた。

急な消失によるめき、へたり込みかけた私を、剣を下ろしたバデイッシュは静かに眺めていた。

「面白い奴だな、お前」

言った言葉は、それ。

しばらく置いてまた静かに言った。

「そうだな。多分お前は強くなれただろう。」

「こんなことがなきゃ、かなりいい所まで行きそうだな。俺も残念だ」  
それはすなわち最後通牒だった。

瞑目し、渦巻く感情を吐き出そうとしたとき、鎧なき重戦士がゆっくりと言った。

「だが気に入ったよ。見逃すことはできんが選ばせてやろう。  
もう一度、戻ってラトールに確認してきてやってもいい。可能性は薄いがそこで何かの間違いと判れば、お前は助かる」

「  
」

「ただし、ラトールはこれからかなりの大物と連戦する予定だ。

あの疼きは蓄積する。ラトールの精神力は無限と云っていいが、そいつはつまり底無しに欲望を溜め込むことができるってことだ。しかも例の方法で消費しない限りまず発散できない。

仮にお前の精神力が普通の奴より強いとして、今すぐ行って抱かれ、壊れずに済み、一回で御役御免となれば、やはりお前は助かる。可能性は薄いだが、壊れずになんとかなりそうなのは今のうちだけだ。さてどうする？」

ここでふと楽しむような笑みを浮かべる。

「あともう一つか。俺と喧嘩して勝って逃げるとのもあるな。  
その場合は容赦しないぜ。要は五体が揃そろって心臓が動いてればいいんだからな」

最後の選択肢は考慮に入れる必要はなかった。

バディッシュには敵わない。

というより、考慮自体する必要はなかった。  
私は言った。

「確認してくれ」

バディッシュは眉を上げた。楽しげに。

「早いな」

「どうしても納得行かない。どのみち近くに行ったら、理由なんかなくたって犯される。顔も見ないとさっきあなたも言っていた。それに、くだいようだが私はラトールに会いたくないんだ」

バディッシュは笑った。

「だろうな。お前は面白い上に賢い。ラトールがお前に目をつけたのも、不思議はないような気がしてきたよ」

「つけてない。絶対何かの間違いだ。」

ところで、ここで待ってあればいいのか？ それとも逃げたりしてもいいのか？

どうでもいいが、バディッシュは先刻から何が面白くてあれほど笑えるのか。

バディッシュは 笑った。

爆笑した。

「お前、本当に往生際悪いな。いい根性してるよ」

くつくつ笑いながら、答える。

「いいぜ、逃げたって。そのほうが俺としては面白い。お前は弱いが、隠れたり小細工したりするの得意そうだな。じっくり狩ってやるよ。ただ捕まった後、相応の仕置きは覚悟するんだな」

面白い、の言葉に言い知れぬ不穏な雰囲気漂っていた。  
首を振って即答する。

「聞いてみただけだ。待っている」

「ああ。それが利口だ。残りの時間びくびくしてるより有意義に使  
つとけ」

魔戦士は大剣を背中の鞘に収めた。

踵を返し踏み出した足が、すいと空に消える。

「じゃあな。俺も戦線に出なきゃならん。一週間はかかるだろう。  
それがお前の時間だ」

そして鎧なき重戦士は虚空へと歩み去った。

最後に大剣の影が消えると同時に、重く押さえつけられていた空  
気が清浄な軽さを取り戻す。

杖が手を離れて地面に落ち、膝ががくりと折れた。

そのままうずくまり、大地に爪を立てる。

久しく存在すら忘れていて、つい今しがた重戦士に思い出させら  
れたもの。

涙 が大地を掻く指を濡らし、地に吸われていった。



## 06 褒美

バディッシュは気が付くと目の前に立っていた。太い笑みを刻んだ唇が、楽しげに開かれる。

「よう、迎えに来たぜ」

動けなかった。

あらゆる問いもその一言の前では意味を持たなかった。その一言が答えのすべてだった。

茫然と見ている私に、バディッシュは手を差し出した。

「来いよ」

重い腕をのろのろと持ち上げ、彼の掌に乗せる。引き寄せられ、腰を抱かれた。身体の密度が低くなるような感覚に包まれ、階層移動が始まる。

耳元で静かな声が囁いた。

「残念だったな」

応えることはできなかった。ただ杖を、放さないようきつく握り締めていた。



実体化したのが硬い床の上だったので、驚いて周囲を見回した。

魔軍に入ってから、まともに残っている建造物を見ることは滅多になく、入るとなるともっと稀だった。たいていは荒れ果てた大地の上に、天幕を張って寝泊りしていたのだ。

下層はずっと昔の主戦場として過去の戦闘で破壊し尽くされ、新しい戦場ほど建造物が残っている傾向がある。それに比べここは余程の上層戦場か、天軍の侵攻を受けていない魔軍側の重要な領土となる。

見回せば石造りの頑丈かつ豪華な回廊で、城かと思紛うほどだ。

見紛う、ほど？

「城……？」

呟きに、笑いを含んだ楽しげな声が頭の上から応える。

「他の何かに見えるのか？」

バディッシュは手を離し、歩き出した。

「こつちだ」

ついて行きながら観察する。

回廊は静まり返り、自分たち以外には全く生物の存在は感じなか

った。周囲に満ちる魔法の気配からも、人の手による建築物ではないと知れた。概ね左右対称の造りで、中心に向かっているようだ。

城の中心。

そんな所にラトールがいるというのが。

「魔王子じゃ……ないんだろう？」

自然と足が止まる。

厭いやな感じだった。

魔王子も魔王子の直属も、洒落にならないことに変わりはない。それ以上に、とにかく厭な感じがした。

バディッシュも立ち止まり、振り向いた。

不穏なまでに楽しげな笑み。

「ラトールがか？ 違うな」

同じ言葉なのに、背筋に怖気が疾るのを感じた。

「ラトールは違う」

繰り返してからバディッシュは戻って来て腕を掴み、再び歩き出した。

「いいから早く来い」

やがて大きな両開きの扉に着いた。彼は立ち止まり、ひどく穏やかな声で言った。

「魔王子バディッシュだ。入る」

扉が音もなく開いた。

バディッシュは慣れた様子で歩み入った。

そして硬直した私は、彼に引き摺られてつんのめって膝から落ちた。

バディッシュは首をねじり、見下ろした。澄ました声が空白の頭にこだまする。彼の浮かべるにやにや笑いなど、見ている余裕はなかった。

「言ったるう？ ラトールは違う」

「あ……」

膝を折ったまま見開いた目で茫然と見上げる。

魔王子バディッシュ。魔王子。

頭がぐらぐらし、耳鳴りがした。

最初の衝撃が去り始めると、考えるのも恐ろしい事実を直視しなければならなくなってきた。

「何故欲しがっている本人が来ないのか」という問いに対する、バディッシュの答え。

口を開こうとして、喉がかさかさ<sup>あえ</sup>に渴いていることに気付く。ひりつく喉から出たのは自分のものとは思えないほどかすれ、声よりは喘ぎに近い音だった。

「じゃあ……ラトーレは……」

だがバディッシュは言葉と、その意味するところを正確に読み取った。

「まあ俺らより上って言ったら、一人しかいないよな」

待ち構えていたような応え。

「……」

無論、待ち構えていたに違いなかった。

麻痺していた精神が、バディッシュの態度に対する怒りで持ち直し始める。それとも衝撃が許容量を超え、やけっぱちになったのか。うつつむいて、吐き捨てた。

「やっぱりあなたは嫌いだ」

「俺はお前のこと気に入ってるよ。大いにな」

むしろ嬉しそうにバディッシュは言った。

「立てよ。魔王陛下がお待ちかねだ」

立とうとしたが、力が入らなかった。

「……腰が抜けた」

「抱いて行って欲しいか？ 引き摺って行って欲しいか？」

「3分くれ。自分で歩く」

バディッシュは笑い、手を離した。彼に好かれるような言動をしていた記憶は全くないが、気に入っているというのは本当らしかった。

「謁見の間はあと二つ向こうだ。覚悟を決めとけ」

そう言うと、急に興味を失ったように視線を外した。

杖にすがってしゃがんだり立ったりして脚力を回復し、ついでに深呼吸もしてまだ痺れていた頭に酸素を取り込んだ。

バディッシュやラトールに振り回されたまま一生を終えるのは御免だった。

どうせ彼らは私の死に砂粒ほどの関心も抱いていない。

ならばせめて自分はしっかりと見届けておこうと、バディッシュがくれた一週間で決めたのだ。

「いいか？」

3分きっかりでバディッシュは再び興味のスイッチを入れ替えた。頷くと、彼は顔をまじまじと覗き込んできた。

「なんだ」

また気紛れに脳味噌をひっくり返されては堪らないと目を逸らすと、なぜか少し感心したふうに言った。

「ほう、立ち直ったな。いい目をしている」

「魔王子様に誉められて光荣だ」

つつけんどんに言った瞬間、バディッシュはにやりと笑った。生

半可な覚悟ではやはり太刀打ちできそうにない、人をたじろがせる表情だ。

ついて来るように示して、奥に向かって歩きながら言った。

「そうか。じゃあついでに褒美に教えてやるよ。」

確認したとき、どうしてお前か聞いてみた。俺も疑問だったからな。知りたいか？」

強烈な爆弾、だった。

強烈な爆弾だった。

「ごくりと喉が鳴り、聞きつけたバディッシュを喜ばせた。だがそんなことよりも彼の握る情報に魅せられた。

「知りたい」

「要はお前の小賢しい用心深さが災いしたんだな」

バディッシュは含み笑った。

「あれだけ見境のないラトールも、あんまり同じ奴が続くと飽きるんだと。

途中あたりから多かった女も減って、お前ともう二人かそこらになつてたよな。戦場になつてる階層じゃ人がいないことのほうが多い。その時は自軍で調達せざるを得ない。

ところがたまには違つ奴、と思つても気が付くと見つからない。まあ俺たちはこんな感じだからな。始めラトールもあつたはずの道具が欲しい時にないって程度の認識しかしてなかったが、さすがにそれも続きすぎた。いつの間にか、なんとなく所在を確認するようになってたらしい。それなのにやっぱり折伏した夜は見当たらない。

「そうやって見てるうちに憶えちまつたんだと」

笑いに肩を震わせる。

「傑作だ。偶然だが必然。これだけ笑える話は久しぶりだよ。

お前は結局この落ちから逃れることはできなかったんだ」

眩暈めまいのするような話だった。

バディッシュの言う通り、恐ろしく下らない「笑える」落ちだった。

つまり、ラトールは私を憶えているだけなのだ。

好きとか相性がよさそうとかではなく、ましてや疼きを鎮められると思っっているわけでもない。

覚悟は決めていたが、後悔の荒波は押し寄せてきた。それが思わず、口を衝く。

「ままならないものだ。たった一つ、チャンスはあったわけか」

振り向いたバディッシュに微かに笑って見せる。

「逃してしまっただが。駄々をこねないで一週間前に来ていればよかった。

そんな下らない理由なら一回で御役御免と行きそうじゃないか。往生際が悪すぎたなあ」

魔王子に愚痴る自分が、なんだか可笑しかった。

波が去ると、心は凪いだ。

下らなくともわけは判った。見届けることが、できそうだった。

バディッシュは考えるようにこちらを見ていた。だが私が気付いて首を傾げると、例の面白がるような笑みを浮かべた。

「どうかな。俺は勧めそうだな。使い捨ては勿体無い、壊れるまで



使ってみろ、とかな」

「残念がつてくれているんじゃないのか」

「そして言うよ。」

ゆっくり味わいながら壊れないように使えってな」

バディッシュが歩みを止めた。三つ目の扉。

「ラトーレ。バディッシュだ。連れて来た」

扉が開く。

その向こうは、何処へ通じるとも知れぬ漆黒の、闇。

「通せ」

詩人の 詩人だと思っていた者の声が流れ出てきた。

さながら融けた闇。

バディッシュが肩に手をかけた。

すくんで動けぬ心にほんの少し力が注ぎ込まれ、足を進める余力が生まれる。

耳元で静かな声が囁いた。

「せめて苦しめよう祈ってやる。 行け」

背中が押された。

闇に踏み込む。

背後で扉が音もなく閉じた。

「アーフィア」

名を囁かれた瞬間、希望の小さなかけらは完全に打ち砕かれた。  
バディッシュユが確認してさえ捨てきれなかった、最後の可能性。

魔王が欲情を雪ぐ<sup>すす</sup>ためだけの道具をわざわざ選ぶ<sup>すす</sup>という、荒唐無稽な笑い話。

「おいで。アーフィア」

魔性の歌を紡ぐ<sup>つむ</sup>声が、歌うように私を呼ぶ。  
逆らえるはずもなかった。  
操られるようにふらふら進み、白皙の魔王の座す長椅子の前で膝を折る。

頬に冷たい掌が触れる。

その気の狂いそうな快い感触。

たったそれだけで、という戦慄を感じる暇もなかった。

白い指に挟み込まれた頭が引き寄せられる。

凄絶に美しい顔が、熱に浮かされたように艶っぽく光る漆黒の瞳が迫ってくるのを、私は虚ろに見上げていた。

唇が重なった刹那。

白い稲妻が弾けて視界を灼き、意識を切り裂いた。

そこまでだった。

私の精神は焼き払われ、すべてが白い世界に呑み込まれていった。

## 08 木っ端微塵

声、が聞こえた。

「生きているのか」

重たいまぶたを薄く開くと、細い光の世界を切り取って人影が映り込んでいた。

光の範囲を広げるに従い、人影の特徴が捉えられ始める。

姿を記憶と結び付け、口から出すまでかなりの時間がかかった。

「……リグイル」

唇が重い。

音を垂れ流しているような、頼りない声だった。

たったの四文字言い終えるのに、疲労を感じた。全身が熱く重い。どこまでも沈んでいきそうだった。

目の前の存在にではなく、周囲の空気にもらす、うわごと。

「みず……」

「私に頼んでいるのかね」

リグイルの静かな声に、散じていた目の焦点が合った。

「え……」

魔の司祭は感情のこもらぬ視線を向けている。

理解、返答までまた間が空いた。

「いや……独り言……」

ゆっくりとゆっくりと頭が回り出す。だがあまりの重さに回転が持続しない。

気が付くとまた何も見ていなかった。

熱い。

重い。

「みず……のみたい……」

首の下から手が回され、肩にかかって引き上げられた。唇に杯が押し当てられ、冷たく甘い液体が喉を滑り降りていく。

全身に染み渡る清冽せいれつな活力。

ほどなく、頭の回転が軌道に乗った。身体もわずかながら楽になっている。

背を支える相手を見上げ、頷いた。

「……ありがとう。楽になった」

与えられたのは薬か、彼自身の活力と見えた。

半身が倒され、再び柔らかな寝台に沈む。だが今度は相手を見据え、会話することができた。

「……私、生きているんだな」

思わず呟く。

リグイルは頷いた。

「そう、信じ難いことに。何をした？」

「杖に……逃がした。長い間使って、私の一部になっていたからアースだよ。」

「だが際どいところだったようだな……というより、ちょっと信じられないな」

ラトールに無茶苦茶に抱かれて喰われている間、私は杖と精神を繋いでおいた。ちょうど魔術を行使する準備の段階に当たる状態だ。杖の魔力と同調し、精神領域が拡張されている。

「何もしないで死ぬよりは、という程度だったがその執念が結果となった。」

「なるほど」

リグイルは周囲を見回し、長椅子の前に歩いて行って何か散らばっているものを拾い上げた。戻って来て、一つをかざす。

「これが」

見慣れた黒い金属には、自分の彫り込んだ、どうしても斜めに傾ぐ魔法文字を見留めることができた。さらにそれがもはや杖の形をしておらず、なんの魔力ももっていないことを見て取り、改めて己の関わった相手の恐ろしさを実感した。

逃がすことすら適わぬ、甚大な魔王の妖力。

長年かけて作り上げた魔道器が砕けるほどの激情を注ぎ込まれた我が身を思い、肌が粟立った。

「それほど、強いのか。ラトール　魔王陛下が斃たおしている敵は」

以前相手をさせられたときは少し疲れたくらいだった。  
毎夜のごとく抱かれていたメリエは溺れてはいたが、別に体調に過度な異変をきたしている様子はなかった。

敵の強さと酔いの蓄積量が比例するならば、何人潰しても鎮まらず、まがりなりにも銘のあるような魔道器を木っ端微塵にするほどの敵とはどれほどのものだろうか。

リゲイルが応えないので、自分を納得させるように呟く。

「……まあ、魔王だしな」

「大天使以上というところか。攻めて来た一軍丸ごと折伏してからおかしくなった」

やや遅れて司祭は言った。

冗談かと思った。

天軍で大天使と言えば一神系の大将級であり、仏系の菩薩じゆほつや多神系の神にも匹敵する強さと伝え聞く。私のような中位兵士の戦場では目にするにすらない。

「……私、本当に生きてるのか」

夢なのかもしれない。砕けた魂の见ている夢。

さらにリゲイルは言った。

「ここ一週間でも大神をたいしん一柱、天を二たり折伏した。

人の形すらしておるまいと思っていたが」

同感だった。

ふと、余程つまらなくて飽きてしまったという考えが浮かんだ。な  
くはなさそうだった。

希望の光明。

助かる、かもしれない。

「それで、ラトローレは」

「別のを試している。喰べかけで次に移ることはまずないのだが。  
もう二人潰した」

リグイルも納得が行かないらしい。連れに来た時のバディッシュ  
と同じだった。

そのお陰で、私は大した理由なぞないであろうことを知っている。

だから判らないほうを問うた。

「あなたはどうしてここに？　ここはラトローレの私室じゃないのか」



## 09 どついたものかな

「あなたは どうしてここに？ ここはラトローレの私室じゃないのか」  
言ってから皮肉なことに思いが到る。

寝台に長椅子。

最低限の調度。

個性のない部屋。

苦笑が浮かんだ。

「いや、違うな。そのための部屋だ。私たちにとっては処刑室、か。それであなたは死ぬなり気を違えた者の後始末に来た、ということかな」

「ほう、察しがいい。小賢しく生き延びただけのことはある」

バディッシュといい、「小賢しい」というのが魔王子が下す私に  
対する評価のようだ。

否定できない面はあるが、誰だって無駄死にはしたくない。今ま  
でこうして足掻く人間はいなかったのだからか。

こちらの感慨になど気付きもせずリグイルは言った。

「ラトローレは当座の疼きが鎮まりさえすれば周囲のことなぞ気にか  
けぬゆえ、使い棄てた者の横でも平気で次の贄を抱く。ラトローレは  
構わぬが、喰われる贄の心を徒に壊すこともなかる」

魔王に犯される横に、断末魔を凍りつかせた未来の己が横たわる

光景を想像し、鳥肌が立った。

確かに効率的ではない。

その状況だけで充分に気が狂う。

「それで、私はどうなる」

「さて。この地で天軍を滅してきたラトローレに抱かれることは、破壊と同義なのだ。

私は肉の殻を始末しに来ただけのこと。どうしたものかな」

引っ掛かった。

聞いた内容と違う。

「今まではうまく行っていたんだろう？ 最近おかしくなったとか。

ちゃんと鎮まったら相手は助かることもあるんじゃないのか」

「天程度なら人間二人ほど潰し終えれば鎮まる。だが鎮めの為だけに抱いているわけでもない。

魔にとっては絶頂の愉悦も極限の恐怖も美味なる蜜ゆえ、余つても平らげていた」

では「壊れずに済む」ことなぞ、ほとんど有り得ぬのだ。

バディッシュの楽しげな笑みが見えた気がした。

やはり彼は嫌いだ。

だが今はこの状況にすぎることが大事。

リゲイルもバディッシュと同じ魔王子であり、私の命なぞ羽毛より軽いものとしか見ていない。細い細い可能性の糸を、切らないようにたぐり寄せねばならない。

「鎮まってもいないんだな。それなのにやめた。そんなに不味かったのかな」

あまりおもねっては軽蔑される。

ただでさえ軽い命が、重さすらなくしかねなかった。ほんの少しの重みを維持しつつも、見逃しても惜しくもなんともない小物であることを印象づける必要があった。

できるだけさりげなく言う。

「それとも、平らげる前に食傷したのかも。そうだったら嬉しいが」

リグイルは冷ややかに言った。

「ここまで来てまだ命を惜しむか。往生際の悪いことだな」

「私の命はこれっきりなんだ。惜しみもする」

前にも、魔王子とこんなやり取りをした気がする。

既視感に捕らわれかけた心を現実に向け、リグイルを見た。

「見逃してくれないか」

「どうしたものかな」

彼の応えは先刻のものと同じだった。

「今の私じゃラトールに触れられただけで死んでしまうよ。随分魂を削られた。ほんの少し残った分くらい私に使わせてくれ」

嘘はなかった。

リグイルにもらった活力では回復し得ぬ、重く<sup>よど</sup>澱んだ疲れがあった。

「喰われた」という表現が相応しい、何か大事なものの喪失感。

「頼む。見逃してくれるだけでいい。あとは自分でやる」

「自力でここを出るといふのか。魔界の中心だぞ」

身を守るだけならなんとかなる　そう応えかけて、杖の変わり果てた姿を思い出した。

今の自分には本当に命の残り火があるだけなのだ。

それでも自分に選択権があるだけ、ましだった。

「隠れたり小細工したりするのは得意だからな。可能性がないってわけじゃない」

バディッシュがそう言った。好き嫌いとはかく、彼の眼力は確かだ。

リゲイルはしばらく考えるようにこちらを見た。

そして言った。

「そなたの命はラトーレのもの。残っているのならば私が判断すべきことではない」

「そなたの命はラトローレのもの。残っているのなら私が判断すべきことではない」

ではラトローレに委ねるといふことが。

胃が冷えた。

飽きた公算は高いが、彼の気紛れが次にどちらに転ぶかは不透明だ。

それより何より、ラトローレの尋常ならぬ白い美と、凄絶な欲望の滴りを目にするのが嫌だった。恐ろしくて仕方なかった。

「だが確かにそなたにはラトローレに次ぐ権利があるな。ラトローレの意図でないとすれば、生き残ったのはそなたの運だ。確かめてみるか？」

諦めかけていたところの提案で、反応が遅れた。

目をしばたき、バディッシュとは対照的に表情を動かさないリグイルの顔を見る。

「……え？」

リグイルは淡々と言った。

「簡単なことだ。楔みそぎの部屋はあと幾つかあって、常に贅ぜいが用意されている。ラトローレは満たされるまで順に部屋を廻って行く。

つまり、あと幾人か潰せばまたここに戻ってくるということだ」

楔ぎ。

贅。

満たされるまで順に。

潰せば。

人の身にしてみれば眩暈めまいのするような内容をさらりと流し、魔王子は続ける。

「なればここに次の贅を置く。ラトーレが気付かなければ、天に感謝でも捧げるがいい。あとは私は感知せぬ。

それとも残って自分で訊いてみるか？」

私は飛び起きた。

身体の反応は鈍く、なんとか身を起こした程度だったが、気分的にはそんな感じだった。

「いや、頼む。どこで待っていればいい？」

それとも逃げ始めてもいいか 再び既視感に捕らわれる。

話の展開が似ていた。

だが今回は、なんとかなる、かも知れない。

「私の中に。檻おじがある。贅に紛れている。そなたの折れぬ心であれば、強く望めば外に出られる。あとは好きにするがいい」

折れぬ心とは何のことか判らなかったが、彼が最大限の譲歩をしてくれたのは判った。

自然と頭が下がる。

「ありがとう、リグイル」

リグイルは初めて眉を少し動かした。だがそれが何の感情を反映しているのかまでは読み取れなかった。

司祭の掌が軽く私の額に触れる。

身体がぶれるような感触。

次の瞬間、ひどく荒涼とした世界に立っていた。

青白い空がどこまでも続く、乾いた荒地。

下層の戦場に似ていた。

違うのは、荒地に整然と石の柩けつこが並んでいることだ。

蓋ふたはなく、中には人や魔や天などあらゆる種族の者が死の静寂に包まれて安置されている。

ほとんどは人で、みな女性のようにだった。魔と天は女性か、中には中性らしき姿もあった。

目の端で明るさが変化した。見ると、柩の一つが白い光に包まれていた。

駆け寄って覗き込み、少女から女になりかけた容貌を確認するしかないかで、その姿が融け消える。

柩の底は水面のように揺れ、向こうについ先刻までいた部屋が透かし見えた。

寝台には消えたばかりの娘が横たわっている。

リグイルが額に触れると、娘の死に顔は生者の寝顔へと変化した。胸がゆるく上下し、頬と唇に血の気が戻る。

リゲイルは踵を返し、部屋を出て行った。

「……」

頭がぐらぐらし、膝をつく。

石棺のふちにかかる指が震えた。

顔を上げて見渡した大地に並ぶ、柩、柩、柩。

ここはラトーレの生贄の保管庫なのだ。

ここで眠る者たちの命はすべて、ラトーレのものなのだ。

彼はここから日々命を汲み出し、呑み干しているのだ。

こみあげてきた胃液をなんとか飲み下し、目を閉じて深呼吸する。  
生きるためには、ここから出なければならぬのだ。

億劫戦争おくしうせんそうで倦むほどの戦いをくぐり抜けてきた精神は、やがて必要だけの固さに立て直された。この世界の特徴を分析し、別の階層に移る手立てを探らねばならない。

しばらくして「檻」の概ねの構造を把握して、破るための術を組み上げているときに、背もたれ代わりにしていた空の柩が再び光を発した。

覗き込むと柩の娘が横たわる部屋が見えていた。

扉が開き、人の形をした白い闇が。





11 人にあらざるもの(前書き)

R15 / 残酷表現あり

## 11 人にあらざるもの

とっさに柩くわいから頭を離そうとしたが、押さえつけられたように動けなかった。

「見ているがいい」

リゲイルの声が耳を掠かすめる。

ラトールはゆっくりと寝台に歩み寄った。

娘を見下ろし、その額に触れる。

娘はぱちりと眼を開いた。

目の前の異形の美に、ひっと息を呑む微かな音が聴こえ。

そこまでだった。

ラトールが額から頬、そして首筋へと指先を滑らせただけで、娘の驚愕の色はとろりとした恍惚いっしょうに塗り込められた。鼻にかかった甘く濡れた声を上げ、まだ寝台の脇に立ったままの魔王にしがみつく。

魔王が肩に手をかけて寝台に押し戻す。

ラトールの掌が肌を舐めるだけで、どう見ても男なぞ知らぬ娘は幾度も身を震わせ、細く高い声で鳴き続けた。あまりの愉悦に彼の背に爪を立て、続きをねだっては与えられる快樂に狂ったように身み悶もたえる。

その、瞬間。

空気を裂いた絶叫は、等しく魂の悲鳴だった。

魔王がもたらすあり得べからざる快樂に肉体を蝕まれ、麻薬のごとき官能の刃に精神を切り刻まれ。

娘は悦楽とも苦鳴ともつかぬ声をあげ続ける。

この世の光景ではなかった。

何度も目を逸らそうとしたが、許されなかった。  
冷や汗が滴となって顎を伝い、石棺にこぼれた。

リグイルの疑問は当然で、自分が今生きている理由が判らなかった。

あんなの、何をしたって助かるわけがない。

いつしか娘が上げるのは、しわがれた苦悶の呻きうめとなっていた。  
貌かおは引き歪み唇から血泡を吹きながら、許容量を超えた愉悦に身体は反応し続ける。

「やめ……てくれ……」

ラトールか、リグイルか、どちらでもいいからこの地獄絵を止めて欲しかった。

だが魔王は行為を続け、魔王王子は私を石棺のふちに縛り付けた。

やがて娘はこときれた。

血の涙に汚れた貌も。

シーツを掻きむしって爪が剥がれて、なお何かを掴もうと曲げられた指も。

豊かな栗色から、老婆の白へと変わってしまった毛髪も。

人のそれではなかった。

ラトールはゆっくりと身を起こした。

シーツを半端にまとっただけの裸身には汗一つなく、その瞳は満たされぬ欲情の疼きに濡れた光を放っていた。

石棺を掴む指の爪が軋んだ。

彼の様子はまるで変わっていなかった。

部屋に入ってきた時と。

今、人一人壊してしまったこの時と。

ラトールは己の傍らに転がるものをまるで気にも留めず、物憂げに口を開いた。

「リグイル」

一拍置いて、僧形ネクラウツの魔王子が虚空より現れた。

「リリリ」

ラトールは言った。

「アーフィアは？」

氷の塊が喉に押し込まれた。

心臓が、止まる。

「アーフィア？」

「アーフィアがない」

## 12 失敗

頭ががんがん鳴り始めた。

心臓が口から飛び出しかねない勢いで脈打ち、目の前に火花が舞う。

魔王の目は床に散らばる黒いかけらに向けられていた。

「ここにいた。残しておいたはずなのに」

「」

一刻の猶予もなかった。

リグイルは私の名を憶えていない。

彼がラトールに呼び出された時点で束縛は解除されていた。

術はまだ不完全だったが、どんな犠牲を払おうがこの閉鎖世界から抜け出すのが先決だった。

地面に試し描きしていた魔方陣に呪力を込めて発動させ、転移の術を上乗せし。

だが魔力の増幅を杖に頼れず、呪文を唱えなければならなかったのが致命的な遅れとなった。術が完成する前にリグイルの魔力の網が全身を包んだ。力を蓄え損ねた魔方陣が崩壊する。

身体がぶれるような感触。

立っていたのはリグイルの脇だった。

七歩向こうに白い魔王が犠牲者の骸を従え座むくろしていた。

後退ろうとした動きをリグイルが阻む。

ラトールレがゆったりと微笑んだ。  
身の竦むすくような笑み。

「やあ、アーフィア」

「お聞かせ願えるか」

リグイルが発作でも起こしたかのように震える私の腕を掴んだまま、主に問うた。

「何故残された。鎮めもせず中断なされたのか」

ラトールレは床を指した。

「御覧。こんなことを考えた者はいない。少し歌ってみたが折れなかった。曲がりもしない。堅いけどしなやかな心だ」

漆黒の瞳がぞわりと名状し難い光を放つ。

「失敗した。先に意識をほとんど奪ってしまった。苦しみのない魂が欲しかったから。」

でもアーフィアはこのままやったほうが楽しそうだ」

ラトールレは視線を移した。

「おいで。アーフィア」

動けるはずがなかった。



リグイルに促され、手を離されると同時に前につんのめる。  
そのままばったり倒れて床に伏した。

「アーファイア？」

「……助けて」

突っ伏したまま呟いた。

恐ろしくて怖くて絶望的で、自分が先刻壊されてしまった娘と同じ、何もできない無力な小娘であることを骨身にしみて味わっていた。

「そんなの、嫌だ。怖い……」

折れないと言われる理由が判らなかった。

私の心は今確実に折れている。

「助けて……」

リグイルに引き起こされた。

ラトールは目を閉じ、何かを感じ取るうとしているようだった。

目を開くとこちらを見て微笑んだ。ほとんど恍惚と。これから呑み干す美酒の味を確かめ、確認した笑み。

「濁りがない」

悲鳴を上げて身をよじった。

リグイルが一言呟き、私の動きを縛った。

「行け」

命令に従い、ぎくしゃくと両足が動き、死への旅路を降る。

リゲイルの術は、私の心まで縛ってしまったようだった。麻酔がかかったように恐怖に膜がかかり、絶望が心を侵食して諦めという色に塗り替えていく。

ラトーレの言葉は、私の死が多大な苦痛の果てに与えられることを意味していた。

意識を残したまま、苦しみに満ちた魂をすする　そう言ったのだ。

ふとバディッシュの餞別せんべつの言葉がよみがえった。

「せめて苦しませぬよう祈ってやる」

最初の時に諦めていれば、確かに苦しむことはなかった。往生際が悪すぎた。小賢しすぎた。

次があるなら。

魂を傷つけられては転生はありえない。しかも私の魂は喰われてしまうのだ。

だが判っていても、ふとそう考えてしまっていた。次の生があるなら、と。

嫌ったりしない。

何を考えているのかよく判らないが、残念と言ってくれた。選択の余地をくれた。時間をくれた。

そして何より、私の死に様を気にかけてくれた。

憐れんでくれてありがとう、バディッシュ。

「憐れむ？ バディッシュが」

はっと我に返った。

今しもラトールに己を委ねるところだった。

白い魔王は私の焦点が合った目を、ほんの少しの興味を以って見ていた。

それが、恐ろしかった。

制御の主導権が戻り、動きが止まった。

もうどうしようもないのは判っているのに足が震え、棒を呑んだように最後の二歩ほどが進めない。闇色の瞳をただ見返すだけだった。

ラトールが言った。

「何故？」

自分でも驚いたことに、応えることができた。

ざらつく喉がかすれた声をしぼり出す。

「判らない……が、そんな気がした」

口を利くと恐怖をわずかに抑えることができた。

あと二歩。

もう助からない。

自棄やけな気分が急に膨れ上がり、魔王に向かってぶちまけた。

「勘違いだつて、そう思っていれば気が休まるんだ。それぐらい、いいだろう?」

浮遊の術に失敗したときのような凄まじさで乱高下する精神状態に、我ながら救い難いものを感じた。

どのみち落ちは決まっているのでどうでもよい。怯えているよりは気分的にましだった。

だが忘れていた。

落ちは同じでも展開は動く。予想外に。

「バディッシュユ」

ラトーレが言った。

### 13 馬鹿だなお前

「バディッシュ」

一呼吸ほどで、返事があった。

「なんだ」

振り返ったその先、リゲイルの横に大剣を担いだ魔王子は立っていた。

「なんか用か」

言いさした言葉が止まる。

私を認識したとおぼしき刹那<sup>せつな</sup>目を軽く見張り、続けて室内に視線を走らせた。

ちりばめられた情報を収集、総合し、正確無比に組み上げて状況を読み取って。

次の瞬間、彼は爆笑した。

主君の前であることも気にせず、腹を抱えんばかりに身体を折って大笑した。

「馬鹿だな、お前。また、やったのか」

切れ切れに言い、さらに笑う。

終いには魔王子の身であるにも関わらず、息を詰まらせ、咳き込んだ。

「本つ当に、面白い奴だ」

「随分お気に入りだな」

放っておくと永久に笑っていきそうな気配のバディッシュを、リグイルが止めた。

「ん？」

まだ去らぬ発作に身を震わせつつ魔戦士は横を向く。

「何がだ？」

「その者だ。そなたの憐れみに感謝を捧げていたぞ。そなたにそのような心があるとは知らなんだが。それともその者の勘違いか」

「感謝？ 俺にか」

また笑う。波は去っていないようだった。

「そいつは傑作だな」

私はぼんやりと彼の笑いを眺めていた。

ラトーレの意図が判った。

魔王の贅に安らぎなど必要ないのだ。なんの救いもない、孤独と絶望に押し潰された魂の狂える旋律をこそ、彼は求めているのだ。

のろのろと頭を戻した。

ラトーレの横には、喰われてしまった哀れな娘の骸があった。

自分の属する世界はこちらだ。

苦痛に満ちた不帰の旅路だが、出発をこれ以上遅らせる意味はない。

ラトーレの顔は見たくなかった。  
戦士の屈託のない笑いを背に骸を目指して二歩進み、身体半分回して寝台に腰を下ろした。

魂はくれてやる。でも、全部は、やらない。

俯いたまま胸の裡で呟き、己の心を手放していく。

往生際は見極めた。もう惜しむ必要はなかった。

あとは意地だ。

バディッシュが急に笑い止み、言った。

「だがその通りだよ。俺はそいつが気に入ってた。ラトーレじゃなきゃ折れないような心がな。

感謝は初耳だが、憐れみはくれてやった」

声が途切れる。

目の前が翳<sup>かげ</sup>った。大きな手が顎にかかり、上向かされた。  
バディッシュの口の端が、嗤<sup>わら</sup>いの形に歪む。

「……いや、ラトーレにも折れないか。本当にいい根性してやがる」  
「

背後から肩を掴まれ、引かれた。  
重心がずれた身体はバディッシュの手を離れ、引かれたほうに倒れた。

魔王の膝の上。

今の私の感知することではなかった。

否、もはや私は何も感じることはない。

聞こえるし、見える。

傷つけられれば悲鳴を上げ、交われれば愉悦の嬌声を漏らす。

魂は絶望に染まり、苦痛を混ぜれば素晴らしい美酒があふれよう。

だが魔王に生きながら喰われる恐怖に碎かれる心はなかった。

愉楽に溺れ、惨めさに泣きながら、更なる麻薬を求め墮ち行くべき心は。

それが最後の選択。

魂と身体は、ラトーレに。

だが一つくらいは好きにする。

「……アーファイア」

ラトーレが囁いた。

膝に乗る虚ろな瞳の頭を抱き、額に触れるほど唇を寄せて。

「アーファイア」

彼の言葉はそのまま旋律となり、無明の世界に流したはずの私の心を締め取った。

歌。

ラトーレの絶対の魔法。



「アーファイア、戻れ」

目の焦点が合って見えたのは、二つの漆黒だけだった。  
何かなんだか判らず瞬き、それが離れ始めて全体像を掴んだ時点で息を呑んだ。

魔王の瞳。

魔王の貌。

魔王の膝の上。

起き上がろうと腹筋に力を込めたが、頭を抱く腕が邪魔をした。  
顎に触れる指、頬に感じるしなやかで力強い腕。  
全身が熱くなるような快さが、涙が出るほど怖かった。

「面白い。確かに」

「だろ？」

## 14 買い被り

「面白い。確かに」  
「だろ？」

ラトールレの呟きに応えてバディッシュユが笑う。  
いつの間にかリグイルも傍らに立っていた。  
魔の最高位者三たりに見下ろされながら、私は歯を食いしばって  
侵食してくる快感に耐える。

「ほら、今もだ。判つてても往生際悪いんだよな」

言いながら、魔戦士は満足した猫のように目を細めた。  
楽しげに、それどころではないこちらを見る。

「一段でもずれてればなあ。いつかここまで自力で上がって来れた  
かもしれないが」

「魔王子にか」

「ああ。少なくともこないだやられた馬鹿共よりはな」

リグイルの平坦な声に、凄みのある笑みで応える。

「こいつ、俺とお前は強すぎて嫌いなんだと。で、ラトールレだけが  
怖くてしょうがないんだそうだ。つまりラトールレの強さだけが許容  
できないってことだ。

普通は自分より強い奴なんて、全部同じに見えるもんだろ」

何を言い出すのだ。

こんな状況で買い被りを披露するのはやめてほしかった。

「そんな……意味じゃ、ない……」

弱々しい声は自分でそれと判るほど熱っぽく、艶つやを含んでいた。

「口が利けるか。大したもんだ」

バディッシュは望みもしない方面に感心し、言った。

「憶えてるか？ お前、俺に剣向けられたとき防ごうとしてたよな。プレッシャーもかけてみたが、耐え抜いた。あの階層止まりの奴らじゃ絶対できないことだ。」

だがラトールに狙われてた間は逃げ回ってたらしいじゃないか。俺の前には立てるが、ラトールの前には出たくない。そういうことだろ」

「判っていれば、あなたの前だって、出……」

疼きを抑えきれなくなったのか、ラトールが服の合わせ目からずるりと胸元に掌を這わせてきた。

息が詰まり、声が切れる。

言葉の代わりに思わず甘い喘ぎが漏れた。

快樂の細波と耐え難い恐怖に心が軋み、涙が頬を伝う。

「ラトール」

バディッシュがふと真顔になって言った。

「俺はこいつを一度で使い棄てるのは勿体無いと思う。少し小分けにして喰ってみたらどうだ」

ラトールは軋みをゆったりと味わいながら、目を上げた。

「憐れみか」

「んー、まあ、そうだな」

バディッシュは己の内部を確かめるように少し間を置いてから認めた。だが一転、その顔に悪戯小僧の笑みが浮かぶ。

「それだけじゃないがな。気付いてるか？ リゲイル」

急に話を振られた魔僧は、突然のことにも関わらず間髪を入れずに頷いた。

「先程からよもやとは思っていた。確信したのは今だがな」

「そうだ。ラトール、自分で判らないか」

バディッシュは、楽しみに主君を見下ろした。

贄を抱き、骸を従えた魔界の王を。

「あの時以来では、一番落ち着いてるぞ。交わってもいないのにな。ずいぶんと効率のいいことじゃないか」

「」

ラトールは膝に乗せたものに視線を移した。

私には彼らの話す内容は、もはや理解できていなかった。

熱くて苦しくて気が狂いそうだった。

魔王の指先が鎖骨の線をなぞり、堪えきれず頭を支える腕に頬を

押し付ける。

その感触がまた魂が融けそうなほど心地よかった。

いや、融けているのだ。

すすり泣きが漏れる。

すべてを味わってから魔王は巻き付けていた腕をほどいた。  
顔を上げて言った。

「と言つてもな。手加減は苦手だ」

「そんなの自分にやらせればいい。面白いこと、できるようじゃな  
いか」

バディッシュはかがみ込み、私に言った。

「起きろよ。もう少し長生きできそうだぞ」  
「……」

突然の解放にまだ反応できなかった。

疲れ果てて動けないと言ったほうがいいのかも知れない。

もともと私の余力は、数時間前にリグイルに貰った薬の分しか  
なかったのだ。

不幸なことに実働しているのは、この状況をせつせと作り出して  
しまった、頑固で往生際の悪い頭だけだった。

「こんなの、嫌だ……」



## 15 生殺し

「こんなの、嫌だ……」

「可哀相にな。憐れんでやるよ」

誠意のかけらもない口調で言い、バディッシュは反鏡杖と呼ばれていた金屑を示した。

「あれだ。他のもできるか？」

「嫌だって、言っただろっ」

バディッシュは主君に笑いかけた。

「できるみたいだぞ」

私は金切り声で喚わめいた。

「逃がすって言うても一度は私を通るんだ！ 毎回こんなふう生殺しにされるなんて御免だ！」

起き上がって抗議を続けようとしたが、ラトールが肩に触れた。

鳥肌が立つような戦慄にびくりと動きを止めると、魔王は笑んだ。

「いい子だ、アーファイア」

結局魔王の膝枕のまま、弱々しく抗議を続ける。

「魔法の基本が判っていれば、誰でもできることだ……。ただのテクニクだよ。」

それに魔王陛下は、多分杖が砕けた時点で止めたんだろう。あれは私の一部みたいな物だったから、同調率が高かったんだ。普通なら物の前に人がいかれる」

魔界の稀少金属カルデナデ。

人なぞより遥かに頑丈で魔力容量も大きい。

同じ負荷をかければ、人のほうが早く壊れるのは当然だ。

「別の、例えばバディッシュの破天黒流とかを焦点にすれば、何もしないよりは確かに長持ちはするだろう。でも限界は人のほうが早い。」

限界を測れないのなら、気が付くのは人が壊れてからということになるな」

自分の言っていることに眩暈がしてきた。

「一人当たり長持ちしたほうがいいと言うなら、推奨される方法じゃないのか」

人を効率よく喰らうための方法を、人が講釈たれるとは。

「私に限定したことじゃない」

「意識は殺がれていたはず。よく持続できたな」

リグイルが訊いてきた。

「だからテクニクだ。トランスに半分だけ入って状態を固定する。普通の人には難しいかもしれないが、魔軍で半年生き残れば身につく。戦いながら魔法を使うのと根本的には同じだよ」



「ラトローレに意識千切られてか」

「それが問題かな。だが魂を丸呑みするのでもなければ、多少は意識を残すだろう。私を引き摺り戻したくらいだし。最初の一瞬、ほんの少し状態維持に心を向けなければいい。実際私だって九分九厘飛ばされてしまったが、望むだけなら何とかできた。」

誰だってこんな死にかたしたくはないんだ。うまく生き残れば助けてやるとか言えば、みんなどうにかするに決まってる」

だがそこで何故かバディッシュが笑いだした。無表情なりグイルまでが苦笑している。

そして真上ではラトローレがゆったりと笑んでいた。

「何かおかしいこと、言ったか……？」

嫌な感じ。

笑って言葉を出せぬバディッシュに代わり、リグイルが言った。

「残念ながら、それはそなたにしかできぬな」

目をしばたいた。何を言われたのか一瞬判らなかった。

その反応にバディッシュがさらに笑いを重ねる。

「何故？」

当然の問い。

「折れた心にはできる芸当ではない。」

そして贅でラトローレの前に出て、心折れぬ者はまずいない。そういうことだ」

まただ。

彼らは何を見てその判断を下しているのか。

「私も折れていた。あなたに連れて来られてから、何度完全に諦めたか判らないよ。偶然こんなことになっているが。今だって恐ろしい」

「折れてねえよ」

バディツシユは本当に楽しそうだった。

「それに偶然だったのか？」

俺を惜しませた。ラトーレの食事を止めさせた。リグイルに手を貸させた。

そして土壇場でまた展開を変えさせた。大した偶然だよ」

列挙されると確かに在り得ざる状況になっているような気がした。そう思ってしまったことを慌てて否定する。頭を振り、反論した。

「私がさせたような言いかたをしないでくれ。リグイルには頼んだが、他はあなたがたが判断したことだ。私はただ……」

「足掻いた」

リグイルが継いだ。

「諦めてもいた。だが糸の如き光明が見えるとそれにすぎり、また足掻いた。しなりはするが、撥ね返るように立ち直る。そしてすくすく少なからぬ固さを取り戻す。

折れぬとって判らぬなら、そなたの心は挫けぬのだ。墮ちぬと

言ってもよい」

ついと指差す。

ほんの少し前まで娘であったものの肉の殻。

「見ていたはず。ラトールが触れた贅はその時点で墮ちる。心は折れ、あるものと言えば、目の前の魔王のもたらす愉悦に対する狂った欲情のみなのだ。

他の何かに向ける心や、ましてやその物に愉悦を一滴たりとて逃そうと考えることなぞあるまいよ」

「というわけだ」

自分が特別、という想像もしなかった烙印らくいんを押されて絶句する私を横目に、バディッシュがにこやかに言った。

「ちょっとくらいの無理は許してくれるようだぞ。ラトール、できそうか？」

魔王が頬に触れた。

悪寒にも似た愉悦に身をすくめた私の何かをすすり、微笑む。

「杖が割れた時までいいというのなら、判る。あれを超えねばいいのだね、アーフィア」

ぐらりと脳味噌が揺れた。

杖が割れた時というのは、即ち私の限界の時だ。

この言葉だけで、挫けるには十分だった。

「そんなの嫌だ……」

喉に絡んだ声しか出なかった。  
毎回あんな目覚めかたをして、果てしなく飼い殺されていくのか。  
絶望的で、救いがない。

「それに、無理だ……。希望がないなら、耐えることなんか、できない……」

その通りだ。

光明が見えれば、すがりもする。  
だがどう足掻いても、闇しかないと知れば。

「私だって、堕ちたほうがましなら、堕ちる……」

どちらかという衝撃に打ちのめされたあまりのうわ言だった。  
だが周囲の三人は聞いていた。

「今まで希望があったって思ってる辺りが面白いよな」

可笑しげな魔戦士の感想。

「だが、一理はある」

静かな魔僧の声。

「アーファイア」

ラトーレがやわらかく囁いた。  
歌うように。

「では希望をあげよう」

## 16 ゲームスタート

「では希望をあげよう」

私ははっと見上げた。

「え………？」

「耐えるがいい、アーフィア。我が愉悦の刃から」

ラトールは言った。

「心が折れればお前の負け。贄として自ら魂を差し出すことになる。だがいくら美味でも同じ酒は飽きる。その時はお前の勝ち。正気が残っていればどこへなりとも行くがいい」

「………あ」

魔王は微笑いながら自分の髪をひとつまみ抜き取った。そして横たわる私の腕を取って引き寄せると、その髪を指に巻きつけた。

「これがお前の命綱」

接触の快感に耐えながら見ると、それは白くぼんやりとした輝きを放つ金属の指輪だった。

ラトールは身体をずらして私の頭をどけ、寝台から降り立った。

「今は無理だな」

いつの間にか服を纏い、マントをふわりと翻す。

「リゲイル、アーフィアはここに。バディッシュ、出る。来い」  
「いいのか」

バディッシュに問われ、魔王は目をそむけたくなくなるような優雅な笑みを浮かべた。

「物足りない。神を幾つか墮とせば程好く酔えるだろう」  
「ほう。じゃあ雪辱しに行くか。こっちの馬鹿共がやられて以来、マルト神群があそこを拠点にしているようだぞ」  
「ではそこへ」

魔王と魔王王子は溶けるように消え失せた。

「……」

私は身を起こした。  
思った通り、消耗してひどく体が重かった。

リゲイルが手をかざした。  
寝台で忘れ去られていた骸が白い炎に包まれた。  
見る見るうちに人の形が崩れ、白熱の塵と化していく。数秒で炎は消え、白いシートの上には何かがあったという痕跡すら見出すことはできなくなった。

ぼんやり眺めていると、リゲイルは続けて虚空から水差しとグラスを取り出した。

寝台脇の卓にそれらを置き、こちらを見た。

「精気を凝ったものだ。檻から供給される。心までとは行かぬが、気力と体力の足しにはなるう。好きなだけ飲むがいい」

檻から。

「……人の精気をすすって永らえろと言うのか。人である私に」  
「一度飲ませたぞ。それに、そなたが選んだのだろう」

リグイルは静かに言った。

「手加減すると言っても、ラトーレにその気があればだ。最低限持たせねば危うい境界なぞ簡単に踏み越えるだろう。」

心が折れなくとも身体が保たねばそなたの負けには変わりない。生きたいのではないのか」

唇を噛む。

「……逃げられないのか」

「勝手にするがいい。それも選択の一つだ。」

ただし命じられれば私はそなたを狩る。バディッシュは何いも立てずに狩るだろう。」

そして捕まれば逃亡に消耗しきったそなたを、蓄積した疼きに苛まれるラトーレが抱く。賢いとは思えぬが」

指で淡く光る指輪を見る。

外そうとしたが、糊で付けられたように動きもしなかった。茫然と呟く。



「なんで……こんなことに……」  
「女でなければとしか言えぬな」

リグイルは一度置いた卓の上の水差しから水の色をした液体をグラスに注ぎ、差し出した。

受け取って飲む。

冷たく甘い液体。全身に染み渡る清冽な活力。

「だがそれも要因の一つに変わりはない。

女だった。魔王軍に入り、我らと同じ戦場に居合わせた。ラトールを避けるあまり目を付けられた。迎えに行ったバディッシュに気に入らせた。

生まれる前まで行って運命の帳面を書き直しでもしない限り、逃れ得るものではないな。今となっては、逃れたければ今生を諦めるしかあるまいよ」

グラスを握る手に力がこもる。

「それだけは嫌だ」

「死ぬのがか？」

「私が決めて、その結果にもたらされるのが死であるのなら、構わない。

だがこれはなんだ？ 私の意思は何一つ関わっていない。絶対に、納得できない……！」

往生際が悪い、と言われた。

だが一縷でも希望があるなら、すぎる。ラトールやバディッシュに仕向けられたものだとしても。

そして。

「生き残ってやる。それで、あなたたちと縁を切る。それが私の意志だ」

リグイルは言った。

「勇ましいことだ。せいぜい頑張るのだな」

「先刻から励ましてくれるな。あなたも私を“気に入って”くれたのか？ バディッシュのように」

今しがたの一連のやりとりで、あの魔王子に対する評価は元に戻っていた。

彼は嫌いだ。

来世があっても、多分。

リグイルは無表情に応えた。

「いや。面白い存在とは思うが。ラトーレが保たせてみると言うなら、必要な処置はする。」

「私にすればそなたは珍しい贄だ。それだけだな。不服か？」

「いや」

少しほっとした。

やはりバディッシュの行動は異常なのだ。

「では眠れ。ラトーレの意思ゆえ、ここはお前の部屋だ。ラトーレがお前を求める時はここに来る。必要な力を蓄えておくがいい」

リグイルは踵を返した。扉から、歩み去る。

扉が閉じると静寂が訪れた。

私はグラスの中身を干した。

一瞬あの荒涼とした保管庫に眠り続ける者たちがよぎったが、頭を振って押しやった。

まだ、足りない。

水差しから必要な量を注いで口に含む。

そして寝た。

今はラトールレのものである自分の命を取り戻すために。

## 17 悪夢の狭間で

ラトールはよく来た。

ふと気が付くと部屋にいて、戦いの高揚を私の全身に注ぎ込み、また知らぬ間に出て行った。

幾度死にかけたか判らない。

魂を抉られた疵を癒すための泥の眠りから覚めた途端に、ラトールの冷たい昂ぶりを再び注ぎ込まれることもあった。

指輪に逃がすための僅かな集中の間も与えられず、神々を狂わせるに等しい妖しの魔酒を己の精神のみで浴びねばならぬときもあった。

彼の気が治まらず、限界の近い身体を精気の水を満たした浴槽に浸され、その中で続きを求められたことすらあった。

それらが一再ならず私の精神を崩壊寸前まで追い込んだ。だが臨界前に気付いたラトールは必ず手を止めた。

平衡を保てず、現実と悪夢の狭間でうなされもした。

そんな時はラトールは微笑って歌い、悪夢が現実であることを教えてから己の欲望を果たした。

魔王は私の愉悦を喰らい、

涙をすすり、

苦悶を愉しみ、

悲嘆を愛でた。

私の心以外はすべて奪い、孤立無援の心も隙あらば掻き乱した。

私は指輪という命綱にしがみついてか細い希望にかじりつき、そのいじましさを魔王は笑った。

そんな綱渡りにも似た時が過ぎ　。

ある時。

私は気付いた。

気付いて　しまった。

ラトーレの訪れを待っている自分に。

魔王の指先がもたらす甘い戦慄に、怯えるよりも陶然としている  
己に。

彼の抱擁をひとときでも長く味わっていたと考えていることに。

自分の心が、折れてしまっていることに　。



18 決着

ラトールは気が付くと枕元に立っていた。

寝台から身を起こした私を抱き寄せ、唇を重ねる。

力を失った身体を再び横たえながら自らも覆い被さり、そこでからかうように囁いた。

「アーファイア、いいのか？ 折れてしまうよ。今日はたくさん斃したから。少しくらいでは鎮まりそうもない」

私は顔をそむけた。

触れられているのが快かった。

彼が傍にいるのが嬉しかった。

そんな自分が腹立たしいのに、もうどうしようもなかった。

「……もう、いい」

しぼり出すように言う。

「アーファイア？」

「あなたの勝ちだ、魔王陛下。私の心は、折れた」

涙がこぼれた。見られたくなくて、さらに顔をそむける。

「もう、駄目だ。怖いのに傍にいたい。気が狂いそうなのに抱かれていたい。あなたのことが、好きだ」

腕を上げて掌を差し出した。  
指に光る、指輪。

「もういい。これは、いらぬ。終わりに、してくれ……」

ラトールは私を見下ろしたまま、動かなかった。  
私は顔をそむけたまま、動かなかった。

永劫とも思える時間が過ぎる。

そうして、ついにラトールは言った。

「ではやっと終わったか」

冷ややかで、凍るような声だった。

こんなに冷徹な響きは聞いたことがなかった。  
のろのろと見上げると、慈悲のかけらもない冷たい笑みを浮かべた魔王がいた。

ラトールは指輪なぞ見やりもしなかった。下らないものを見るように、私を見下ろしていた。

その、羨うらやまみに満ちた声。

「永久に折れないかと思ったよ。さすがに飽きた。だが私に折れない心があるなぞ許せなかった。勝ちとは行かないが、引き分けぐらいにはしておきたいと思ってね」



「……え？」

飲み込めなかった。

呟いた私から、ラトールは離れた。

関心を失ったように、ひとかけらの未練もなく。

「先に飽きたのは私だ。約定通り、どこへなりとも行くがいい。だが魔王の報復も与えよう。折れた心に苛まれたまま生きるがいい」

ふわり、とマントが現実味のない優雅さで翻り、魔王は部屋を歩み去った。

扉が閉じる。

何日待っても扉が再び開くことはなかった。

私は泣いた。

そして一月後、自分で扉を開き、城を去った。

19 古傷（前書き）

残酷表現あり

## 19 古傷

それからかなりの年月が過ぎた。

その後、魔王の城を出た私はどうにか元いた階層まで戻り、登録所に行つて自分の記録を抹消した。

億劫おくじょうの戦争だ。戦いに倦うむ者も少くない。

年棒から残りの期間分差し引いた額を受け取り、階層を降つて行った。

戦火の及んでいない階層に転移を重ねて、自分がどこにいるかも判らなくなつた頃、自然にあふれた辺鄙な世界を見つけて腰を落ち着けた。

最初のうちは魔王に抉られた傷に耐えかね、よく泣いた。

階層を降る途中で、己の限界を知つて除隊を決めた同期の戦士イドウと遭い、一緒に来ていた。彼は理由も聞かずにただ見守り、時折無骨に慰めてくれた。

その世界で一年も過ぎる頃には生傷も乾き始めた。

忘れはしないが疼くこともある古傷として、身体の一部に馴染んできた。

ある日イドウが真っ赤な顔で、鼻先に庭先の野原で摘んだ花の束を突き出した。

私は笑つて花束を取り、彼の求婚を受け入れた。

幸せな日々が穏やかに過ぎて行つた。

そしてある夕方。

私は夕食の材料を森で調達して帰ってきた。

近くの森は二人分の生活の糧を豊かに供給してくれていた。木の  
実と茸を籠に詰め、イドウの待つ家に向かう。

今日は彼が調理当番で、昼過ぎから何かの肉を煮込んでいた。

あと少しで家の戸口という時、今通って来て無人のはずだった背  
後から声をかけられた。

「こんなところにいたか」

既視感。

嫌な感じ。

聞き知った声。

振り向いた先に、抜き身を肩に担いだ魔王子が立っていた。  
太い笑みを刻んだ唇が楽しげに開かれる。

「よう。迎えに来たぜ」

バディッシュは言った。

私はじりじりと後退った。

久しく平和の裡うちに暮らしていたにも関わらず、彼のまとう不穏な雰囲気ふゑんきに私の意識は研ぎ澄まされていく。頭が急速に回転を始めた。

なぜこんなところに来る。

今更何を言い出す。

「今更なんの用だ」

用心深く問う。

「だから言ってるだろう？ 迎えに来たんだよ」

バディッシュは相も変わらぬ不敵な調子で応えた。

威圧感が空気の密度を高め、手足に蛇のように絡み付く。

「搜したぜ。来てもらう」

「今更なんの用だ、と訊いた」

家に近づくのは嫌だった。

だが魔王相手にはあまりにも間合が狭すぎる。

すり足で道を外れながら、後ろに下がり続ける。

「私は魔王から直々に自由を賜ったんだ」

ずきりと痛む古傷。

だがもう耐えられぬほどではない。

「知っているはずだ」

「知っているぞ」

バディッシュユが笑った。肉食獣の笑み。

「だから来たんだ。俺の一存だがな」

動けば肌が切れそうな、緊迫した空気だった。

「意味が判らない」

バディッシュユがかなり本気でプレッシャーをかけてきているのが判った。

後退る。

「それに、終わったことだ」

「ああ。終わらせた」

バディッシュユは唇を歪めた。面白くもなんともなさそうな嗤いだった。

「だがルール違反だぜ。お前も、ラトーレも。俺とリグイルの意見は違う」

「リグイル……？」

その時斜め後ろから声がした。避けていた家の戸口。

場に相応しくない、平凡な日常を含んだ呼びかけ。

「アーフィア、どうした？ 何か……」

「イドウ、駄目だ！ 逃げろ！」

叫び、魔戦士の威圧を振り切つて駆け出す。投げ捨てた籠から木の実がばらばらとこぼれた。

だが私は数歩。

イドウは何が起こつたかすら判らなかつただろう。

目の前でイドウの身体が爆ぜ割れた。

手を伸ばした数十歩先で、真紅の華が開いたように彼の身体は四散した。

肉片と体液の飛沫は、落ち始めると同時に白い炎に包まれた。大地に触れることもなく、イドウであったものは白熱の塵と化していく。

炎が消えた跡には何も残っていなかった。

イドウは、夫は、何も。

伸ばした手を下ろすこともできず立ち尽くす目の前、イドウの立っていた背後に僧形の魔王子が立っていた。かざされた手。

形は同じでも意図は違った。

掴もうとした手と消し去つた手。

「派手だな」

背後から呑気な声があった。

リグイルは淡々と応えた。

「未練は要らぬ」

その瞬間、家が轟音と共に白炎に包まれた。  
短くはない年月が詰まった建物が、灰燼かいじんへと帰していく。

「どう……して」

一存、と言った。

バディッシュは勝手に来たと言ったのだ。

「どうしてあなたまで、来る……」

珍しい贄、ただそれだけ だったのではなかったか。

リゲイルは静かに言った。

「我らは億劫の遊戯に興ずる者。ルールの逸脱には厳しいのだ。戻  
ってゲームの決着をつけてもらおう」



## 20 裁定者たち

「我らは億劫の遊戯に興ずる者。ルールの逸脱には厳しいのだ。戻ってゲームの決着をつけてもらおう」

「引き分けだと、魔王が言った。それで充分じゃないのか」

彼<sup>か</sup>の者の声の、凍るような響きが思い出された。

夫を喪ったばかりだというのに、胸に鈍くきつい痛みが疾る。

「そのような。だが私とバディッシュの意見は違う」

魔僧の背後で渦巻いていた炎が消えた。

炎は家だけを燃やし、焦げ跡すら残していない。

私がこの世界にいた痕跡は、何一つなくなってしまった。

「私はラトールになんか、会いたくない」

脳裏に浮かぶ白く圧倒的な美。この世のものならぬ微笑み。胸が焦げる。

「かも知れんな。だがその理由が昔と違うんじゃないのか」

バディッシュが言った。

私は奥歯を噛み、俯<sup>うつむ</sup>いた。

彼は嫌いだ。

「そうだ。本当は負けだと思った。私は折れた。傍にいて、望みのままに喰い尽くしてほしかった。他の贄と同じだよ。決着はついてるんだ。」

私が生きていることが気に入らないのなら、あなたが今殺せばいい。同じことだ」

「えらい変わりようだな。あれほど往生際が悪かったお前が、自分から死を望むとは」

彼らの遊びに付き合う義理なぞなかった。  
投げやりに応える。

「折れたから。そして今また生きる糧を砕かれた」

「折れてるんなら、いいだろ。またラトーレに会えるぜ」

バディッシュはなんでもないことのように言った。

「来いよ」

頭に血が上る。

横っ飛びに二人の魔王子の間から出て向き直り、怒鳴った。

「嫌だ！ 行くものか！」

会いたくなかった。

惨めな自分が憤ろしかった。

無為にイドウを死なせてしまったことが悔しかった。

自分が嫌でしようがなかった。

そのすべての感情をぶつける。

「帰れ！」

魔王子たちから凄まじい妖気が噴き出した。

気迫。

彼らほどの魔はそれだけで敵を屠る力を持つ。弱き心を砕き、力及ばぬ者を跪かせる。

「来ないのなら、持つて行く」

リグイルの静かな声と共に魔法の網が広がった。

強大な魔の力を縫り合わせた霞網が、私の全身を包むように投げ掛けられる。絡め取られれば身動きすらもままならないだろう。

私は首に下げたラトーレの指輪を握り締めた。

彼に飽きたと宣言された時から、外すことができるようになっていた。だが捨てることはどうしてもできなかったのだ。

その指輪に集中する。

かつて命綱であった道具。一瞬で焦点を合わせ、魔術の方向を定め、増幅して解き放つ。

網がほどけ、輝く砂となって虚空に散った。

「帰れ……！」

バディッシュが剣を払い、一步出た。

太く凄惨な笑みと、瞳に浮かぶ獰猛な歓喜の色。

「やはりな。お前は他の奴らと、違う」

私は退る。

威圧のせいではなく、油断なく必要な間合を維持するために。バディッシュは嬉しげに嗤う。

「俺の同類だよ。人だったが、もう人じゃない。お前はこっちの存在だ」

「違う」

白銀の指輪は小さかったが、その魔力容量は昔持っていた杖とは比べ物にならないほど大きかった。魔王の指輪であり、魔王の精气を流し込まれた。

期せずして手に入れてしまったが、この上ない魔道器だ。

「私は人だ。あなたは嫌いだ」

「俺はお前のこと気に入ってるよ。大いにな」

バディッシュは剣をかざし、振り抜いた。

悪気をはらんだ衝撃波が殺到する。

私は指輪の魔力を、使い慣れた方法にさらに意図を込めて具現させた。

属性まで反射して、聖気と化した衝撃波を魔王王子に送り返す。

バディッシュは正面から受けた。

まるで心地よいそよ風を浴びているとでもいったふうだった。

「悪くないぜ、アーフィア」

愛おしさすら感じさせる口調で呟き、一気に間合を詰める。

「来いよ。ここはお前の世界じゃない」

私は弾力のある盾を発動させた。

バディッシュの突進に弾かれ、私の身体は後ろに吹っ飛ばす。直前

までいた空間をリゲイルの力が疾り抜けて行くのが視えた。  
滞空している間から次の術を発動、階層移動を試みる。

だがリゲイルがそれらの術を遮る別の網を広げていた。  
地面に転がって何とか体勢を立て直したその首筋に、破天黒流の  
禍々しい刃が後ろから押し付けられた。

「動くな」

一般的な脅し文句ではなかった。

紋様の蠢く刃が、接触面から毒にも似た呪いを注ぎ込んだ。

片膝をついたまま身体を奪われた私の前に、二人の魔王子  
が立った。

「やはり足掻いたな。変わっていない」

「面白いよなあ。一緒に戦場で戦ってみたかったが」

それぞれ勝手な感想を言って、跪いた姿勢で固まっている私を見  
下ろす。

バディッシュがにやにや笑いながら言った。

「抱いて行って欲しいか？ 引き摺って行って欲しいか？」

睨みつける。

「首を切って持って行け。ラトーレの勝ちが確認できればいいんだ  
ろっ」

「じゃあ好きにさせてもらっぞ」

バディッシュは大剣を収めて屈み込み、軽々と私を抱き上げた。

立ち上がってリゲイルを見る。

「戻るか」

## 21 あちらとこちら

「……どうしてこんなことをする？ どうして私なんかにかたわるんだ」

忘れもしないが、終わったことだ。

戦いに明け暮れた年月も、魔王に囲われた出来事も、もう過去のものだった。今の生活に入ってからの年月だって決して短くはない。

「どうして今更来るんだ」

「ラトールレの選択だからな。尊重してみたが」

魔王子は歩き出す。

私を抱いたまま、一歩ごとに階層をまたぎ越えながら。

「こここのところ戦況が悪くなってきてな。魔王子はお前がいた頃6人一度にやられて以来増えてないし、俺とリグイルだけじゃさすがに手が回りきらん。それでな」

「……………」

なんの話か把握するまでに5階層は通り過ぎた。

「……………それは私に関係のある話なのか？」

「そなたの居場所は概ね把握していたが、戦況が変わるまで待ったのだ。久遠の平穩を求める天軍と違って、我らは永劫に戦っていただけだ。勝ちすぎても仕方がない」

かなりとんでもないことを聞かされている気がしたが、理解の糸

口を得られないことに変わりなかった。

「……だから」

「そう言えばお前、あの男と子は成せたか？ 確か前に欲しいとか言ってたよな」

唐突にバディッシュが話を変えた。

イドウ。

消されてしまった夫。

あまりの無神経さに身を強張らせると、バディッシュは楽しげに笑った。

「いたとしても旦那ともども記憶の世界の住人だがな。どうだ？ 忘れる前に教えるよ」

はらわたが煮える、という表現がどんな状態かと問われれば、まさしく今の気分がそれだった。

「あなたには、関係ない……」

「できるわけがないよなあ。ラトールにあれだけ犯されてればな。子孫残す必要なかない身体になつてるはずだ。」

最初からあんな年寄りと結婚したわけじゃないだろ？」

朗らかに言うバディッシュの腕に噛み付いてやりたかった。

だが彼の言葉は真実の棘とげとなって心に刺さる。

同じ世界から、同じ時期に魔軍に入営した人間同士であるにも関わらず、イドウと私との間には歲月の重みに差があった。



億劫戦争は時と世界にまたがるため、兵士たちの「時」は間延びし、ずれる。

それを考慮に入れても差は開きすぎだった。老いを兆したイドウに比べ、私の「時」はあまりに間延びしていた。

まるで、止まっているかのように。

遅すぎるとは思っていた。

戦争から離れて数年後からイドウは老いてきていた。一年ごとに、人に相応しい速度で。

だが私は。

説明がついてしまっても信じられなかった。信じたくなかった。

「止まって……いる……のか」

「言つたろう。お前はもうこっちの存在なんだ。相思相愛まで満足することだな」

彼の言葉はいちいち癪に障った。

「夫を殺しておいて、そう言うのか」

バディッシュは鼻で笑った。

すべてを見透かす理解力を秘めた目を不敵に細める。見えはしないが、それが判った。

彼は言った。

「夫か。いい響きだ。だが旦那はともかくお前のほうは本当にそい

つを想い、愛していたのか？」

「何……をつ」

言葉に詰まっているうちに魔王子は立ち止まった。

最低限の調度。

個性に乏しいのに、忘れ難い部屋。

バディッシュは私を寝台に下ろした。

放されても魔の大剣の呪いを受けた身体は、相変わらず言うことをきかなかつた。

「一応教えておこう」

リグイルが言った。

「このあとの展開は我らにも読めていない。

ラトールにとっては折伏は酒だが、楔みそぎも正反対の神酒なのだ。

一方の酔いを他方で醒ます。いくらでも酔えるが、片方に寄り過ぎるとそちらの酒を飲むことに飽きる。

ラトールは最近また疼きに悩まされ、贅を相当な速さで消費しているが発散がはかどらぬのだ。ゆえに折伏しやくふくに飽き、魔王子も足りぬ魔軍は劣勢に傾き過ぎている。

そなたは珍めづかな贅ゆえ、ラトールの気分転換になろうかと考えた。私はな。よほどの奇蹟でも起こらぬ限り、多分そなたは死ぬことになる。バディッシュはもう少し面白いことになることを期待しているようだが」

「まあそいつはもう少し後のお楽しみ、だ」

バディッシュユが言い、上から覗き込んだ。

「さて。動けるようにしたら絶対暴れるよな。それはそれで面白そうだが、今にはそぐわんな。どうするか」

「ラトーレが触れれば、どのみち自分の意志では動けぬようになる。その時でいいのではないか」

リゲイルがあっさりと言った。

ここにラトーレが来て、私に触れる。

焦げるようなきなくさい痛み。

あの美。

会いたいのが、会いたくない。切なさ悔しい。すんなり喰ってくれるのならよいが、拒まれるかも知れない。

あの軽蔑が怖い。

「嫌だ……」

「本当に飽きたんだとしたら、多分憶えてもいないよなあ」

バディッシュユは腕組みした。

やがてその顔ににやりと笑みが浮かぶ。

「よし決めた。鍵は“アーフィア”だ。ラトーレに呼ばれたら、解除される。まあその時はしがみついで、よがるぐらいしかできないが」

設定された鍵よりも、彼の言葉に目が眩むような怒りを感じた。

「地獄に墜ちろ……！」

「墜とすのは得意だがな」

バディッシュは声をあげて笑い、寝台を離れた。

「じゃあな。生き残れよ」

同時にリゲイルも背を向ける。

扉が閉じ、私は一人残された。

22 鍵(前書き)

R15

「じゃあな。生き残れよ」

扉が閉じ、私は一人残された。

動くこともできず天井を眺めているうちに、ふと自分がイドウの死にさほどの衝撃を受けていないことに気がついた。

申し訳ないと思う。

悼<sup>いた</sup>んでいる。

だが張り裂けるような悲嘆や、長年の連れ合いを亡くした喪失感  
はなかった。

それよりも、もうじきやって来るであろう白い悪夢、人なぞ酔い  
醒ましの水ほどにしか考えていない者のことを想うと心が乱れた。

「お前のほうは本当にそいつを想い、愛していたのか？」

バディッシュの言葉。

すぐに応えることができなかった。

今問われても、多分できない。

私は泣いた。

死んでしまったイドウのためではなく、自分の救い難さを憐れ  
んで。

いつ入ってきたのか、判らなかった。  
ふと見ると彼はそこに立っていた。

ラトーレは私を見下ろし、決まりきった動作であるように額に触れた。

熱い液体にも似た欲望が、彼の指先からなだれ込む。  
額から頬、首筋から胸元へと滑っていくに従い、懐かしいほどに狂おしい快樂が理性を削っていった。

かつての経験から、魔の詩人が極度の酩酊状態にあることが知れた。

彼に触れられた者は、彼の帯びた酒気に触れることになる。  
魔王が酔う天上の酒は人の身には強過ぎるのだ。それでも人は妙な甘さに狂い、身に余る酔いを貪って朽ちていく。

恐らく今、ラトーレの酔いは深過ぎて、人を狂わせ過ぎるのだから。

彼は贅を抱く際、始め愉悦を、やがては軋む魂の狂気を喰らって疼きを鎮めていく。

だが魔王の強過ぎる酒気に当てられた人は魂が保たず、すぐに壊れてしまう。リグイルの言っていた「相当な速さで消費しているが発散がはかどらぬ」というのはこのことだった。

ラトーレは一言も発さなかった。

覆い被さって着衣を剥ぎ取り、胸に光る白銀の指輪が露になったときも気付くふうもなかった。闇の瞳は熱っぽく濡れ、何かを認識している様子はなかった。

動けぬ私を愛撫し、欲望のままに蹂躪した。

私は彼の激情にすべてを委ねた。

押し上げられるままに、愉悦も苦痛も耐えることなく、求められるままに魂を供した。

激流に揉まれ、だんだん削られて小さくなっていく己の命を感じながら。

私の狂いかけた心は満たされていた。

これでいい。

そして意識は融け、限界まで短くなった生命の蠟燭が燃え尽きるその時。

「……アーファイア？」

声が聞こえた気がした。





## 23 ひとつの指輪

低い歌が聞こえる。

「アーフィア」やわらかい声。心地よい響き。「アーフィア」でも眠い。「アーフィア」子守歌なら、寝せておいて。

「アーフィア、起きろ」

目を開く。

至近に被さる黒い瞳。

接触した肌から流れ込む、酸のごとき愉悦。

「魔……王……？」

ラトールは身を起こした。

直接触れないよう私にシーツを巻き付けて抱き起こした。

唇にグラスのふちがあてがわれる。

ひび割れた唇に何とか啜え、中身を傾けられて。

咳き込んだ。

嚥下する余力すらなかった。

こぼれた精気がシーツに散り、瞬く間に昇華していく。

グラスが視界から消えた。

一拍置いて頭を引き付けられ、唇を重ねられる。

火花が散るような衝撃に視界を灼かれると同時に、喉を精気の水が滑り降りていった。

清冽な活力が染み渡る。

解放され、何が起こったのか考える暇もなく再び同じことが繰り返された。

二度。

三度。

四度目でどうにか止めた。

「もう……大丈夫……だから」

流し込まれる活力と同じ分だけの精神力を、抉り取られていくようだった。

「自分で、飲む……」

今度は手渡されたグラスを、震える手で掴んで飲むことができた。魔法がかかっているのか、いくら傾けても中身は減らなかつた。そしていくら飲んでも、手の震えは一向に治まらなかつた。

最後にはグラスが奪われた。

「アーファイア」

魔王は言った。

「……最後まで喰ってよかったのに」

私は言った。

抱かれる前よりは落ち着いている。  
だが魔王の瞳は、未だ渴望に疼いていた。

「断末魔を喰えば、雪<sup>すす</sup>げそうだ」

経験から、自分を喰った時のラトーレの回復量は見当が付いている。また、魔王が霊気圧の放散率が高い断末魔を浴びながら味わう時を、一番愉しんでいるのも聞き知っていた。

恐らく、私の、断末魔、なら。

「今からでも。飽きたと言っても疼きを鎮めたほうが気分はいいだろっ?」

ラトーレの腕の中。

だるいが気持ちよかった。  
与えられる死がどんなに苦しく酷いものだとしても、構わない。  
このまま。。

「このまま死ねたら、私も嬉しい。頼む」  
「駄目だ」

魔王は言った。  
少し昂ぶった声だった。

首に下がっていた指輪をむしり取り、元通り私の左薬指に填めた。

「全然足りない。抱くが、逃がせ。このままやったら折れる」

「いいんだ、ラトール」

指輪を外そうとしたが、できなかった。

仕方なく彼の頭にそつと手を回し、行為をうながす。

「もう折れている。無茶苦茶にして、壊していい。あなたの勝ちだ

「よ

「

ラトールは何かを堪えるように私を見下ろした。

そして突然振り払うように私を下ろし、衣を纏って立ち上がった。

## 24 勝者と敗者

「リゲイル」

「ここに」

魔僧が音もなく現れる。

主君の様子と、横たわる私に自我が残っているのを見て取ると

ごく微かではあったが、確かに無表情に笑みを刻んだ。

「何か？」

ラトーレは扉に向かって歩き出しながら言った。

「贅<sup>にえ</sup>を。かなり要る」

リゲイルは訊いた。

「アーフィアは。よろしいのか」

「もう少し醒まさないと加減できない」

魔王の身でありながら、不機嫌そうにラトーレは言った。

「逃がすのは嫌だと言う。仕方ない」

「いいと言っているのではないか。喰ってしまったわねは？」

「駄目だ」

ラトーレはきっぱりと言った。

「あのゲームはアーフィアの勝ちだ。贄として抱くのに飽きた。アーフィアに言われるまで気が付かなかったから逃がしたが。戻って来たからには、贄にはしない」  
「贄ではなければなんと？」

ラトールはゆったりと笑んだ。  
凄絶な美しさ。見る者を震え上がらせる。

「壊さない。喰らうのは概ね愉悦のみ。酔っていてもいなくても抱く。  
今はできないかもしれないが、いずれはこちらの愉悦も味わわせる。」

そういうものだ。なんといったかな」

リグイルは　なんと声をあげて笑った。　楽しげに。

「なるほど。少なくとも魔王王子に近い存在ではある。バディッシュも喜ぼう」

魔王は振り返った。

茫然と見る私に、その笑みを見せる。

「だからアーフィア。無茶苦茶にはするが、壊しはしない」  
「な………に………？」

「ラトール、残念だが贄が足りぬ。必要なほどは用意できぬ」

言葉を詰まらせている私を尻目に、リグイルが澄まして言った。

「いずれ調達しておく。今はあるもので済ませよ。では」

主君の返事も待たずにその場を辞した。

「リゲイル？」

さしもの魔王も予測しなかった対応のようだった。

呼ぶが、魔僧が応じる気配はない。

少し待つて来ないと知ると、寝台に戻って来た。

服を纏ったまま、シーツを纏う私に覆い被さる。頭の両脇についた腕の長さの分だけ距離を開けて見下ろした。

疼き、欲情に潤んだ漆黒の瞳。

「アーファイア、逃がせ。逃がさないと、抱けない」

「そんな……そんなの」

まだ混乱していた。

理解できていなかった。

「こんな……こと」

「アーファイア」

業を煮やしたラトローレが囁く。

歌。

精神に魔王の手がねじ込まれ、強引に指輪に焦点が合わされる。

トランスに入れられた私に、腕を折って距離を詰めた魔王が唇を合わせる。

愉悦の奔流が、拡がった精神野をも圧して溢れ返った。



長い長いくちづけの後、離れた魔王は言った。

「アーフィア、長くは繋げない。折りたくないんだ。自分でしてくれ」

私は首を振った。

息は乱れ、同じぐらい心が乱れていた。

まるでわけが判らなかつた。

「だって、どうして……。私、折れてるのに……」

「確かに折れているとも言える」

魔王は言った。

苛立った様子だが、ここを通らなくては次に進めぬことを理解したようだった。

私の頭を両掌で挟み込み、歌うように言った。

「お前が自ら折った。心は直線ではない。折れ曲がりながら複雑な模様を描いて成長していく。」

自ら折った心は意思だよ、アーフィア。

私は折るといふより、粉々に砕いてしまふ。模様を踏みにじって跡形もなく壊してしまう。全然違うことだ」

ゆったりと笑み、額に軽く唇をつける。

戦慄と愉悦。

「私も折れた。今までとは全く違う方向に。アーフィアと同じ方向に。判るか？」

「……ラトーレ……」

眩きに応えたのはくちづけ。

「逃がせ、アーフィア」

25 歌(前書き)

R15

## 25 歌

私は指輪に意識を摺り寄せた。

無限の領域を持つ魔王の指輪と精神が繋がり、必要な路が開く。

そのことを伝えもしないうちにラトールは動いていた。

「アーファイア」

囁きながらシーツを剥ぎ、知り尽くした身体に指を疾らせる。

「アーファイア」

自分の疼きを刻みつけながら、湧き上がる私の愉悦をじつくりと  
啜る。

「アーファイア」

彼は耳元で囁き、心に直接歌いかけた。

「アーファイア、アーファイア」

やがてラトールが、私の最も奥深い場所へと分け入った。

心と身体が同時に翻弄され、歌と彼がもたらす熱に絡め取られ  
。

何処とも知れぬ高みにひたすら押し上げられていく。

愉悦と言うには、さすがにあまりにも強すぎた。

「……ラト……レ……」  
「アーファイア」

必死の懇願を口の端に上らせかけるが、更なる囁きが畏れすらをも塗り込める。

身裡と魂に酒が満たされる。

意識が眩む。

途中から、何をしているのかも判らなくなっていた。  
夢幻の狭間で時折弾ける、稲妻のような法悦の進りと。  
。

「アーファイア」

蕩けるような歌声を微かに聴いていた。

気が付いてぼんやりと目を開くと、魔王が私を抱いて寝そべっていた。  
いた。

こういう光景は初めてだった。

彼は欲望をぶちまけると、すぐに次の愉しみを求めて戦場なり新

たな贄なりに赴くのだ。

指一本動かせないほど疲労した身体を、やわらかく抱きすくめられてるのは、とても。  
心地よかった。

幾度見てもそのたびに戦慄する魔王の美に見惚れていると、黙って眺めていたラトールは物憂げに言った。

「リゲイルが嫌がるな」

その瞳に疼きの脈動はなかった。

見ている私には、静謐な闇の深淵を覗き込んでいるように感じられた。

「……何を？」

彼との接触には、常と同じく痺れにも似た刺激があった。

だが今は酔ってはおらず、過剰なものではない。拒まず委ねればそのまま微睡まどろんでしまえそうな、穏やかな快さだ。

それとも、私がそう変わってしまったのだろうか。

「酔いが足りないように感じてしまう。前もそれで神々を斃たおし過ぎた。……それまでは斃すほうが楽しかったが」

ゆったりと笑む。

鳥肌が立つような、表情。

「すごく酔っ払ってアーフィアを抱くと、とても楽しい。お互い無茶苦茶になる」

恐ろしく倒錯した物言이었다。  
だがラトールらしく、彼には相応しい。

「ほどほどにしてくれ。こちらが保たない」

身体が重い。なんとか鉛のような腕を彼の背に回した。

「だが、まあ、たまにならいい」

「じゃあ今日やったらしばらく我慢する」

ラトールは ラトールだった。

「大神あたり、何処かにいないかな……」

## 26 後日談

永い時が過ぎた。

ラトールはあれから、自分で言っていたにも関わらず、大した我慢もせぬまま天軍の主戦級を次々と折伏しゃくぶくしていった。

天軍の奇蹟も魔王の呪われし祝詞のりとの前では、役にも立たぬ神頼みに過ぎない。

劣勢だった魔軍は瞬く間に多くの領地を回復し、勢いを盛り返した。

リグイルは渋い顔で少し控えるようたびたび進言するが、気分の赴くままに生きるラトールに歯止めがかかる気配はない。ふらりと出掛けては階層にいる天軍すべてを折伏し、したたかに酔って戻って来ては私を抱く。

下手をすると何日も寝込むことになる私を、ある時バディッシュが見舞い　と本人は言ったが恐らく見物だろう　に來た。　　楽しげに見下ろし、にやにやしなから言う。

「魔王を籠絡した女、ってところだな」

枕を投げつけるとさらに言った。

「子は成せんが相思相愛だ。満足だろう？」

悔しいことに私はよほど真っ赤になっただらしく、彼を爆笑させてしまった。



そのバディッシュは、なんと最近の戦闘でご自慢の「破天黒流」を折ってしまった。明王の発動した防御結界に気付かず攻撃して、刀身が真っ二つになったらしい。

話を聞いていい気味だと思っていたら、隣にいたリグイルが肩をすくめた。

「またか」

どうやら武器を壊すのは今回が初めてではなく、飽きては破棄し、別の武器を鍛え直すことを繰り返しているらしい。

下層の兵士が聞いたら卒倒しそうな話だ。

「百年もしたら戻ってくるさ」

鎧なき重戦士と呼ばれていた魔王王子は朗らかに言って、新たな武器を求めて戦場へと去って行った。

呆然とバディッシュの去った空間を眺めていると、リグイルが教えてくれた。

もともとバディッシュは天軍の仏門系の僧兵で、人では菩薩が限界とされる階級を、如来まで昇り詰めたところで魔王軍に寝返ったのだそうだ。

道理で、撥ね返した聖気が効かないわけだ。

天軍では位階を上げるのに、力だけではなく強固な信仰心が要求される。

それが今や魔軍の将となり、嬉々として神々を叩き潰しているのだ。

何があったのだろうかと思いを廻らせていたら、リグイルはこと

もなげに言った。

「信じるのに飽きたのだろう」

ありうる話だ。

さらに魔僧は呟いていた。

「あの者だけはまた寝返って欲しくないものだ」

だが私にはそれはないように思えた。

バディッシュは、今の生きかたが楽しくて堪らないのだろう。

嫌いな男であることは確かだが、以前彼が言った通り、私とバディッシュは同類だ。私以上に周到な彼は、ひよっとしたら始めから魔王軍で楽しむための準備として天軍で力を蓄えたのかも知れなかった。

これもありうる話だ。

もっとも、本人は笑うだけで答えはしないだろうが。

そして今、私は城を離れている。

ラトーレの見境のない呪歌が、天軍の上級大将らを殆ど壊滅状態まで追いやってしまったためだ。リグイルに、しばらく城を出てどこかの戦場で遊んでいるように頼まれたのだ。

最近とみに思うのだが。

勝ちたい天軍。

享樂に耽<sup>ふけ</sup>るラトーレ。

楽しければあとはどうでもいいバディッシュ。

などと考えていくと、億劫戦争おくしゆうせんそうは一重にリグイルの手腕で続いているのではないだろうか。

中級魔族たちが戦う戦場まで降った辺りにいた幾人かの人族の兵士と話すうち、魔王子の噂を聞いた。

数は三たり、一人が新参でそれも人族出身であるらしいと。

いつの間にか、私も魔王子の数に入れられていたようだ。

あまりにも途方も無い話だ。否定しようとしたが、それを言ったら少なくとも自分が「新参で人族出身」の人物であることを暴露してしまうことになる。

結局黙ったまま彼らと別れた。噂の尾緒とは恐ろしいものだ。

しばらく転々としている時、一度バディッシュを見かけた。

もと「鎧なき重戦士」は、「魔弾の射手」と呼ばれていた。強弓を引き絞っては、敵も味方も一緒に串刺しにしていた。

あまり効率のいい武器には見えなかったので、別のものに持ち替えるよう祈っておいた。

積極的に戦いもしないが、降りかかる火の粉は払う。

そうやって彷徨ひろよっているうちに、いつの間にか魔術発動の焦点に使っていた指輪が「詩人の指輪」と呼ばれるようになっていた。

術が発動する際、周囲にその魔法を旋律に喩えればかくのごとし、という歌声にも似た音が満ちるのだそうだ。

私にとっては、身体の一部のように馴染んだものなので気が付かなかった。

だがこれほど相応しい名もなく、気に入っている。

最近魔軍が劣勢という話を聞いた。  
私の周囲にも天の威光が満ちている。

そろそろ戻ってもいい頃だ。ラトーレが待ちかねているだろう。

そうして、永遠の物語は続いてゆく。

## 26 後日談（後書き）

とりあえずここまでで一区切りです。

このお話はムーンライトノベルズ版を超ほんの少し修正して転載したものです。R15とR18の境が分からないなりに表現を多少うやむや化してみました。登場人物が一部重なる『墜ちたる者』との兼ね合いと個人的な興味とで転載しました。

もし十八歳未満立入禁止之月光小説国ではなくこちらで読みたい方がおられるようでしたら、続きも移しますが……需要あるのかないかな。

ともあれ、お付き合いありがとうございました。

2011・9・21

需要はなくても勝手に供給しようかな……。

というわけで次章『後日談の後日談』以降も移します。

## 27 運と器

とある戦場を彷徨っていた時のこと。

私はある兵士と話していた。

どこが変というわけではない。

ただ、話の端々に時折違和感を感じた。

何かがしっくり来ない、引つ掛かる　その程度ではあったが。

しばらくして違和感の正体に気付く。

この兵士は魔軍で戦う者が持っているべき欲望の、方向が違っていた。

強くなりたい。

上へ昇りたい。

生き残りたい。

億劫戦争で魔軍に所属する者は己に忠実だ。

私も含めてすべての存在は、何かや誰かのために戦ったりしない。

己の快樂のため。己の欲望のため。己のため。

魔王子ですら、魔王の為に戦っているわけではない。

従い、仕えてはいるが、それとて結局のところ自分の楽しみに都合がいいからという理由に過ぎない。

しかるにこの兵士は言った。

「このような無意味な戦争を終わらせるために」

戦い抜く、と。  
強くなる、と。  
生き残る、と。

決意を込めて語る兵士の熱っぽく狂信的な目が、私に悟らせた。

この兵士は天の兵だ。

いずれ魔の力とそれから身を守る術を得て寝返り、天軍の兵として魔に仇<sup>あた</sup>為す。

それがこの者の正体。

私は彼を殺した。

魔王宮に戻った時バディッシュに会い、その話をした。

「どこかで聞いたような話だな」

嫌味を込めて言ってみた。

この魔王子は死んだ兵士と反対のルートを辿って、天を滅する者となったのではないかと私は踏んでいた。

バディッシュはにやりと笑った。

「似ちゃいないさ。そいつは失敗したんだろう？」

私の考えまで知った上での返答だった。

思っただけでも面と向かって肯定されるとまでは予想していなかった。鼻白んで口を閉ざすと、如来の悟りを棄てた戦士は更に笑みを深くした。

「お前のほうがよく似てるよ。方法はともかく成功して生き残ってるんだからな」

「一緒にするなっ」

元はと言えば誰のせいだ、と続けかけたが、なんとか押さえ込んだ。

彼の面の皮は私程度ではひっかき傷も付けられないほど固く厚い。話しかけたことをいささか後悔しながらぼそぼそ言った。

「まあ、あの兵士も運が悪かったんだ。あなたなら面白がって見逃しもしたろうが」

だが意外なことに、バディッシュは鼻で笑って言い捨てた。

「俺がか？ 馬鹿言え」

私は首を傾げた。

「何故？ 将来的にはあなた好みの面白いことになりそうじゃないか。最近天軍が弱いとかこぼしていたし」



魔王子は肩をすくめた。

「だからと言って俺が見逃す理由になるか？俺が遭ったら試してやるよ。天に勝利をもたらす器かどうかをな」  
「……」

何気ない口調にそら寒いものを感じた。

かの兵士が少なくとも死した魂ぐらいは天に召されるよう計らってきたのだが、バディッシュはそんなことは気にもかけないだろうなとふと思った。

「運と器、か」

なんとなく呟くと、バディッシュが「そうだ」と頷いた。

「本当に運のいい奴なら、そもそも途中で命取りな相手に遭ったりはせんよ。そして本当に生き残る器なら、相手が誰だろうと生き残れるもんだ。

お前に遭って死んじまったそいつは、結局その程度の奴なのさ」

説得力のある言葉に納得しかけた時、魔王子は言った。

「お前と違って」

「………どういう意味だ」

バディッシュは一言多い。

彼が嫌いな理由の一つだ。

いや、この魔王子は判っていてわざと一言余計に付け足すのだ。

「こちらの神経を逆撫でして、その反応を愉しむ。

「愉しむ」を「喰らう」と言い換えれば、まさしく魔族の性だった。

「そのまま、だろうが」

何度やり合っても神経質にとがってしまう声に、彼は楽しげに応えた。

「お前は俺たちに遭って、試された上で生き残ったじゃないか。そいつは多分昔のお前よりは強かったろうぜ。だがそいつは死に、お前は魔王子アーフィアとして今ここにいる。それが違いだ」

私は仰天して反問した。

「私が魔王子だって？」

## 28 もう少し、やるか

「私が魔王子だって？」

何を言い出すのだろうか。

バディッシュが怪訝けげんそうに眉を寄せたが、それどころではなかった。まくし立てるように言う。

「だから似てるなんて言ってたのか。冗談じゃない。あなたがたが勝手に連れて来ただけじゃないか。本来の力なら、まだ爵位にも手が届いていない。」

私は魔王の妾めかけに過ぎないんだ。ラトーレラトーレの寵ちよで生きているようなものだよ」

バディッシュは黙ってこちらを見ていた。

珍しいものでも観察するかのように。

その顔に突然笑みが浮かんだ。

「よし判った」

そして彼は腰に束ねて吊るしていた鞭を外し、地面に放った。

「蛇王じまおうの邪鞭じまへん」これが今のバディッシュの武器だ。使用者の思

いのままに幾条にも分かれる鞭むちが敵を絡め取り、自在に切り刻む。扱いが難しいところが気に入っているらしい。

それを地に投げた。

「じゃあ試してみようぜ。人族出身同士だ。余計なもんは抜きでな」

同時に彼がかざした掌に凄まじい靈気が集中した。  
にやついた顔からは想像もつかない、触れた物を塵も残さず消し  
飛ばしそうな力の塊だ。

本気にしても冗談にしても、バディッシュは人の命を奪うのに躊躇  
したりしない。

慌てて跳び退<sup>すさ</sup>って、「詩人の指輪」の力を解放しようとして  
。手応えが無かった。

見下ろした先で、指輪は光を失った、ただの装飾品と化していた。

歌が聴こえた。

ラトールが腕組みして眺めながら、低く歌っている。

「蛇革に白銀に宿りし力よ、眠れ。主の己が力に頼りし時は」

旋律が語る。

一瞬の自失から立ち直る前に、バディッシュが力を解放した。  
圧縮されて眩いほどに輝く靈気の塊が、箭<sup>や</sup>のごとく放たれる。

盾を喚ぶ暇はなかった。

とっさに気力を円錐状に撚り合わせ、迫り来るエネルギー塊の中  
心に叩き込んだ。力の進路が逸らされ、左右に分かれて流れて行く。  
背後で爆発音が響いた。

一方、私の放った力は槍の穂先となってバディッシュを捉えてい  
た。

だが彼が片手で薙ぎ払うと、その力も霧散する。

バディッシュは手を胸元に上げた。

指が二本、揺れていた。

攻撃を払った衝撃で外れたらしい。反対の手でその指を掴んで、ばきりと入れ直す。

力の余波で切れた頬の血を拭う私に、目を細めて嗤わらいかけた。

「もう少し、やるか」

魔王子の姿がゆらり、と霞む。

次の瞬間、目の前のバディッシュが拳を腹部に打ち込んできた。

反射的に後ろに跳んで衝撃を殺しつつ、二人の間の大気の密度を高める。

突進してきた分、バディッシュのほうが大きく抵抗を受けた。こちらのあばらと同じ程度の損傷は腕に受けたはずだ。

互いに治癒の力を解放し、そして再び魔戦士が動く。

攻撃力は圧倒的にバディッシュのほうが上だ。

守りで後手にまわっているうちに攻撃はどんどん苛烈の度を増していき、あつという間に追い詰められた。

ラトールは相変わらず見物しているだけで、止めてくれる気配はない。

バディッシュの繰り出す攻撃には、当たれば死という気配が濃厚に纏わりついていた。相手に機会を与えないための古典的作戦に出ざるを得なくなる。

攻撃は最大の防御　　というあれだ。

だがこちらが仕掛けると、バディッシュはいよいよ楽しげに溜めていた力を解放しだした。

ほとんど陶然となりながら私の攻撃を撥ね散らし、破壊の渦を撒き散らす。

魔王子の武勇伝は伝説として知っている。

また彼の発する押し潰されそうな威圧感から、恐るべき実力に思いを巡らせたことはあった。

それらが所詮知識に過ぎないことを、痛烈に思い知らされた。

目の前で、実際に戦う相手とした時の魔王子の恐ろしさは、およそ筆舌に尽くし難かった。

強大無比な攻撃に対する恐怖、

迫り来る死に対する恐怖、

そしてそれを圧して余りある、魔王子自身に対する恐怖。

すべてを押さえ込みながら戦わねばならない心身は、急激に消耗していく。

ただでさえ足りぬ力が、消耗し、削られ　。

バディッシュが霊気弾を放った。

最初の一撃と同じものだ。

だがもう私には逸らす力も転移で避ける力も残っていなかった。

直前の攻撃をよけ損ねて右の足と腕の骨が砕けており、跳躍して着弾点をずらすことすらも不可能だ。

私は立ち尽くして死の弾丸を待った。

疲労で痺れた心は恐怖を感じることもなく、それが救いと言え  
救いだっただ。うっすらと笑ってさえたかも知れない。

すべては一瞬の出来事だった。

目の前が翳かげると、空間が軋む程の力塊が消失したのが同時だっ  
た。

二人の間。

私のすぐ前でバディッシュのほうを向き、もう一たりの魔王子が  
超然と立っていた。

かざしていた手を下ろしながら、リグイルが静かに言った。

「決着はついた」

「決着はついた」

リグイルが静かに言った。

巨漢の魔戦士の威圧感がふいと消失する。

私は糸が切れた操り人形のように床に崩れ落ちた。

魔僧が振り返り、全然心のこもっていない口調で言った。

「大丈夫か」

応えようと息を吸ったところでむせた。ごぼり、と口から血がこぼれる。

幾度か咳<sup>せ</sup>き込んで、喉の血を吐き出すと口が利けた。

「……少し、休めば、多分」

戦闘の後半は治癒の術を使う暇がなかった。

今は消耗しすぎ、術に集中するだけの精神力がない。

息を吸うたびに胸が酷く痛んだ。痛みを耐えるために、なんとか横向きに身体を丸める。

「少し、待って……」

「それも面倒だな」

リグイルが手を伸べた。

魔僧の魔力が骨を接ぎ、内臓の損傷を修復していく。



靈気の弾丸を消し去った時と同じように、ほどなく身体の痛みはきれいに拭ぬぐわれた。

「すまん。我を忘れた」

施療が終わった頃、バディッシュの軽い声が上がってきた。

私はゆっくりと身を起こした。

傷が治っただけの身体は血液が足りず重く、鉛のような重い疲労感が精神に溜ためまっていた。立ち上がるまでには到らず、胡座あぐらをかいて魔王子たちを見上げる。

「それで、私の弱さは証明されたわけだ」

私は投げやりに言った。

結果は始めから判っていたとは言え、負けて気分のいいものではない。

「で？」

「俺としても予想と違ったよ」

バディッシュが言った。

「ラトールが助けに来ると思ってた。お前の魔王子たる所以は、まさしくラトールの寵を得ていることにあるんだからな……って言うか、そもそもリグイルに気付かれるほど派手なことになるとは思っ  
てなかったんだよな」

彼は周囲を見た。

つられて見まわすと、戦場となった周囲一帯は瓦礫がれきの山と化していた。

しかも瓦礫の量が、建物を構成していた物質の量より明らかに少ない。原子の塵まで分解されてしまった部分がかかなりあるのだろう。

中庭の庭園に面したこの回廊は、素晴らしく美しかった。くらりときて片手を床についたが、リグイルがこともなげに言った。

「この程度なら修復可能だ。だが確かに派手だった」

元に戻せると知って少しほっとした。気を取り直してバディッシュを見る。

「それがどうして魔王子になる？ 関係ないだろう」

「そなたが来てから、ラトローレは一体どれほどの神々を折伏しやくふくしたかな。考えたことはあるか」

横からリグイルが言った。

「恐るべき量だ。単純に言ってそれまでの倍だ。そもそもラトローレは強いが、発散を考えると効率が悪い。以前はラトローレが斃たおす数は、私やバディッシュが斃す数を多少上回る程度だった。だが今は二人がかりでも遠く及ばぬ。」

極論すれば、そなたはラトローレという武器により、我ら一人あたりより遥かに多くの天軍を屠ほぶっていることになるのだ。そのような存在を魔王子と呼ばずなんと呼ぶ。魔王妃か？ それこそ好みではなからうが」

なんとという理屈。

思考がついて行かなかった。しどろもどろに言う。

「いや……だって、それはラトーレが私の身体を気に入ってるってだけで……勝手に……」

言った自分が情けなくなつた。

「魔王のお抱え娼婦とか……」

穴があつたら入りたい気分だ。

あながち冗談になつていないところがまた情けない。

「その辺にしとけ。お前それ聞かれてたら、ラトーレに今の怪我より痛い目に遭わされるぞ」

バディッシュが呆れたように言った。

後ろから私の頭を軽く叩く。

「それに安心しろ。お前は実力でも公爵より上だ。下手な魔王子より充分強い」

「え？」

きよとんと見上げた先で、魔戦士は朗らかに言った。

「久しぶりだぜ。あんなに楽しかったのは。天軍は最近張り合いなし、リグイルは付き合いが悪いんでな。またいつか相手しろよ」「なに……?」

「派手になつたつて言つたらう。あそこまでやる気はなかつたんだよ」

バディッシュは唇の端を歪めた。魔王子の太い笑み。

「戦いに酔って我を忘れるなんてこと、ここしばらくなかった。ラトーレが大物かなり狩っちゃったからな。お前がどう思いながら戦ってたか知らんが、爵位止まりの力じゃ俺の自制飛ばすなんてできないぜ」

私は茫然と首を振った。

どちらかと言うと、圧倒的な力の差に絶望を感じながら戦っていた。

勇を鼓して攻撃したのにしても、受け切れないと判断したからだ。最後のほうは自分はぼろ雑巾のようだったのに、バディッシュはますます愉しげで、本当に恐ろしかった。

「だって、全然勝てない気がした……」

「そりやお前、キャリアが違うぜ。勝てるわけあるか」

しゃあしゃあとバディッシュは言った。

むっとして口を閉ざすと、

「お前って面白いよなあ」

と笑い出す。

やはりどう考えてもこの男は嫌いだと思っていると、リゲイルが言った。

「確かに始めにそなたを連れて来たのは我々だ。だが最近のそなたは階層をまたいで歩き回り、こうして戻って来るではないか。斃していないにせよ、神々に狙われ、逃げ延びたことも少なからずあったはず。」

魔界の中心たるこの階層に自力で辿り着ける者が、魔王子と呼ばれるのだよ。どの観点からしても、そなたが魔王子であることは間

「違う」

自分が、魔王子。

遥かなる高みの位で淡い憧れを抱いたことはあつたが、急に言われて喜べるようなものでもなかった。

今の気分はと問われれば。

どちらかと言えば混乱していた。

「少し……休みたい」

30 狂宴(前書き)

R15

30 狂宴

「少し……休みたい」

「そのようだな」

リグイルは頷いた。

バディッシュは踵を返して歩いて行き、瓦礫の間から己の武器を拾い上げた。

「捨ててよかったですよ。何回か使いたくなくなった」

眩き、ふとこちらを見る。

「そう言えばお前、よく付き合う気になったな。こっちは挑発しただけで、お前は指輪に頼るもんだとばかり思ってたが」

「えっ……」

あの歌が双方の武器を封じたから。  
言いかけて、気付く。

「ラトールレは？」

確かに見た。

歌っていた。

魔王子二人はそれぞれ首を振った。

「来なかったな。贅でも喰ってるのか」

「知らぬ。騒がしいので来たただけだ」

気のせい だったのか。

自信がなくなってきたが、それでも釈然としない気分は残った。

「そうか……」

「まあ早く行って休んどけ」

彼らは歯切れの悪さを疲労のせいと受け取ったようだった。

「じゃあな」

「では」

未だに慣れることのできない切り替えの速さで、あっさりといなくなつた。

立ち上がるのに失敗して何度か尻餅をついた後、壁に寄りかかりながら、どうにか最寄りの扉まで辿り着いた。

自分の血の臭いにむせそうだったが、とにかく少し眠りたかった。

座標を自室に繋いで、戸口から倒れ込むように部屋に入り。

床に這うはずの身体が、受け止められた。



ラトーレは腕に血まみれの身体を引つ掛けたまま無言で前に進み、扉をくぐった。

温かく湿った空気を嗅いだと思う暇もなく、魔王は突き飛ばすように腕の中のものを離れた。

背中から浴槽に落とされた私には、まだ何が起こっているのか判らなかつた。

愚かにも沈んだ瞬間に息を吸ってしまい、酸素の代わりに湯が気管と肺になだれ込む。もがこうとしても身体は重く言うことを聞かず、むせ喘いでさらに空気と湯を交換してしまった。

判らない中で、一つだけ理解できた。

溺れる。

腕を掴まれ、引き上げられた。

浴槽のふちに押しやられて、私は咳き込みながら水を吐く。傷は治ってもまだ血が溜まっていたらしく、朱みのかつた錆臭い水だった。

戦いの名残を吐き出すことで、少しずつ頭がはつきりしてくる。

「ラトーレ……？」

だが振り返ろうとした頭に手がかかる。

側頭を掴まれ、浴槽のふちに頬を押し付けられた。

「黙れ」

低い命令が言葉を封じる。

消耗しきっている身体は、一箇所押さえられただけで動くことができなくなった。

魔王が一言呟くと、私の衣は虚空に溶けた。むき出しになった足が割られ、大腿に自分のものではない肌が触れる。

直後、全身を引き裂かれるような衝撃に打たれた。

「  
っ！」

悲鳴が喉に詰まった。

何が起こっているのかも判らなかつた。快樂でも 苦痛でもない。金鎚で脳天を殴られているかのような、凄まじい衝撃が続きざまに弾けて視界を灼く。

指輪に逃がそうにも、わずかな集中の隙もなかつた。

ほとんど昏睡しかけた頃、ようやくラトールレが退いた。

解放の余韻に浸る間もなく、身体が抱え上げられる。再び扉を越えて、今度は部屋の寝台に投げ出された。

精気を凝った水を口移しに与えられ、狂宴が再開される。

どうにかして指輪に精神を繋ごうとしたが。

そのたびにラトールレは強引に接続を引き千切った。

何度目かに彼は冷ややかに歌い、指輪の魔力を眠らせてしまった。やはりバディッシュとの戦いで武器を封じたのは彼だったのだ。だがそんなことを思う余裕は何処にもなかった。

限界は遙か以前に越えてしまっていた。

それでもラトールレは壊れかけた精神と魂を、魔王の力で無理矢理

私の肉体に正気のまま留めさせた。魔王子たちとて、ラトールレにそのような芸当ができるとは知らなかったであろう。

私は気を失うことも狂うこともできず、ひたすら弄ばれ続けた。

そしてラトールレの力すら及ばぬ暗黒に、私の存在が融け出し始めた頃。

宴は終わった。

「アーフィア」

旋律が私をくるむ。

名。

真実を表す魔法。

言霊の魔力をすべて理解した者のみ操り得る、単純だが最高の魔法。

「アーフィア」

魔王の歌が、ほつれ、ほどけた魂を修復し織り上げる。

やがて瞳に映っていただけの像が、形として認識された。

闇夜の瞳。

雪白の髪。

至高の美。

「……魔王」

眩きに応えたのはくちづけ。

奪い尽くすそれではなく、穏やかな陶酔をもたらすやわらかなキス。

離れてから魔王は言った。

「判ったか」

「……うん」

私は頷き、目を閉じた。

「怒らせてしまったみたいだな……」

焼け付くような記憶に身体が震えた。

今までどれほど手加減されていたかがよく判った。彼が魔王であることを理解していたつもりだったが、認識が足りなかった。

「今度から、気を付ける……」

卑屈になるのが嫌で意地を張っていた。寛大な飼い主に甘えていたのだ。

思い知った今、自然に認めることができた。

「もう絶対、余計な真似はしない」

この部屋にしよう。

リゲイルが渋るうと、魔王が飽きるまでは。

魔王子に近い力を得ることができたとしても、私は魔王のお気に入りのお玩具に過ぎないのだから。

魔王子がどう言おうと、それが私の運命。

「すべてあなたの望みのままに。……魔王陛下」

肩を掴む手に力がこもった。

「違う」

目を開くと魔王が苛立ちを含んだ瞳を向けていた。  
怒り。

びくりと怯えると、さらに苛立った様子で私を上から覗き込んだ。  
逸らそうとする視線を捕らえ、至近で囁いた。

「あれは罰だ」

「

そう、罰だ。

判っている。

応えようとしたが抱きすくめられた。

魔王の抱擁は甘やかな刃だ。

流れ込んでくる陶醉に意識を削られて朦朧きらくしていると、不機嫌  
そうな声が言った。

「妾めかけなんて言うから」

「…………え…………？」

「それに娼婦とか」

頬に唇が押し付けられ、そのまま首筋に滑り降りる。

「だからそういう相手として扱った。…………けど」

手が、指が、ゆるやかに抱いていた身体をなぞり、愛撫する。

「全然愉しくなかった」

あれだけの行為のあとで。

しかも実は最初から、魔王の瞳は折伏しやくふくによる疼きなどに悩まされている様子はなかった。

にも関わらず、快樂の細波に震える私の心の疼きをラトーレはうつとりとすすった。

「ラトーレ……」

眩きに応えたのは、いま一度のくちづけ。

そして離れた魔王は言った。

「判ったか」

「……うん」

私は頷き、彼の頭に両腕をからめた。

「判った」

ほんの少し力を入れると、ラトーレは微笑んで残りの距離を自ら詰めた。

重なる唇。

長いくちづけ。

その後ラトーレに「そういう相手ではない扱い」をたっぷり受けた。





### 32 魔王子の憐れみ

バディッシュとの戦闘の影響もあり、私は例によって寝込む羽目になった。

それも今までになく長い間。

様子を見に来て話を聞いた魔王子たちは、恐ろしいことに本気で憐れんだ。

「いや、俺がお前でなくてよかったよ」

バディッシュがしみじみと呟くのを聞いて、怒りを感じる前に背筋が冷えた。

己の引いてしまった籤くじのとてつもない運勢に。

「触らぬ魔王に祟りなし」

リゲイルまでが敵かに言って首を振った。  
私は半泣きになった。

「だってどうすればいいんだ」

「下手に出る。怒らすな」

「下手に出たら怒られた」

「逆らうな。黙って従え」

「逆らってなんかいない」

「やばそうな時は逃げとけ」

「部屋で待ち構えてたんだ」

「諦める」

「薄情者」

バディッシュと漫才口論を繰り広げ、疲れて口を閉ざすとリグイ  
ルが言った。

「だが今回でそなたも判ったはず。一番深い根はなくなったのでは  
ないか」

「……」

私は黙った。

問うように見られて、ぽつりともらす。

「本当は、よく判らない」

「何故？」

「だって、ラトールは私の生殺与奪の権利をすべて握っている。ど  
んなに愛おしんでるように見えても、しょせん気に入った玩具を大  
事に行っているだけじゃないのか。」

ラトールが怒って否定したって、私が他の女と違うのは、ただ生  
き残る術に長じていることだけだ。他にそういう女がいたら、私の  
役目なんか終わってしまうんじゃないか。未練たらしく言えば、捨  
てられてしまうんじゃないか。

怖い。自信がない。どこまで我儘わがままを赦してもらえる。どこまでラ  
トールを信じたらい。ラトールは愛してるなんて一言も言ってい  
ない。抱くのが愉しいって、それだけだ。

だったら、もっと愉しい相手が出てきたら 「

昂ぶってきたのが判って一呼吸置いた。苦い笑みが口に上る。

「下らなくて女々しい心配だ。判ってる。けどそんなことをうじうじ考えてると、信じるのが怖くなる。妾めかけだとか思ってたほうが気が楽なんだ。ラトーレに従っているだけでいいから、余計な期待をせずに済む」

魔王子たちは静かに話を聞いていた。

私はかえって恥ずかしくなった。愚にもつかないたわごとだと自分でも思っていたから。

まだ疲労が抜けていないせいで、口が滑りやすくなっているのだろう。

「すまない。こんな話、聞かせるつもりじゃ」

バディッシュが唇の片端を吊り上げて笑んだ。

「お前、ラトーレに心底惚れてるんだなあ。可愛いもんだ」

顔が熱くなった。

頬に血が上り、赤くなっているのが判る。

だが否定できるものではなかった。頷く。

「……うん」

リゲイルが呟いた。

「なるほど。惚れすぎたのだな。魔王でなければ、というわけだ」

魔王でなければ。

苦い響きだった。

何度思ったか知れない。

「イドウみたいな、同じ人族だったら」

昔の夫を思い出し、言ってみる。

「同じくらいの見返り求めたりするのかな……」

だが人族に己が恋する情景を思い浮かべようとしてちらつくのは、魔王のこの世のものならぬ美のみだった。

「駄目だ。判らない。想像がつかない」

魔王だからこそ心奪われたのだ。

今さら違う相手を想えるはずもない。

「じゃあちよつと変えてみて、例えばだ」

その時ふとりゲイルが視線を空に彷徨さまよわせた。

バディッシュが魔僧を肘で小突き、いつもの楽しいげな調子で続けた。

「例えばだぞ。もしラトーレがお前のこと愛してるって、はっきり判ったとしたら、どうだ？ 抱くのだけじゃなくて、お前が可愛くて愛してくれようがないとしたら。」

多少の我儘は聞いてくれそうだ。そうしたら、お前は何を望む？」

私はのろのろと首を振った。

「そんな仮定は無意味だ」

「ほんの遊びだよ。言ってみる。酔っ払ってきて、自分の欲望ぶちまけるだけの亭主だ。して欲しいことの二つ二つはあるだろうが」

バディッシュはこういう時押しが強く、引き下がらない。

これも彼が嫌いな理由の一つだ。異常に好奇心の強い魔王王子だった。

きっと大昔は研究熱心な魔術師だったに違いない。

「……一つある」

せつつかれて私は渋々口を開く。

夢想するまでもなかった。

魔王に抱かれた時いつも思うことだったから。

「抱いたあと、目が覚める時そばにいて欲しい」

バディッシュが眉を上げた。

「それだけか」

「うん。駄目なら、目が覚めたあと、ちょっと顔を見るだけでもいい。大抵次の贅か戦場に行ってていないから」

ごく稀まれに彼の腕の中で目覚められる時がある。

その時が私にとっては至福の一刻だった。

本当に稀ではあるが。

だがそれ以上に、目覚めには私を苛さいなむ不安があった。

「私で酔いを醒ますのはいいんだ。けど酔い醒ましの間は刺激が強すぎて、わけが判らないうちに終わってしまう。目が覚めて動けない間一人でいると、不安になる。飽きて行ってしまったんじゃないかって。だから」

飽きられる。

それが一番の恐怖。

以前突き放された時は、立ち直るのに随分かかった。  
今同じことになったら、多分 いや、考えたくもない。

魔王相手にはあまりにも下らない、小さな不安だった。

私は苦笑した。

「こんなこと聞かれたら、またラトローレに半殺しにされる。忘れてく  
く  
「だよ」

バディツシュが振り返った。

魔王子たちの背後、つい今まで誰もいなかった場所に人影が増えていた。

現在、魔王宮に在る最後の一人。

魔軍の王。



### 33 やばそうな時

私は震え上がった。

立ち尽くすラトーレの、不機嫌そうな、目。

バディッシュが軽い口調で言った。

「ささやかな願いじゃないか。叶えてやれよ」

「バディッシュっ！」

私は喚わめいた。

もちろん、魔王子たちは主の存在に気付いていたのだ。

バディッシュが変な方向に質問を変えた、あの時だ。バディッシュ  
ユ　！

横合いからリゲイルがぬけぬけと言った。

「バディッシュ、 “ やばそう ” だ。 “ 逃げといた ” ほづがよさそう  
だぞ」

「だな」

魔王子二人は悪戯小僧のように笑い合つと、あつという間に「逃  
げて」行った。

ラトーレはつかつかと歩み寄ってきた。

私は怯えて縮こまり、もぐもぐ言った。

「違うんだ。その、なんでもない。今のままで充分幸せ……」



彼は立ち止まらなかった。

枕元に辿り着くとよどみなく掛け物をめくり、身体を滑り込ませた。身を硬くしている私に手をかけ引き寄せ、しっかりと抱き込む。

「  
」

驚いて見上げようとしたが、あまりにくつつきすぎていてできなかった。魔王の肩口に頬を埋め、抱擁を受ける。

全身にじわりと満ちて来た快さに驚きが溶かされ、私はうっとり  
とため息をついた。

すべてがどうしてもよくなってくる。

しばらくして腕の力が弱まった。

見上げた魔王の、読み難い瞳。

我に返って状況を知ると、思考も戻って来た。

「あの……ごめんなさい。そんなつもりじゃ」

応えはなかった。

怒っているのだろうか。

怒っているのかも知れない。

まどろむような心地よさから、どうにか意識を取り戻す。己の口の軽さを呪いながら、なんとか修正を試みる。

「本当に、馬鹿馬鹿しい不安に過ぎないんだ。抱かれたあとは疲れ  
て気が弱くなってるだけだ」

「……いつもそんなふうに思っていたのか」

完全に平板な、感情を窺わせぬ声で魔王は言った。

「不安だと。飽きられたのかと」

「違う！」

私は焦った。

首を振ってまくし立てる。

「だって結局戻って来てくれる。消耗が生むちよつとした  
みたいなものだよ。普段は全然そんなこと考えもしない」  
妄想

嘘だ。

不安は常に澱のように心の奥底にこびりついている。  
体力と精神力は重石のようなものだ。減衰すると澱は水面に浮き  
上がってくる。

ラトールには見られたくない、腐った汚泥だった。

覚られたくない一心で、真実を覆い尽くせるよう言葉を積み重ね  
た。

「贅を喰いに行くのは壊さないようにしてくれてるんだし、戦場に行くのはまた抱いてくれるってことだ。ちよつと考えれば判る。

そうだ、別の願いがあるよ。それならいちいち面倒なことしないでいい。一つ約束してくれれば」

願い、という言葉にラトールが反応した。

「……何を？」

「うん、もし飽きてしまったら、そのまま喰い尽くして欲しい。情けなんかかけないで、綺麗さっぱり跡形もなく。目が覚めることのないように。その約束」

確証が欲しい。

希望と不安が天秤で揺れている状態はつらい。

一言の言質があれば、納得できる。

魔王に微笑みかけて、言った。

「そうしたら、起きた時また抱いてもらえるって判る。あなたを煩わせることもない」

「……」

ラトールは半眼になった。

恐ろしく不機嫌そうな表情を浮かべている。

私の笑みは凍りついた。

とっさに離れようとした身体が、力尽くで押さえ込まれる。

ラトールは身体をずらして私を下に敷いた。

真っ青になって見上げる顔を、冷ややかに見下ろす。

「判っていないかったんだな」

魔王はゆっくりと言った。

「それも全然」

### 34 約束

「判っていないなかったんだな」

魔王はゆつくりと言った。

「それも全然」

ばれた。

私は竦<sup>すく</sup>み、冷たい怒りに底光りする魔王の瞳を見た。

もう駄目だ。

軽蔑される。

恐ろしかったが、終わりだと思った瞬間、熱い塊がこみ上げてきた。それが何を示すものなのか判らぬまま、心の中で恐怖や怯えとぶつかり合う。

過剰な感情が処理しきれなくなり、私はきつく目を閉じた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

出たのと言えはお仕置きに怯える子供のごとき、ひたすら単調な謝罪の言葉だけだった。

魔王の怒りは恐ろしく、  
悲しかった。  
そう、悲しいのだ。

軽蔑される。

寵を喪ってしまふ。  
終わってしまう。

魔王がいくら心を砕いても何も理解できない馬鹿な人間が、そばに侍ることなぞ許されない。自分の楽しみに水を差すものなぞ要らないのだ。

そんな不快を与えてしまったことが申し訳なかった。そして、魔王に軽蔑されて突き放されてしまうのが悲しかった。

バディッシュの言う通り、私は魔王の美しさから恐ろしさから、すべてに溺れるほど心奪われている哀れで卑小な人間だ。

彼に捨てられてしまふのが、怖くてせつなくて悲しかったのだ。

「ごめんなさい……」

まなじりに唇が触れた。

舌がこめかみの下あたりにそつと滑り、涙を拭う。

その時初めて泣いていたことに気が付いた。

はつと目を開くと同時に、反対側に薄い唇が押し付けられる。

「あ……？」

茫然と呟いた私を、離れた魔王が至近から見下ろした。  
ラトールは言った。不愉快そうに。

「こんなもの。全然美味しくない」

私はびくりと身を竦めた。

「ごめ」  
「黙れ」

魔王が命じた。

息を呑んで固まった鼻先にほとんど触れ合はんばかりの近さで、唸るように囁く。

「その言葉を私の前で使うな。二度と」

どうしていいか判らぬまま、見返すことしかできなかった。

彼の意図が判らなかつた。

判るのと言えば、魔王がひどく不機嫌で何かに対して苛立っていて、私とその理由を理解していないことに、更に腹を立てているらしいということだ。

そんなことを思うと、また情けなくなって泣きたくなった。

だがラトローレが再び禁じる。

「泣くな」  
「だって」

また子供のような幼い調子でしゃくりあげながら反論した。

「先刻から何一つあなたの意に適っていない。私にはもうできない。あなたの望みに対してどうしたらいいか判らないんだ。ごめ」  
「黙れ」

鋭い声。

「それに泣くなと言った」

だが私にはもう抑えることができなかった。  
涙があふれ。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

勝手に言葉が流れ出た。

「」

唇が塞がれた。

長く　長く。

私の怯えと混乱と悲しみが、やわらかな愉悦に溶けてしまうまで。

離れた魔王は言った。

静かに、決然と。

「そんな願いは駄目だ、アーフィア。そんな約束はしない」

私はぼんやりと目をしばたいた。

魔王の穏やかな陶酔に満たされた心は、現実に戻るのに時間がかかる。「約束」の内容をしばらく思い出せなかった。

思い出し、返答の意味が判ると同時に苦いものがこみ上げてきた。

魔王相手に馬鹿な約束を迫ったものだ。

今のくちづけで混乱の躁状態は去っており、なんとか謝罪を込めた微笑みを浮かべることができた。

「うん。下らないことを言った。忘れてくれ」



「違う」

魔王は私の顔を両手で挟んだ。

「約束が無意味だからだ」

視線が捕らえられる。

闇夜の深淵には、尽きることのない熾火が暗くまばゆく燃えていた。

「飽きはしない」

刻み込むように、低くゆっくりと囁く。

「飽きてやるものか」

私は動けなかった。

一言一言が魂に焼き付けられていく。

「いくらでも抱いて、注ぎ込んでやる。私と酔いを分かち合っただ。情けなぞかけられることもなく、永久に」

そして魔王は言った。

「だからアーフィアも好きなだけ私を煩わせるがいい」

熱い酸のような言葉と、その意味が染み込んでくる。

夢。

これは夢だ。

だがその思いを凌駕する、痛いほどの言葉の刻印。  
意識する間もなく、うわずった声で呟いていた。

「……じゃあ、もう少し、ラトーレのそばにいていいの……?」  
「お前は先刻から何も聞いていないんだな」

ラトーレは呆れたように言いながら、腕に収めた者がまとう夜着の紐をほどいた。

「永久に、と言ったぞ」

ゆるんだ衣の合わせ目からするりと手を差し入れ、背に回す。  
衣が開かれ、露になった胸元に唇を押し当てた。  
鳥肌の立つような慄きが疾る。

「な……に?」

怯えた声に、楽しげな声が応える。

「一回眠らなければ、確かめられないだろう?」

そう言って、彼は情け容赦なく私を貪り始めた。

### 35 呪歌

目覚めると私を抱く魔王が言った。

「他には？」

けだるくて心地よくて何も考えられなかった。

またまどろみに身を任せたいという気分と、この至福の時間を味わっていたという気分が、ちょうどいい半覚醒の状態で均衡を保っている。

「うん……」

応えにならない呟きを返して、ほんの少し身じろぎした。

覚ったラトローレが抱く腕に力を込める。

意識を飛ばされそうなほどの魔王の抱擁の感触に、朦朧となりながら満足の吐息を漏らす。

倒錯だろうとなんだだろうと、これ以上の幸福があるのか。

だが彼はそれを問いに対する答えとは受け取っていないようだった。

「アーフィア、他には？ もうないのか」

ほとんどせがむような調子で問うた。

私は何も考えていなかった。

考えもしないまま口走った。

「……歌が聴きたい」

言った瞬間に気付くべきだった。

だがラトローレが完璧に芸術的な抑揚の相槌でうながし、その先を引き出した。

「歌？」

歌。

魔王の武器。

天を降し、人の運命を捻じ曲げ、森羅万象を己の下へと引き寄せ  
る。

絶対の魔法。

「うん……そんなにきついんじゃない……詩人が歌うみたいに。

昔……メリエやイドウたちと戦ってた頃、野営の時に一度歌ってく  
れた。あんな感じ……」

言葉が記憶をよみがえらせる。

あれは本当に昔、魔軍に入営して間もなくの頃だ。

魔王とも魔王子とも知らず、正体を偽る彼らをただ同期の戦友と  
信じていたあの頃。

自己紹介が一通り済んだある夜に、焚火を囲む一人が言い出した。

「あんな詩人なんだろう。景気付けに一曲歌ってくれないか」

ラトールはゆったりと微笑んで言ったのだ。

「構わないが、私は呪歌歌いだ。過去の武勲いさおしを謳ったりはできない。今の何かを良きにつけ悪しきにつけ呪う歌になる。それでよければ何を呪わせる？」

言い出した者は鼻白んで黙り込み、代わりに別の者が名乗りをあげた。

人界では戦士として名を馳せ、武力、胆力共に秀で、出世の有望株と見られていた男だった。

「面白い。貴様のまじないを試してみようじゃないか。俺の未来を歌ってくれ。せいぜい華々しい武勲を頼むぞ」

そしてラトールは歌った。

勇敢なる男の戦い振りを。

その華々しく哀しい命の終わりを。

聴く者すべてを魅き込む、魔性の歌声に乗せて。

歌う間、声を漏らす者はなく、歌い終えた後は呼吸すら憚られた。その場の者全員が酔い痴れつつ、得体の知れぬ戦慄に背筋を冷やした。

男は翌日の戦闘で、歌の通りの派手で救いのない死を遂げた。

その後、かの詩人に余興を頼もうとする者は、誰一人としていなかった。

誰一人として。

「あっ……あの、ラトーレ……」

声が裏返った。

だが次を口にする前に、ラトーレがさらにきつく抱きすくめた。

「二度と使つなと言ったぞ。何回目だ」

からかうような囁き。

熱く痺れる肌の感触に言葉を奪われて呻くと、彼はあの時と同じようにゆったりと微笑んだ。

「無論、呪歌歌いには普通の歌というわけには行かないがね。それが望みと言うのなら。何を呪わせる？」

首を微かに振るぐらいしかできなかった。

だがそんなもの、ラトーレは無視すればいいだけだ。

そしてもちろん彼はそうした。

私を覗き込んで、楽しげに、本当に楽しげに言った。

「ないのか？ では聴かせなければならぬものがある。それを」

意外な言葉を聞き返す間もなく、ラトーレは低く歌い始めた。

耳元で、

優しく、

やわらかく、

とろけるように甘く、

幾度も幾度も繰り返して。

永遠の呪いを、まるで睦言むじごを囁くように。

「アーフィア、愛している」

### 35 祝歌（後書き）

『後日談の後日談』終了です。ありがとうございました。



### 36 襲撃

「ラトーレ」

僧形をした魔が静かに言った。

「約定ちやくじやうの時は満ちたぞ。よいのか」

語りかけられた側は物憂げに応えた。

「別に構わない。あちらが勝手に決めたことだ」

「そうか？ 贄はあちらのほうが高級なのではないか」

魔僧は言った。微かに擲揄ちやくじやうの響きを込めて。

応えは、微笑み。

ゆったりと。何かを思い出すような。

「そんなものはどうでもいい。今はもっと愉しい相手がいる」

魔僧を見やる。

「判はんじゃんてて言いっていいるんだらうつ」

「さてな」

楽しげな笑み。

「まあ私としては居てくれればありがたいだけだ。もともと「ちらは層が薄いゆえ。」

にしても、あちらは落胆しような」

「昔からあちらはつまらないんだ。つまらないことばかり言っている。こちらのほうがずっと愉しい」

ラトーレは喰い終えたばかりの、愉悦と苦悶に魂を砕かれた骸を横に押しやった。

身を起こし、いささか物足りなげに呟いた。

「アーフィア、早く戻ってこないかな……」

それは、いつもと変わらぬ階層移動の最中だった。

アーフィアは自分に向けられた敵意を感じて立ち止まった。

別に珍しいことではなかった。

よほど隠密行動を心がけているのでもなければ、歩き回っている以上天軍の目に留まることもある。

天と魔の兵士たちは、互いに相手がどちらに属する存在であるかを嗅ぎ取ることができた。

これといった目印を着けているわけでもないが、身に纏う気の質が根本的に違うのだ。信仰と信念に鎧われた聖なる心と、欲望と自由を揺らめく魔の心とは。

互いが互いを蔑み、あるいは憎んでおり、その存在を疎んじていた。

特に天軍にその傾向が強く、魔に連なる者を目にすれば例え独りと言えども滅さずにはおれぬのだ。

だから独りで階層を廻るアーフィアも、そういつた理由で天軍に狙われることにはある程度慣れていた。

そしてその対処にも。

アーフィアは軽く集中し、それまで少しずつ進んでいた階層を一気に大きくまたぎ越えた。

まっすぐではなく、やや捻じれた時空へ。

続けて二、三度同じような不規則な移動を繰り返す。

辿り着くのは気配を感じた場所より、戦場的にやや下層に位置する階層だ。

魔軍の兵士、それも人族はひたすら上層に向かうものを知る天軍にとつては、予想外の場所のはずだった。平行軸上でもずれが生じているため、気付かれることはまずない。

だが今回は違った。

移動を終えた階層の気が、みるみるうちに聖気に圧倒されていく。

敵意は明らかにアーフィアを追っているのだ。

アーフィアは違和感を覚えながらも、素早く防御の結界を周囲に敷いた。

確かめるようにそっと左手の指輪に触れる。

実のところ、今のアーフィアが天軍と直接戦う機会はありません。

必要がないのだ。

この指輪を与えた相手が、自分の分まで天軍を斃<sup>たお</sup>してくれるから。むしろ今階層を彷徨っているのにしても、その相手　魔王が彼女のせいで天軍を斃し過ぎ、しばし彼の許を離れる必要があったからだった。

だが無論、降りかかる火の粉に関しては話は別だ。積極的に戦わないからと言って、戦えないというわけではなかった。

独りで歩く者が、必ずしもただの迷子ではないことを理解させてやることぐらいはできる。

大気を覆う聖気が、およそ尋常ならぬ領域にまで達してきた。その時になってアーフィアは違和感の正体に気付いた。

運が悪ければ逃げた先ですぐ別の敵に見つかることもある。それは不思議なことではない。理屈に合う。だが。

稀に階層を越えて追ってくる者もいる。今回のように。だが。

不規則な転移を追跡し、正確に辿る。ある程度の実力が必要だ。今満ちつつある聖なる力も、それを物語っている。

だが。

かなりの大物。

こんな下層にいるはずのないほどの。

魔軍の者ですら、実力に見合わぬ戦場には留まらぬ。

厳然たる階級に支配される天軍では尚更だった。

この場はこれほどの力を有する者のいるべき場ではなかった。

なんらかの理由によって不当に低い階層を訪れるにしろ、目的を果たせば、あとは余計なものには見向きもせず、元の戦場へと戻ら  
ずだ。

目的を果たせば ？

アーフィアがある可能性に気付いた時。

臨界に達した聖気が爆発し、まばゆい光と共に一群の人の形に収束した。

36 襲撃（後書き）

この章は三人称になります。

### 37 神の子

臨界に達した聖気が爆発し、まばゆい光と共に一群の人の形に収束した。

複数。

アーフィアは油断なく警戒しながら正対した相手を見た。

後ろの数名は白く輝く翼を威圧的に羽ばたかせており、天使のいずれかの階級と知れた。

そして彼らを従える男は、あまりにも神々しく。  
正視していると跪きたいという衝動が湧き上がる。

額に頂く茨の冠が、話に聞く天軍の、ある偉大なる一柱を呼び覚ました。

慄然と、呟く。

「大神か……！」

対する相手は、唇を冷やややかな笑みの形に歪めた。迷える人類を導く慈愛なぞかけらもない、悪魔を滅する仮借なき審判者の貌だった。

深みのある魅力的な声が、氷の鞭となってアーフィアを打つ。

「そして汝は魔王子だな。詩人に魅入られし彷徨える魔王子アーフィア」

詩人とはラトローレのことだ。

魔王の称号を忌避してか、天軍の大將たちは彼をそう呼ぶと聞いたことがあった。

だが今はアーフィア自身を呼ばれたことのほうに気を取られた。称号付きで名指しされたことなぞ、初めてだったのだ。

前線に出ることを好まぬアーフィアは、自分の名と地位を自軍にすら公にはしていなかった。

ひた隠しにしているというほどでもないで、「人出身の女の魔王子」という知識は広まっている。

だがそれをアーフィアと知っているのは、「同僚」の魔王子二人と、「魅入った」魔王その人のみのはずだった。

「知らぬ間に有名になったものだな。身に余る光栄で、いささか持て余しているのだが」

アーフィアは己の裡に魔力を練り上げながら、慎重に間合いを測った。

いるはずのない場所にいる敵が、知るはずのない自分の名を呼ぶ。

疑いようはなかった。

彼らの目的は自分なのだ。

戦うにせよ、逃げるにせよ、力が必要だった。

純粹な疑問と時間稼ぎのために、言を継ぐ。

「ところで、そういうあなたは神の子とお見受けするが。天の御使



「いたちとピクニックにでも来られたか」

神のひとり子たる大神は、いよいよ冷酷に微笑んだ。

「詩人の毒が抜けず養生に來た。かの王を籠絡した目障りな魔を狩れば、少しは気も休まるうな」

戦慄が身裡を疾る。

魔王ラトールはアーフィアとの倒錯した一時を得るためだけに、天軍と戦いに出掛けることが結構あった。

随行することのある他の魔王子に聞くところでは、戦いと言っても恐ろしく一方的なもので、めばしい神々のいる階層に行つて歌うのみなのだという。

その魔性の歌声が天の士気を挫き、絶対のはずの信仰を土台から揺さぶり、突き崩す。

どんなに上級の神々も、彼の歌から逃れることはできない。己の信ずる至高の精神が折れ、苦惱しながら堕ちていく地獄絵図は、魔王を極限の酩酊状態に陥れる。

魔王の弁では、その酷く酔った状態でアーフィアを抱くのは「無茶苦茶で愉しい」のだとか。

彼女を得てからの魔王の撃墜数は、倍近くにもなっているという。それを知った上で狙われた、というのは至極納得のいくことだった。

「どうやって知ったのかはともかく。」

「どちらかというところ不可抗力の事態なんだが。せつかくの御指名で

心苦しいが、辞退するわけには行かないのかな」

大神一柱なら見込みもなくはない。また後ろの天使 恐らく大天使も含まれようが だけなら、やり合ってみてもいいかもしれない。

両方では荷が勝つ。

交渉で穏便に済ませたいところだった。

だが予想通り、交渉は時間稼ぎの役にしか立たぬようだった。大神は蔑むように応えた。

「天と魔は相容れぬ。例え此度の用がなくとも、魔王子を葬る機会を棒に振るものはおるまい」

「用 ？」

問い返しかけた言葉は天使の羽ばたきに溶けた。

横つ飛びに避けたその場を閃光が薙ぎ払う。爆発のあとには大地は深く抉り取られていた。

アーフィアにはそれを眺める余裕はなかった。

続けざまに放たれた光の矢が防壁を刺し、鮮やかな光の華を咲かせる。

力の余波で結界がたわみ、帯電するようにぼんやりと輝いた。

十分に蓄えた時点で、アーフィアは溜め込んだエネルギーを結界ごと解放した。

硝子が割れるような音と共に砕けた防壁は鋭利な刃と化し、天使の群へと降り注いだ。指輪を通じて魔力属性を光から闇に転換された飛礫は、聖なる盾を相殺しながら切り裂き、続いた刃が死点を抉

る。

穿たれた身体を維持できず、天使たちは次々と断末魔の光を撒き散らしながら崩れ、天の御許へと還っていった。

息をつく間もなく、生き残った者たちが殺到する。

アーフィアは指輪を填めた手をかざし、横に振り抜いた。風が妖かしの旋律を紡ぎ、かまいたちとなって天の眷属を切り刻む。

退りながら更に念じ、彼らに初撃で埋め込んだ闇を膨張させた。

傷口が闇に侵食されて腐り落ち、苦悶の声と共に天の鳥たちは地に堕ちた。

ほどなく荒涼とした地に立ち尽くすのは。

天軍と魔軍、互いに一たりのみとなった。

「……詩人の閨房でしか汝の強きは量れぬかと思っていたが」

大神が唾棄するように、だがいささかの驚きを以って言った。

「下衆な売女とても地位に相応しき力は有すると見える」

「下衆な売女ばいたとても地位に相応しき力は有すると見える」

「否定する気は全くないが、言葉が悪いな。一応は弱き人々を導く、慈しみ深き友なる救世主なのだろう」

応えながらアーフィアは、再び同じ疑問を覚えていた。

今の戦いぶりや大神の言葉からして、天軍が「反射」を軸じくとするアーフィアの攻撃方法や、その威力を知らなかったことは明らかだった。

普通「魔王子」の称号にかかるのは、直接的な強さ 戦闘能力だ。

然るにこの大神は、アーフィアが「下衆な売女」であることこそ魔王子たる所以ゆえんであるのを知っている。

魔軍の中枢でしか知り得ぬはずの、知識。

それに、何故今彼は仕掛けなかった。同時にかかってこられたら、さばききれなかった可能性も高い。

まるで力を試すような。

アーフィアは慎重に問うた。

嫌な感じがした。

「何が目的だ」

大神は冷ややかに笑んだ。

「汝を排除すれば、詩人の力を殺ぐことができよう。その理由では不満か」

天使を容易く屠<sup>ほぶ</sup>ったのを見ていた。

侮<sup>あ</sup>つてよい相手ではないことは判<sup>は</sup>つただろう。

それなのに、この余裕はなんだ。

じりじりと後退りながら、アーフィアは神経を研ぎ澄ませた。

嫌な感じ。

生存のための本能が最大級の警報を鳴らす。

「ではそれで納得しておこう。そのほうが都合がよいようだ」

次の瞬間、アーフィアは極限まで練り上げた魔力の塊を、目の前の神に叩きつけた。

暗気が炸裂すると同時に転移の術を発動し、適う限りの速度で階層を駆け上がり始める。

時折不規則移動を織り交ぜながら、ひたすら上層へ突っ走った。

どう考えても、理屈に合わな過ぎた。

今まで無関心だった天軍が急に大神級を差し向けてくるのも、

アーフィアのことを知っているのも、

わざわざ下層戦場で仕掛けてくるのも、

何もかも。

アーフィア自身ではなく、魔王に理由がかかっているのが気になった。下手に付き合うより、一度戻って経験豊かな他の魔王子たちの意見を仰いだほうがよい。

考えながら疾走して、とある階層を踏み越えようとした時、異変が起こった。

「!?」

まるで金色の綿の海に突っ込んでしまったかのようなだった。

やわらかで弾力のある雲が前進を阻み、渡りかけた階層に押し戻した。とっさに戻ろうとして階層全体が聖気の膜に包まれていることに気付く。

畏だ。

追い立てられてしゃにむに逃げるうちに、口を開けた袋の中に飛び込んでしまったのだ。

気付いて結界に穴を開ける暇もなく、先刻とは到底比べ物にならぬ凄まじい神気が満ちた。

大気がひずみ、発生した竜巻や落雷が轟音を響かせる。

相容れぬ密度の出現に、悲鳴を上げているかのようにだった。

茫然と立ち尽くすアーフィアを取り囲むように神々が顕現した。

一つ一つが先刻の大神に匹敵するか、それ以上の圧倒的な存在感と神威を備えている。

「それで」

正面に立つ四面四臂しめんしひの神が、殷々たる声で言った。

「この者が王を籠絡せし者か」

「神の子は」

雷霆らいていを操るオリンポスの大神の問いに、魔術と叡智えいちを極めたる隻眼の戦神が応える。

「眠りに堕ちた。天使らも斃れたな。ただの淫売とも言えぬようだ」  
アーフィアはごくりと唾を飲んだ。

知識でしか知らぬ天軍の上位者たち。  
これほどの数が一つ所に会するなどということは、噂でさえ聞いたことがなかった。

立っているのも息苦しいほどの威圧感だった。  
眩暈にも似た自失から立ち直り、ようやく絞り出した声はかすれていた。

「……まさか私のためにここまでしてくれたのか？ いささかサービス過剰なのではないかな」  
「詩人が困った娘なぞ今まで知らぬ。いかほどの加護を得ていようかと考えても、不思議はなからう」

胎児かたむすこの容をした正視もあたわぬ黄金の造物主が、籠った声で応えた。  
アーフィアは目を細めてそちらを見やり、せいぜい何げない様子で肩をすくめた。

「ラトールはそんなことを気にしない。私は死にくいかから重宝がらわれているだけなんだ。私一人葬るのにこれほどの方々の手は必要ないよ」

「案ずるな、卑しき魔王子よ。葬るのはいま少し先のことだ」

たかまがはら  
高天原の父神の言葉と共に、周囲の神々が手をかざした。

まばゆい糸がアーフィアに絡みつき、締め上げた。



### 39 予兆

まばゆい糸がアーフィアに絡みつき、締め上げた。

だが糸が全身を縛る直前に、アーフィアは一点に渾身の力を捻じ込んでいた。唯一彼らの包囲の及ばぬ場所 己の真下の大地を穿つ。

重力に引かれて、身体が穴に吸い込まれた。

重い水分を含む「下等な」肉体を持つ人の身でなければ、考えの及ばぬはずの方法だった。

アーフィアは続けて階層を包む聖なる結界の中和にかかった。

焦点がずれた時点で、光の縄目からはすり抜けている。大した時間稼ぎにはならないが、ほんの少しの間でもあれば次の手を打つことができる。

落下しながら真下に門を設定し、開く。

通り抜ければ、どこか別の階層に出る。

穴から虚空に飛び出した身体が、巨大な掌に受け止められた。

と、掌が拳の形に握り締められ、体の自由が奪われる。骨の砕けるような握力に息を詰まらせたアーフィアを、巨大な貌が見下ろした。

菩提樹ぼだいじゆの下にて悟りを得たる如来の、慈悲のかけらも見出せぬ瞳。

気が付けばアーフィアは、もとの場所で光の繭まゆにすまきにされて転がっていた。

愕然と目を見開く捕らわれの魔王王子を、天の神々が見下ろした。

「さても小賢しき女狐よ」

「我らにかように稚拙な策を弄するとは」

「詩人を捕らえし手管もこの下賤な頭より出たものか」

側頭を硬い靴底が踏みにじった。

痛みと締め付ける糸の息苦しさ<sup>くも</sup>に呻きが漏れる。

だがありえざる展開に心は麻痺していた。

天軍が魔を捕らえ、殺すこともなく侮蔑の言葉を浴びせかける。

わけが判らなかった。

こんなことは起こるはずがなかった。

「ラトーレ……ごめん……なさい……」

やがて痛みと苦しさ<sup>く</sup>と神々の聖なる気に耐え切れなくなり、ア  
フィアの意識は闇に沈んだ。

「よう、リゲイル」

出先の戦闘で軽く遊んできたバディッシュは、常と変わらぬ無表情に常の通り朗らかに語りかけた。

「どうした？ 辛気臭い顔してるぜ」

「途中でアーフィアを見かけなかったか」

リグイルは巨漢の魔王子を見て言った。

「アーフィアを？」

「帰ってこない。もう随分経つ」

肩をすくめる。

「ラトーレがそろそろ苛立ってきた。いつもちようどいい時機に戻ってくるのだが」

「いや、俺は見えてない。アーフィアは激戦区を避けるからな」

応えてからバディッシュは苦笑した。

「干渉しすぎじゃないか。少しは自由にさせてやれよ。心底慕ってるからいいようなものの、ラトーレの気分だけに合わせさせるのはちと可哀相だぜ」

「それはそうだがな……」

「なんだよ、齒切れ悪いな」

「いや」

リグイルは首を振り、話題の終了を宣言した。

「そなたの言うとおりで。アーフィアは贄ではない。私が案ずる理由はないな」

「バディツシユは興味深げに魔僧を見た。  
観察するような、視線。」

振り切るようにリゲイルは背を向けた。

「ではな」

だが立ち去ろうとしたリゲイルを、魔戦士が呼び止める。

「ああ、そうだ。ところで一つ妙なことがあったぜ」

首だけ振り向いた司祭に、バディツシユは不審さを思い出すようにわずかに眉を寄せて言った。

「通りすがった階層なんだが、酷く壊れててな。それも聖気がかなり残留してた。大神級以上が複数顕現してたようだが、ちよつと場所的に不自然でな」

「不自然？」

「ああ、特に大将が出張るほどの激しい戦闘区域ってわけじゃ」

魔戦士の言葉が途切れる。

代わって浮かんだのは、歪んだ微笑。  
同時に理解した様子の魔僧に嗤わらいかける。

「話が繋がったようだぜ」

リゲイルは完全に向き直っていた。

普段は動くことのない表情が、いつになく厳しく引き締まる。

「いかな」

「そんなにやばいか？」

問うた魔戦士に、魔僧は厳しい表情のまま、はっきりと頷いた。

「バディッシュ、調べてもらえぬか。下手をすればこの戦争が、終わる」

## 40 帰還

豪華な寝室。

唐突に白い外套を翻して現れた人影を、女神は驚くこともなく立って迎えた。

「来ると思っていた。

お帰りなさい、あなた」

「アーフィアを返せ」

ラトールは冷ややかに言った。

「返さなければ皆墮とす」

天を統べる女王は嫣然えんぜんと微笑んだ。

「歌いたければ、歌うがいい。王たるあなたが望むなら。ただし、あの娘がまず墮ちることになるけれど」

魔王に怒りの気配が浮かぶ。氷点下の口調で問うた。

「何をした」

暁の女神は豊かな黄金の髪に紛れる右の耳から、下げていた耳飾りを外した。

掌に輝く、白銀のリング。

何であるかを覚ったラトローレがわずかに身じろぐ。  
女王は嗤わらって掌を閉じた。

「これと同じこと。洗礼により、あの婢女はしためは神々の導管となった。  
天神すべてが受けた呪いが、あの女狐めに流れ込み、魂を汚すでし  
よう。あなたの劣情は受け容れたようだけれど」

声音に険が混じる。

拳の中で金属が軋る音がした。

「歌を容れる心はあるかしら？」

開かれた掌から銀の砂がこぼれ落ちた。  
儂い命が、肉体からこぼれるように。

女神はそのまま、疵一つない白くたおやかな手をさしのべた。

「お戻りなさいな、ラトローレ。魔なぞと戯れる、幼子のような真似  
は終わりにして。わらわならば、あなたをすべて受け容れられる。  
わらわはあなたの永遠の伴侶なのだから」

ラトローレは動かなかった。

ただ冷ややかな怒りを以って立ち尽くしていた。

女神は畏れるふうもなく、涼しげな表情で待つだけだった。

そして永劫とも思える時の果てに。

「アーフィアを返せ」

ついにラトローレは言った。

「アーフィアさえ抱けるのなら、どちらでも構わない」

女王の柳眉が苛立ちに逆立つ。

だがじきに嫉妬の炎も、光り輝くばかりの勝利の微笑みに溶けた。女神は傲然と言い放った。

「いいでしょう。卑しき贅の一人として差し上げるわ。忌々しい魔王子らを斃<sup>たお</sup>した酔いでも注いでやれば、さぞや喜ぶことでしょう」

ラトールは進み出た。

凍れる闇夜の瞳のまま、無言で女神の手を取り引き寄せた。唇が重なり、折り重なるように寝台に倒れた肢体が絡み合う。

至高神に抱かれた女神の、甘やかな嬌声が室内に満ちた。

「アーフィア」

静かな囁きが、アーフィアの混濁した意識を引き戻した。

両の頬を挟む、快く痺れるような掌の感触。覗き込む漆黒の瞳。

だが認識が視覚についてこなかった。

虚ろな声が唇から漏れる。



「な……ん……」

「来たよ、アーフィア」

額に触れる薄い唇。

耳元に囁くゆったりとした声。

「ラト……レ……？」

目をしばたいたアーフィアを、ラトールはやわらかく抱きすくめた。手足と呪力を封じる黄金の鎖がじゅらりと鳴る。

ラトールはいとおしげにアーフィアの髪を撫でた。

「もう、大丈夫だ」

熱く懐かしい抱擁に陶然となりながらも、だがアーフィアはすぐには納得できなかった。

あまりにも唐突過ぎた。

「どうして……？ どうやって……」

ラトールが一言歌うと、乾いた音を立てて鎖は砕けた。

長い間繋がれ、痛めつけられた身体ががくりと沈む。

掬うように抱き上げたラトールはそのまま歩いて空間を越え、娘の身体を寝台に横たえた。覆い被さりながら熱っぽく囁く。

「アーフィア」

動けぬ身体から、ごわごわした肌触りの囚人の麻服が剥ぎ取られていく。

アーフィアは抑えきれない違和感に苛まれていた。  
何かがおかしかった。

黒く濡れた瞳。

折伏に酔った魔王の瞳だ。

今までと変わりのない、いつもの、魔王の。

ラトールは言った。

恐ろしいほどの静けさで。

「アーフィアさえいれば、いい。どちらだろう」と

魔王、の。

「やめて」

アーフィアは身をよじった。

「そんなの、嫌だ……！」

押さえ込まれる。

首筋に這う薄い唇。

流れ込む酸の如き快樂。

分け与えられる勝利の美酒。

天軍の主に

詩神に

打ち砕かれし魔たちの、

救われることなき断末魔の叫び。

「嫌……いやあ……！」

か細い悲鳴はいつしか嗚咽に変わった。

やがてそれも至高神の注ぎ込む愉悦に覆い尽くされていく。

だが最後まで、アーフィアの涙が止まることはなかった。

## 41 選択肢

荒涼たる大地に魔の司祭は立ち尽くしていた。

つい最近まで魔界の中枢であったその地には、今や草一本見出すことはできない。王宮の名残が、山なす瓦礫に辛うじて留まっている程度だ。

それとてもはや遺跡とも呼べぬ、破壊し尽くされた石塊と見たほうが正しかった。

「ふん、えらい変わりようだな」

人を食ったいつもの口調で、魔僧の背後に現れた魔戦士が言った。

「天軍の奴ら、よほど恨みが溜まってたんだな」

リゲイルは振り向かずに行った。

「どうだ」

「侯爵以上で残ってるのは、俺とお前だけだ。伯爵ももう大して残っちゃいない」

バディッシュは静かに応えた。

肩をすくめる気配が魔僧に届く。

「ちなみに半分以上はラトーレにやられたぜ。本来ラトーレがいてもこっちのほうに分は悪かったのに、アーフィアとセットであつちに付かれちゃあなあ」

魔戦士が魔僧の横に並んだ。二人はしばし果てしない荒地を眺めた。

やがてバディッシュユが言った。

「さて、どうする」

「どうするかな」

リグイルの口調にはなんの感情もこもっていなかった。

「と言ってもあまり選択肢はないが。天に攻め入って、できる限り多くの神を道連れにするか、ラトールからひたすら逃げてみるか、あるいは座してラトールを待つか」

そこでふと目が遠くを彷徨う。

「我らを折伏した酔いを雪がれる時は、多少アーフィアも嘆こうかな」

バディッシュユは唇の端を歪めただけだった。

再び沈黙が流れる。

長い間の後に、魔戦士が口を開いた。

「リグイル。アーフィアを葬る方法はあるか。ラトールの歌声が及ばぬ彼方まで」

魔僧は隣に立つ魔王子を見た。

魔戦士は彼方を見つめたまま動かなかった。

「……できなくはない」

かなり置いて、リグイルは応えた。

「存在の核を取り出せぬようにすればよい。アーフィアを粉微塵に消し飛ばし、同時に別の存在を混ぜ込むのだ。呼びかけるべき魂が拡散してしまえば、いかな歌とて届きはしない。」

だが現実的ではないな。

アーフィアの魂はあまりにも巨きい。完全相殺に足る存在なぞありはすまい」

「ふん」

バディッシュは不敵に笑った。

「あるじゃないか。少なくともここに二つはな」

「バディッシュ」

「俺が行く」

魔戦士は言った。

ほとんど、楽しげに。

「捕まったアーフィアが馬鹿なんだ。責任は取ってもらおうぜ」  
「正気か」

「終わるはずのない戦争が終わりにかけてるところまで見れたんだ。俺はもう充分楽しんだよ。まあ飽きたってほどでもないがな。こんなくたばかりかたなら、悪くない」

「……年功序列で語るならば私が行くべきではないかね」

「馬鹿言え」

バディツシユは朗らかに笑った。

「俺やアーフィアには代わりがいる可能性がある。だがお前の代わりなんざ、いやしないだろうが。魔王がいなけりゃ魔王軍とは言えないぜ」

「」

リグイルはまじまじと傍らの魔王子を見つめた。

「気付いていたのか」

「俺だけじゃなく、多分アーフィアもな。まあ、王　ともちよつと違つかもしれんが」

魔戦士はあっさりと頷いた。

「ラトーレの力は魔の範疇を越えている。奇蹟に近い。どうせお堅い天軍に飽きて、息抜きしたくなつたつてところだろ。」

誰が魔王かつてのはともかく、少なくとも億劫戦争の魔軍のゲームマスターはお前だよ」

言い終わると同時にバディツシユは前に出た。

階層の扉が開き、踏み出した足先が虚空に消える。片手を上げて、去りがけに言った。

「じゃあな。こんなに面白い世界なんだ。終わらせたりしないで、もつというんな奴を楽しませてやってくれ」

そして魔戦士は歩み去った。

リゲイルは一人荒涼たる大地に立ち尽くした。



## 42 消滅

寝台に横たわる魔王子を、巨漢の魔王子が見下ろした。

「よう」

バディッシュの静かな声に、目を開いたアーフィアは微笑みで応えた。

「待っていた」

魔戦士は言った。

「悪いな。俺と心中だ」

アーフィアはにやりと笑んだ。

「私はあなたが嫌いだからな、バディッシュ。道連れにできるなら、これほど嬉しいことはないよ」

バディッシュも笑った。

朗らかに。楽しげに。

「残念だったな。俺はお前のこと気に入ってるよ。大いにな」  
「……………」

一時、二人の間に沈黙が落ちる。  
やがてアーフィアが低い声で呟いた。

「……すまない」  
「気にするな」

魔戦士は驚くほど優しい表情で、アーフィアの頭を撫でた。  
一転、いつもの悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「なくなっちまうからいいが、ラトールは怒るだろうなあ。言い残すことがあつたら今のうちだぞ」  
「うん」

アーフィアは素直に頷いた。  
独白するように静かに言った。

「もうずっと謝っていた。私はラトールのような自由な存在じゃない。結局、私は魔であることを選んだ人間に過ぎないんだ。魔王は受け容れられたけど、天王のラトールは別の相手に任せるよ。」  
それに

バディッシュユを見上げ、皮肉な笑みで語る。

「知っていたか？ ラトールには素晴らしく美人の奥方がいらっしやるんだ。それも、私と同じか、それ以上にべた惚れだ。」  
「どうも、夫婦仲の火種になってしまっているようだ。」  
「りんき 恪気も怖いし、不倫ごっこが終わりにできるのはありがたいね」

バディッシュユは笑った。

「いと高き神々の夫婦喧嘩か。」  
「まったく、面白い世界だよ。リグイルが立て直してくれることを心から祈るぜ」

「本当に」

アーフィアはふっと息を吐いた。  
静謐な瞳が魔王子を見る。

「　　ありがとう、バディッシュ」

「ああ。じゃあな」

バディッシュの声と同時に力の渦が二人を巻いた。  
白い光の珠が二人を包み込み、凄まじい圧力と共に収縮していく。

光の中で、二人を構成していた物質が　　存在そのものが、  
分解され、溶融し、

魂の元素にまで還元され、  
渾然たる原始の混沌へと回帰していった。

最後に限界まで圧縮された光が消えた。

後には何も残っていなかった。

### 43 魂の海

二つの骸を見下ろす、二つの影があった。

僧形をした者が、掲げていた黒い錫杖を地についた。  
展開されていた術に込められていた、膨大な魔力の残滓<sup>ざんし</sup>が空に溶けていく。

「……ここまでだ」

魔僧が言った。

かつて魔王子であった男と女の遺骸を前にして。

「これ以上はあらゆる事象の分を超える。器が蘇ろうとも、呼び戻せるのは形ある魂だけだ。

融けた魂は次の命とならずに生まれ出ることはない。

それが人の理だ」

白を纏う者が低く言う。

「人じゃない。二人とも」

「不可能だ」

「それでもだ」

漆黒の瞳を煌かせながら、白き者は強い調子で囁いた。

「赦すものか。こんな勝手は絶対に赦さない」

リゲイルが肩をすくめる。

だがその瞳には、同様の烈しい光が宿っていた。

「その点についてはまったく同感だがな」

「そうだ。赦さない。

戻って、償ってもらおう」

ラトールは凄絶に微笑んだ。

「アーフィア。バディッシュ」

朗々たる歌声が、時空を越えて満ちた。

巨きな海。

強いて言えばそんな世界だった。

個もなく自我もなく、感情の引き起こす摩擦や波も何もない。  
穏やかにたゆたう、静寂の世界。

あらゆる場所に己が偏在し、  
また存在していなかった。

すべてが一つであり、  
一つがすべてだった。

ここには争いも平和も、憎しみも愛もありえなかった。  
ただ静寂のみが支配する、闇と光の狭間の海。  
人の魂が融けた海だった。

ここから水が汲み上げられ、肉の器へ入って生命を得る。  
そして死ねば海に戻り、ぬるま湯に落ちた氷のごとく融けて一つになる。

その海に呼びかける声があった。

すべてが融け混ざった世界においてはなんの意味もなさぬ、二つの言葉。

海はたゆたい、言葉はうたかたとなって儚く溶けていく。

だがうたかたに過ぎなかった声は、止むことなく殷々と響き渡った。

やがて静寂の海は波立ち、歌声は渦となって、魂の溜池を攪拌し始めた。

強大な渦が、魂の水を漉し取る。

無意味であったはずの言葉を構成していた粒子を、少しずつ分離していく。

「アーフィア。

バディッシュユ。

戻れ」

轟々たる渦の中で歌が命じた。

無理矢理融かし込まれていた二つの意識が、異物として弾き出された。

#### 44 嘘つきやがって

「」

二人は同時に目を開いた。そして同時に同じものを見て目をしばたいた。綺麗に重なった声が二人の口から漏れる。

『ラトール？ リグイル？』

ラトールは女に言った。

「永久に、と言ったぞ」

リグイルは男に言った。

「下手くそ」

二人はゆっくりと身を起こした。

一緒だったのはそこまでで、かがみ込んだ白き王がアーフィアを引き起こして抱きすくめた。一瞬の遅滞もなく頭を傾け、唇を合わせる。

バディッシュが微かに眉を寄せた。

だがリグイルに声をかけられると、そちらを見た。

「バディッシュ」

「下手くそってことがあるか。嘘つきやがって」



魔戦士はこぼした。

「俺はちゃんとやったぞ。綺麗さっぱり木っ端微塵にな」

「どこがだ。そなたの悪癖のお陰で、形跡なぞそこいらじゅうに残留していたわ」

リグイルは顎で周囲を示した。

二人の横たわっていた地には、折れた剣や弓に始まり、裂けた鞭やら熔けた斧など、壊れた武器が散乱していた。

「神々や他の魔王子では判別もつかぬ力の痕が、そなたに限って熱病のごとく蔓延しておる。」

アーフィアがラトールの中に、他の者には遺し得なんだ熱い愉悦の酒と、尽きせぬ想いの泉を遺していたように」

黄泉より戻りしもう一人の魔王子を見やって言う。

「人は魂の海に融ければ取り出せぬ。」

そなたらが人の身でありながら、人ではあり得ぬ証だ。代わりがある可能性なぞないということだな」

「お前、怒ってるのか？」

「当たり前だ。ただでさえ足りぬ魔王子が、よりによって潰し合うなぞ」

リグイルは冷ややかに切り捨てた。

だが直後、その瞳がわずかに和む。

「私と天軍が運営する遊技場で、最も楽しんでいるのはそなただ。命なぞを賭け金にせずとも賭けるものがあるう。飽きていないなら

もつと遊んでいくがいい」

「お前からそんな台詞が聞けるとは……。」

「っ」

バディッシュは再び眉を寄せた。

首を捻り、横合いでいよいよ激しく詩神に抱擁され求められている相手に言う。

「おい、アーフィア！ 指輪がないからって俺に繋ぐな！」

「なに？」

ラトールが貪るように味わっていた唇から離れた。腕の中からずり落ちかけた身体を支え、見下ろす。

アーフィアはラトールのあまりに強過ぎる情欲に耐え切れず、ほとんど自失状態で熱い吐息を漏らしていた。

潤んだ瞳は艶っぽく濡れており、何かを知覚している様子はなかった。ラトールが頭を支える掌を頬から首筋に滑らせると、哀しげなほどに切ない呻きが漏れる。

完全に堕ちたる虜の反応だった。

だが他のあらゆる相手と異なり、ラトールもまたアーフィアの虜なのだ。

こみ上げてくるいとおしさをそのまま抱擁に込める。

同時に、バディッシュが舌打ちした。

「くそ、どうなってる」

ラトールは腕に抱く者の魂の疼きをゆったりと味わってから、顔を上げた。

「少し混ざってる」

魔僧が笑い出した。

「なるほど。人から逸脱した者同士では、さしものラトールの歌も分かちきれなんだか。」

バディッシュよ、面白いことになったではないか」

「おい、冗談じゃないぞ」

バディッシュが唸った。

ラトールは気にしたふうもなく再び軽く唇を重ねて味を確かめ、ぞわりとした笑みを浮かべた。

「早くゆっくり抱きたいな。すごく愉しそうだ。ねえ、アーフィア」

アーフィアはぐったりと魔王にもたれかかりながら、頷いた。

「バディッシュが、困ってる。こんなの、初めてだ……」

「覗きでもしてる気分だぜ」

巨漢の魔王子のぼやき。

アーフィアが微笑んで同調を高めると、払い退けるように頭を振って悪態をついた。

「くそう、これは慣れるのにかなりかかるぞ」

「安心しろ。時間は充分にある」

収まらぬ笑いを声に混ぜながら魔僧が言った。

「ラトーレが腹立ち紛れに天軍をすべて折伏してしまった。あちらが目覚めるまでしばらく休戦だ」

「……俺は思うんだが、ラトーレの存在ってのは反則に近いんじゃないか」

「普通ならそんなことはしないし、できない。途中で酔い過ぎてわけが判らなくなる」

バディツシュの呆れた眩きに、詩神にして魔王たる者が応えた。

「アーフィアを消したのはあちらだと思ったんだ。

あまりにも頭に来て、いくら歌っても全然酔えなかった。

狡いリゲイルは全員墮とした頃にやって来て真相を話した」

「バディツシュの武器を集めていただけだ。

行ってみたら誰一人残っていないにも関わらず、ラトーレが天の神々を呪い続けていた。教えねば永久に歌っていそうな勢いだっただぞ。そこまでやられると、いくら神々と言えども完全に滅んでしま

う。

戦争に勝つのは避けたかったゆえ」

「……なんだかなあ。俺は死に損か」

バディツシュが苦笑する。

軽い動作で荒れた大地に立ち上がった。

「さて？ 帰る場所はあるのか」

「あの地は回復までまだかかると。天の城をしばらく借りるか」

「神々が草葉の陰で泣くぞ」

そして四人は歩み去った。

## 45 人と魔と天と

「アーフィア」

やわらかな歌声が娘を包む。

陶然となりながら、のしかかっってきた相手の頬にアーフィアは手を延べた。

「あんなに美しい奥方なのに。いいのか、私で」

ラトールはその手を掴んで横にずらし、人ならぬ身体を娘の上に預けた。

「妻なんかじゃない。勝手に言っただけだ」

ゆるやかな愛撫。にじむ愉悦を至福の表情で味わう。

「アーフィアのほうが、ずっといい」

「ラトール」

アーフィアは言った。

「私は結局人である魔にしかねなかつた。あなたは自由で、魔でも天でもない。私にこだわる必要なんか、ない」

頬を伝う、涙。

魔を斃したラトールの、酔いを注ぎ込まれた時の恐怖がよみがえる。

愛しているのに、怖くて絶望的で恐ろしくて仕方なかつた。

「私には無理だよ。あなたには相応しくない。怖い」

「アーフィア」

「ごめんなさい。でも、駄目なんだ」

ラトールは身体を重ねたまま、娘の頭を両の掌で包んだ。

「何度禁じてもその言葉を使うんだな。言うだけ無駄なのか」

囁きながら頬に唇をつける。

「そう、言うだけ無駄だ。」

「私はアーフィアを離さない。絶対に」

「ラトール、お願い……」

「嫌だ」

熱い囁き。

「そんなものを願うな。どうして叶えられないことばかり願う」

アーフィアは首を振った。

「あなたを煩わせたくない……」

「好きなだけ煩わせていいと言っている」

「……じゃあ、頼む」

アーフィアはラトールを見上げた。

涙に潤んだ瞳が静かな意志を込めて、至近からまっすぐ漆黒の目を見る。

「魔軍では私があなたの恋人だ。」

だが神に戻る時は、私を忘れてくれ。

私が捕まって死ぬしかないというなら死なせてくれ。

私に天王は愛せない。天ではあの奥方を愛すればいい。私の魂の味が好きなだけなら仕方ないが、もし」

声が震える。だが瞳は揺らがなかった。

「もし私のすべてが欲しいというなら、せめてその間は魔王でいてくれ」

ラトーレは娘にくちづけた。

「天で抱いたアーフィアは絶望の味がした」

離れた彼は言った。

微かな痛みを声に滲ませて。

「普通絶望は愉悦と同じくらい美味しいんだ。愉悦に絶望が混ざると、刺激的で甘さが引き立つ。」

なのにアーフィアの絶望は、混じったら苦くなった。ひどく濁った味に感じた」

「……」

「全然、愉しくなかったんだ。でも抱かすにはいられない。酔えばお互い狂うから、絶望なんて感じられなくなるかと思ったけど、余計に不味くなるだけだった」

深い闇を湛えた瞳でアーフィアを捕らえて、ラトーレは言葉を重ねる。



「アーフィアの味は好きだ。とても甘い。だがそれは、私にすべてを与えているからだ。なのに私はアーフィアに半分しか与えていなかった。」

ならばアーフィア、与えられない半分は捨てよう。至高神たる側面を」

アーフィアはほとんど動けないながらも微かに首を振った。

彼の心は嬉しかったが、そこまでしてほしくはなかった。絶対的な上位者である彼が、たかだか半人半魔のためにそんなことをしていいはずがなかった。

「捨てなくていい……。その半分を、私に見えないようにしてくれればいいだけなんだ。私はただ……」

「私のアーフィア」

歌うがごとき囁きが言葉を封じた。

「そうやって、すべてを捧げてしまおうとする。」

私にも与えさせておくれ。それが私にとっても喜びなのだよ」

アーフィアは泣いた。

「どうして？ どうして私なんだ。たくさんの贄も、綺麗な天の奥方も、皆があなたを求めた。彼女たちに与えないで、どうして望まぬ私に与えようとする？」

私が欲しいのは、ほんの少しの憐れみだけなのに。

あなたの酔いを醒まして、そのおこぼれに与ればいいだけなのに」

「」

ラトーレは娘の涙をそつと舐め取った。  
幼子をあやすように、歌って聴かせた。

## 46 公平な取引

ラトールは歌った。

奪うことしか知らぬ魔王に、与えた者の物語を。

そのすべての始まりから。

「そう、皆私を求めた。

私が求め、奪うものと同等のものを奪おうとした。私とあれらとは互いに奪い合い、それで満足していた。

でもアーフィアは違った。

始めは何も求めなかった。

私から奪い得る毒の美酒を口にすることを望まず、それで生き残ってしまった。

あの時点で歯車は回り出していたのだよ。

珍しさからゲームが始まり、私は常と同じようにアーフィアを求めた。いくら喰っても求めようとしないアーフィアに、私の興はますますかきたてられた。

奪って、奪って。

とうとうその時が来た。

折れたと言ってすべてを差し出されて、謎は解けた。

私に与えようとした者なぞいなかったのだ。

そう思った時、途中あたりからアーフィアが無意識に与え続けていたことに、さらに気付いた。

奪い合う交わりよりなんと甘美だったことか。

賭けは私の負けだった。

飽きてなぞいなかったから、厳密に言えば違うのかもしれないが、私は敗北を感じた。贅と思っていた相手に、いつの間にか心奪われたという事実。

だから苛立ち紛れに捨ててしまった。

もちろん馬鹿げた衝動的な行動だ。捨てた後に別の贅でいくら試しても、与えてくれる者はいなかった。一度憶えた味に比べると、何もかもが物足りなかった。

私は歌うか喰うかの、どちらかしかすることができない存在だ。そして歌えば酔い、喰っても醒ませない。

あの時のことはよく憶えていない。

喰べた魂がどこかの穴に吸い込まれていくようだった。

それでも私は歌い続け、喰い続けねばならない。何が足りないかももう判らず、酔っ払って私に課された行為を続けるだけだった。

ペースが落ち、戦況が悪くなればリグイルは気付く。

バディッシュは最初から知っていたのだろうがね。

私が捨て去り、忘れ去ったものをあの二人は憶えていたんだ。

そして戻ったアーフィアを再び喰い始めた時も、私は全く気が付かなかった。

いつもと同じように貪り、奪おうとした。相手がそう望むように。だが何かがおかしかった。

引き裂いても抉っても、流れてくるのは優しく穏やかな甘味だけだった。私の酔いを鎮めようとする思いやりと、すべてを与えて死んでいけることに対する満足感があふれていた。

本当に危うい所で、自分が見境なく喰い尽くそうとしているものが、なんであるのかが見えた。

だがアーフィアはまた差し出そうとした。

すべて与えてしまえばアーフィアには何も残らない。対価を受け取ってもらわねばなかった。

だから与えたんだ。

私から奪われるものは気にしたことがなかったが、自分から与えたことはなかった。

あれほど素晴らしいものだとは思わなかったよ。

心が繋がって、融けて一つになってしまえそうだった。

アーフィアから奪う必要なんてない。望めばいくらでも分け与えてくれる。

だけどアーフィア、そうやって与えたいと望むなら、私からも受け取らねばならないよ。

それが公平な取引というものだ」

「……………」

アーフィアは半眼で朦朧と魔性の歌い手を見た。

彼の歌は直截脳に、魂に響く。

心に刻み込み、思考を上書きしていくような面があった。

何も考えられず、虚ろな返答が滑り出た。

「そう　あなたが望むの……なら」

## 47 真実と終わり

何も考えられず、虚ろな返答が滑り出た。

「そう　あなたが望むの……なら」

だが望み通りであるはずの応えに、ラトールは当惑の色を浮かべた。

己の歌が引き起こした結果に気付くと、いささか不快げに囁いた。

「それじゃ駄目だ」

「……あ……」

アーフィアはなんとか意識の制御を取り戻し、言葉の意味を反芻はんすうした。

やがて弱々しい苦笑を口の端に刻む。

「ごめんなさい。でもこれが私の限界なんだ。限界なく比類なき御方。

あなたに公平なんて言葉は相応しくない。　そうだな。対価あがなつていうのはいい言葉だ。私のすべてで魔王の酔いの一部を贖あがなえるところが順当かな」

ラトールは不愉快そうに眉を寄せた。

だが彼が口を開く前に、アーフィアはくすりと微笑んで詩人の頭に腕を延べた。

「けどあなたは私から搾取し過ぎたと言うんだな。　なら対価を請求してもいいのかな？」

実はさる高級な指輪をなくしてしまつてね。あれがあればもう少し高く売れそうだ」

いとおしげに白銀の髪に指を埋め、そつと梳く。

この美しい糸を、ほんの数本撚り合わせて造られた指輪だった。もとを正せば気紛れの産物ではあるが、稀有なる贈り物であることに間違いなかった。

「あなただつて最初から与えてくれていたよ。奥方が指輪をむしり取つた時なんか、見せたかつたな。焼き殺されそうな、もの凄い嫉妬だつた。

互いが与えたものを、取るに足りないと思つていなかっただけなんだ」

笑みが気弱なものになる。

「まあ、実際あなたにとっては取るに足りないものかもしれないけど……」

ラトーレは頭をずらして、娘の手を外させた。

「少なくとも、今は違う。それにアーフィアがそういう考えでいると、私がいくらか心を込めても無駄になつてしまつたらう？」

言葉ににじむ、たしなめるような響き。

気付いたアーフィアは、はつと手を引いた。

同時に彼に向けて開いていた心も、内に呼び戻して扉を閉ざす。己の心の弱さを恥じて、目を逸らした。



「……ごめんなさい」

恥じ入った声。

「本当に、いたらない……。やはり私にはあなたと取引する資格なぞ、ないよ。支払われた代価の価値も量ることができないのだから

……」

「アーフィア」

だが言い終える前に、頭が引き戻され、視線を絡め取られた。アーフィアの精神がこじ開けられ、魔王の意識が捻じ込まれる。

熱い想いが障壁を溶かし、娘の心に触れる。  
心が交わり、互いの想いが交感した。

魔王の混じりけのない愛情と、アーフィアの。

「」

ラトーレは軽く目を見張った。

「アーフィア……？」

「……だから、言ったんだ。

私には無理だと。あなたには相応しくないと」

アーフィアはすすり泣いた。

捕まって、初めて見たときから、相手の目に浮かんだ感情と同じものが湧き上がっていた。

自分の意思では外すこともできなかつた指輪をいとも容易く奪わ

れて。

己には決して手の届かぬものを持つ相手であることを、理解した。

身の焦げるように、烈しく。

昏い嫉妬。

「奥方を笑えやしない。私の心なんか、しょせん醜い独占欲と嫉妬の塊に過ぎないんだ」

そしてアーフィアは笑んだ。

皮肉な、本当に皮肉な笑みだった。

「奥方の輝くような美しさが、あなたに相応しい強大な力が、羨ましくて妬ましくて仕方なかった。

……ラトーレ、何回も頼んだのに喰い尽くしてくれなかったな。でも今度こそ望める。私の性根は腐って堕ちてしまった。

あなたが欲しい。あなたの毒の美酒を浴びるほど味わいたい。どんな贅より貪欲に奪うよ。私の命で贖える限り、ひとしずくでも多く……」

言葉がかすれ、嗚咽が取って代わった。情けなくて、切なくて。消え入りそうな囁き。

「だから、頼む。

もう、終わりにしてくれ……」

「……」

魔王の瞳は量り難かった。

漆黒の闇が娘を見下ろし、やがて静かな声でそつと言った。

「では試してみるがいい」

頭が下がり、唇が重なる。

魔王の愉悦の酒がどつと流し込まれるのを感じて、アーフィアは己の欲望を解放した。

逸らしも逃しもせず、すべての酒精を己の裡に取り込み、同時に全霊をかけて彼を求めた。

「ラトーレ……ラトーレ……っ」

自分の想いと同じだけの見返りを、相手に要求する。

単純だが、魔王相手にこれほど不遜な欲望があるうか。

分別に恵まれすぎていたために、他の贄が無意識に選び取っていたこの選択肢を、最後まで避けてしまった。

これで、終われる。

でも、なんて素晴らしいんだろう……。

安堵感と凄まじい愉悦に満たされながら、アーフィアはくたびれた魂を混沌の中に投げ込んだ。

優しく慈悲深い暗黒が、やわらかくアーフィアを包んで押し流し

た。

## 48 永遠の

目覚めを腕の中で確認した魔王は、意地悪く微笑んだ。

「それで？」

「え……」

アーフィアは目をしばたき、次いで魔王をみとめてまた瞠目した。

「どう……して」

「取引は成立だ。結局私の与えようとしたものを受け取る気はあったんだな。愚かなアーフィア」

理解できずに茫然と見上げる娘に、魔王はやわらかくちづけた。そのまま離れず耳元に囁きかける。

「いつになったらそうして求めてくれるのかと思っていた。

私はアーフィアを独占しているというのに、アーフィアが私を独占して何が悪い？」

くちづけは常と同じく心をかき乱した。

二重の混乱に見舞われたアーフィアは、喘ぐような声で漏らした。

「だって、毒だって、言ったのに……。あんなに貪って、助かるはず、ないのに……」

「今までどれほど注ぎ込んだと思っている？ 毒に強くもなるだろうな」

からかうような応えに、アーフィアは返すことができない。

始めの頃は一度抱かれるたびに魂を抉る爪に穢けがされ、精神に埋め込まれる牙に蝕まれて、快復に永い時間を必要としたものだった。それがいつしか注がれる猛毒の甘さに酔い痴れ、さらに再び酔うために回復の眠りを必要とするようになっていた。

「慣れ」たわけではない。

そのような魂に変質してしまったのだ。

魔王の愛に耐え得る魂に。

浮かんできた認識の途方もなさに呻いたアーフィアに、ラトールが優しく語った。

「それに、やっぱりアーフィアは奪うことができなかった。

今まで逃がしていた愉悦を受け容れて、味わっていただけだ。それこそ私の願いどおりに。

お前が奥方と呼ぶ、あの女神とは全然違う」

話に出された比較の相手に、アーフィアがびくりと反応する。

湧き上がってきた、惨めなまでの劣等感に耐えようと唇を噛んで顔をそむけたが、ラトールは穏やかな声で続けた。

「あれは喰った毒を溜め込んで、力でねじ伏せているだけだ。

だから耐えられなくなると自分の欲を抑えられるように、私を手が届かない魔軍に貸し出す」

「貸……す……？」

王を？

そう不審げに続ける前に、ラトーレは微かに笑った。

「私は歌って酔っ払って愉しめればどうでもいい。便利だが強すぎる道具といったところだな。いかに使うかは、リゲイルやあの女神の力量だ。」

あれらの意図と私の意思が反発しなかったから、今まではうまく行っていた」

今までは。

「私の……せいか」

唸るようなアーフィアの呟きに、ラトーレがかぶせる。

「そうだ。あそこまで直截的に出るとは思わなかったが。自分には手に入れることのできなかったものを得ているアーフィアが、あの女神には許せなかったんだ。」

そして嫉妬が理性のたがを外し、私の使い方を誤った。

私に関わる者の多くが最終的に辿る路に、とうとう踏み込んでしまった。

破滅の路に」

最後の言葉は、恐ろしく冷やかな響きを含んでいた。

通常、天の上位者たちは破滅はしない。受けた疵を永き眠りによって回復し、甦る。

彼等の纏う信仰という名の鎧は、それほど強固なのだ。

だが至高の主たるラトーレが、憎悪と共にその存在を否定し、滅びを望んだら。

ではあの女神は滅びてしまったのだ。

痺れるような戦慄がアーフィアを包む。

あれほどの力と美に輝いていた、神々の女王が。

今、自分を抱くこの王の、まさにこの目的のために、消し去られてしまったのだ。

怯える娘に魔王は低く静かに言った。

「どのみち赦すつもりはなかった。アーフィアをあんな目に遭

わせて」

「ラトーレ……」

抑え切れぬ瞋恚の炎が、魔王の声から漏れていた。

アーフィアは顔を両手で覆った。

自分の恋した相手の深い怒りと、それ以上に深い愛を知って。

見返りのなんと重い恋であることが。

押し潰されてしまいそうだった。

アーフィアの手には余った。

余って、いるのに。。。

その時、きらりと銀色の光が視界をかすめた。

指の間から漏れる光を反射し、自らもほの白く浮かび上がる、銀色の。。。

慌ててすらそうとした手をラトーレが掴んで引き寄せた。



指輪と、填められた薬指にそつと唇を這わせる。

「今度は誰にも壊させはしない」

言葉に反応して指輪が輝きを増す。

「私のアーフィア」

込められた魔法が、歌となって殷々と響いた。

アーフィアは指輪と魔王とを、目を見開いたまま見つめていた。  
長い間、見つめていた。

そして長い長い沈黙ののち、かすれた、小さな声で呟いた。

「私……の、ラトール……」

「そうだ」

ラトールは微笑み、娘を引き寄せた。

応えるようにアーフィアが魔王の背と頭に腕をまわす。

抱擁と、くちづけ。



## 48 永遠の（後書き）

『後日談の果てに』終了です。ありがとうございました。

## 49 魔王子の饗宴

大地を揺るがす爆発音が響き渡る。

魔僧リグイルは、自分が管理する王宮の一角が消し飛んだのを感じた。

「またか」

現場に向かうと、折しも激戦の真っ只中だった。

煙と粉塵の中で二つの人影が交錯し、超絶した技と魔術とがぶつかり合っている。

小さい人影が跳び退って距離をとり、術を放った。

閃光の弾幕が粉塵を切り裂き、大きい人影を撃つ。

だが相手が手にした剣を一閃すると、魔法の矢は半分以上が切り裂かれ、あるいは弾かれた。

そして弾かれた魔弾は城の尖塔のいくつかを木っ端微塵にする。

残った矢は三分の一ほどまで数を減じつつも、相手に命中した。

爆音と光の嵐が巻き起こるが、尖塔を砕いた術の威力も彼の防御結界に阻まれて、大した損傷は与えていないようだ。

その一撃が戦士のさらなる闘争本能を呼び覚ましたようだった。

一瞬で間合いを詰め、禍々しい力を纏った剣が神速で振り下ろされる。

小柄な人物は、逃げずに相手に向かって一步踏み込んだ。間合いの内側に入られたことで、必殺の一撃の威力は殺される。反対にすれ違いざまに魔力を叩き込まれた剣士のわき腹が陥没した。肋骨が何本か砕けたことは間違いない。

とは言え小柄な方も無傷では済まなかった。

挟まれた肩から血がしぶく。だらりと垂れた左腕は動かさそうにない。

小柄な方は治癒を試みようとしたが、戦士は怪我をもともせず再び攻撃を開始した。

魔術師は慌てて術の方向を変え、飛来した呪弾をどうにか遣り過ごす。辛うじて逸れた魔力の塊は、城壁をこつそりと抉り去った。

その隙に戦士は自分の間合いに相手を捉えていた。

後手に回ってしまった魔術師は攻撃をさばききれず、見る間に劣勢に追い込まれた。

逃げ道を塞がれ、攻撃の暇も与えられず、防御の術を使い果たし。

「そこまで」

リギルの声に反応して、打ち下ろされた斬撃が魔術師の眉間の手前で軌道を変えた。

肩すれすれを削ぐように落ちていった剣が、轟音と共に大地を大きく削って止まる。

振り向いた魔戦士が言った。

「よづ。来てたのか」

「やりあつのは構わぬが、できれば別の場所にしてほしいものだ」

淡々と言ったりグイルに、魔戦士バディッシュは瓦礫の山にもたれて座り込む魔術師を剣先で示して言った。

「俺はあつちでやるうって言ったんだ。アーフィアが悪い」

「私は断つたのに」

魔僧に見られたアーフィアは、疲れ果てた声で呟くように言った。怪我は治したが、ぼろぼろの衣服と同様、心身が擦り切れていた。疲弊して立ち上がることもできない。

毎度のことだ。

「嫌だつて言ったのに、斬りかかってきたんだ……」。

絶対、嫌だつて、言ったじゃないか……」

「そんなこと言つたつて無駄なのに逃げようとしたんだから、やっぱりお前が悪い」

バディッシュはぬけぬけと言つた。

「最近ラトーレのせいで暇なんだから、お前が代わりに相手するの

は当然だろ?」

「そんなの、ラトールレに言ってくれ……」

「ラトールレに言ったって無駄だろ。歌い殺されるのが落ちだ。馬鹿かお前」

聞く耳を持たない魔戦士の言い草に、アーフィアは悲しげに嘆息する。

確かにラトールレに言うのは無駄だろうが、この男にも何を言っても無駄なのだ。

とりあえず、この場にいるもう一たりの魔王子に矛先を向けてみる。

「あなたが相手をしてくれないか?」

「断る」

にべもなくリグイルは即答した。

無表情な魔僧の瞳に、ほんの一瞬ユーモアの気配が閃く。

「私とて命が惜しい。このような怪物と戦う者の気が知れぬ」

## 50 弱い者虐め

「私とて命が惜しい。このような怪物と戦う者の気が知れぬ」

アーフィアは歯軋りした。

どうしても諦めきれないのか、再びバディッシュの説得を試みた。

「あなたは強い相手と戦うのが好きなんだろう？ これは弱い者虐めだぞ。私なんかをこてんぱんに叩きのめして何が楽しいんだ。

だいたい、今は他にも強そうな魔王子がいっぱいいるじゃないか」

天の神々がラトーレにほぼ全滅させられた一件の後、魔軍の将校は膨大な数に膨れ上がった。統制を欠く天軍を相手に戦果を稼ぎ、簡単に位階を駆け上がることができたためだ。

貴族や将軍位を得た兵は、瞬く間に以前に十倍する数となった。

やがて神々は眠りから復活し始めて、現在は戦力の均衡は戻りつつある。

魔軍に於いても弱者は淘汰され、残っているのは実力と野心を兼ね備えた、魔軍の将と呼ぶに足る力の持ち主たちだ。

特に魔王子まで昇ってきた者たちは血の気も多く、アーフィアら古参の魔王子には敵愾心てきがいしんさえ燃やしているようだった。

あの者たちならば、バディッシュが誘えば嬉々として手合わせに応じ、しかも隙あらば己の実力が相手を凌駕することを実証しようとするだろう。

手加減無用の戦いが楽しめるに違いない。

バディッシュは鼻を鳴らした。



「お前、弱い者虐めって言葉の意味知ってんのか？」

何を言われたか判らず首を傾げたアーフィアに、つまらなげな口調で言う。

「知りたきゃお前があいつらと戦ってみるよ。な、リグイル」

振られたリグイルも僅かに肩をすくめて頷く。

「残念ながら、まだバディッシュと遊ばせてやるわけには行かぬ。多少有望かと思っていたが、あれではな」

無論、魔戦士はとうの昔に“その遊び”を試していた。リグイルもたまたま現場を目撃していた。

ある時、新たな魔王子の一たりがバディッシュを挑発したのだ。

それは、先だつての天・魔双方が大打撃を被った戦いで彼が生き残ったのは、怖気づいて隠れていたからではないか　といった内容だった。

バディッシュは血気に逸る新参者に侮辱されたからと言って、気にするような性格ではない。

だが暇を持て余していたこの魔戦士が、売られた喧嘩を快く買わないはずもなかった。

結果として、その新たな魔王子は　。

相手が気前よく買おうとしたのが、とてつもない高額商品で。

自分が売ったのが、とんだ欠陥品だったことを。

身を以って思い知らされる羽目になった。

手も足も出ぬまま、瞬く間に、完膚なきまでに、叩き潰されたのである。

拳句の、身も蓋も恥も外聞もない命乞いに興を殺がれたバディッシュから、彼はほうほうの体で逃げ出した。

そしてその足で速やかに魔王子位を返上して、自ら三つほど階級を下っていった。

伯爵位まで下がれば、バディッシュと戦場で遭う可能性はまずない。

それが理由だった。

魔戦士の話すところでは、似たような出来事が一度ならずあったらしい。

バディッシュの性格からするに、死なずに済んだ彼は恐らく相当運が良かった　　ということだろう。

リグイルはきょとんとした様子のアーフィアを見やった。

意外なことに　　というのもなんだが、アーフィアは強い。

武器として用いる“詩人の指輪”を焦点とした魔法の威力もさることながら、戦況に応じた状況判断も理に適っており、決断と行動も迅速だ。

それに何より、意志と度胸に秀でている。

バディッシュのような最強の戦士が繰り出す必殺の斬撃を、逃がずに踏み込むことで避け、あまつさえ一撃を見舞う　　。それが最良の手と判っていても、凡百の戦士にできるものではない。

かつてバディッシュは、彼女は魔王に魅入られるという事件に遭わなければ、いずれ自力で魔王子まで昇り詰めただろう と評した。

今はリゲイルにも納得できる。

魔王の想い人として得た魔王子位だが、前線に魔軍の将として出陣しても、相当の戦果を上げるのは容易に想像できた。

バディッシュにとっては味方であるのが残念なほど、戦い甲斐のある相手に違いない。

だがその一点が、不安材料と言えなくもなかった。

近頃の天軍は歯応えがなく、アーフィアと戦うのが楽しい。

常に死地に赴き、ぎりぎりの戦いに悦びを見出すバディッシュにとって、これは何を意味するのか。

もの思いにふけるリゲイルの脇では、アーフィアが尋ねていた。

「あいつらって、新しい魔王子の？」

「ああ」

「ウル……ええと、なんだったかな。そうだ、ウルバーラムとかいう奴？」

「そんなのいちいち憶えてられるかよ」

実に魔王子らしい応えをバディッシュは返す。

「お前もやったのか？」

「別方面のことをやらないかと誘われた」

アーフィアはちらりと苦笑した。

「私を侮るのは仕方ないが、ラトーレが怖くないのかな。昔の私だったら、ラトーレやあなたがたに絡むようなことに関わるうとは絶対思わなかったが。少し驚いた」

「天軍が弱いのが悪いんだ。だから馬鹿で弱いくせに、こんなところまで上がってくる」

「……愚痴だなんて、あなたらしくもないな」

彼のぼやきを聞いた魔王子の女が冗談めかして言った。リゲイルはその声音に、ほんの僅かな緊張の気配を嗅ぎ取った。

魔僧と同じ懸念を、アーフィアが抱えていることに気付く。

アーフィアが何げない　ふうを装った　口調で、訊いた。

「もしやまた天軍に行つて、億劫戦争の均衡を取り戻すつもりとか？」

## 51 懸念

「もしやまた天軍に行つて、億劫戦争の均衡を取り戻すつもりとか？」

アーフィアが何げない　ふうを装つた　口調で、訊いた。

だが鋭い観察力を誇るバディッシュの前では、下手な腹芸や探りが通用するはずもなかった。

アーフィアの意図を見抜いた彼は、からかうように片眉を上げた。

「俺がいなくなつたら寂しいか？　また好かれたもんだな」

「……」

むっとして口を閉ざしたアーフィアの頭を小突き、バディッシュは笑つた。

「悟りを開くのは結構大変なんだ。もう一回やる気にはならんよ」

「……そう　なのか」

アーフィアの相槌にバディッシュは頷いて続ける。

「それに、仏門系じゃ俺は永久破門されてる。仏門系の上座部派だけは自分が悟ればいいが、他の系統だと昇進には信仰心　平たく言や上への忠誠心が試されるからな。

たとえ正体を隠してやり直そうとしても、俺みたいなのは上には上がれないだろうよ」

「ほっ」

リグイルは思わず呟いた。この魔戦士がこんなふうに分身の経験  
を語るのはとても珍しい。

一方でアーフィアが吐き捨てた。

「やっぱりな」

「ん？」

首を傾げた魔戦士を見て言う。

「絶対そうだと思っていた。

あなたは天軍に飽きて裏切ったんじゃないで、最初から魔軍に  
来るつもりだったんだろう。それで野望があっても唯一ばれずに昇進  
できそうな仏門系を選んだんじゃないのか」

「やっぱりお前は俺と似てるんだな」

バディッシュは楽しげにやりと笑った。リグイルの視線を受け  
て飄々と言う。

もちろん、魔僧の懸念にもとうに彼は気付いていたのだ。

「心配するなよ。

俺は最初から魔軍に来たくて堪らなかったんだ。今ちよつとぐら  
いつまらなくなったって、二度とあっちに行く気はない」

リグイルは感慨をそのまま口にした。

「意外だな。そなたがそれほど所属にこだわるとは。魔軍にいたほ  
うがより強い敵と戦えるからだと思っていたが」

この戦争では、どちらかと言うと魔軍は質より量、天軍はその反  
対という傾向がある。

バディッシュユのように戦い自体を楽しむ者にとっては、斃<sup>たお</sup>しても斃<sup>たお</sup>しても数で攻めてくる魔軍より、一騎当千の実力者揃いの天軍と戦うほうが楽しいに違いない。

だからその傾向が逆転すれば、バディッシュユも己の立場を変えても不思議はないと思われたが。

「まあそういう面もなくはないがな」

バディッシュユはあっさりと言った。

その瞳が、玩具を前にした子供のように煌く。

「だがそれよりも、俺にとっては“神を斃せる”っていう状況が何より面白いんだ。

この世界で魔軍にいれば、およそ神と呼ばれるあらゆる存在を切り伏せて叩き潰すことが出来る。こんな愉快な世界どこにもないぜ」

アーフィアは名状しがたい表情を浮かべた。

バディッシュユの言葉に共感を覚えたと同時に、彼と同じ感慨を抱いてしまったことに対する嫌悪が入り混じった複雑な顔つきだ。

だが結局、彼女がバディッシュユの言葉に感想を述べることはなかった。

自分の気持ちの整理がつく前に、三人の間にひやりとした歌声が忍び込んできたのだ。

「アーフィア」

「

アーファイアがぎくりと身を強張らせる。  
同じ方向を向いた魔王王子らの視線の先には、白き闇を纏った彼の王が立っていた。

「アーファイア、おいで」

その声はどこかうつろいで、心ここにあらずといった様子だ。  
かなり酔っているの是一目で知れた。

「ラトーレ……」

うつろたえたアーファイアの呟き。

最悪のタイミングだ。

こんな心身ともに消耗しきった状態で酔っ払ったラトーレに抱かれるなど、冗談ではなかった。

こつこつ時は常にも増して合理的なりグイルと薄情なバディッシュが、素早くそれぞれ一歩退いてラトーレに道を空けた。

「だ、駄目だ、今は……」

ラトーレは頓着しなかった。

バディッシュに何を言っても無駄だが、ラトーレに何か言ってももつと無駄なのだ。

座り込んでいたアーファイアに歩み寄って、軽々と抱き上げる。

魔王に触れられただけで、天を折伏した者の倒錯した酔いがアーファイアにどつと伝わってくる。



やはり相当酔っている。

この酔いを彼女に注いで分かち合い、二人で滅茶苦茶に乱れるのがラトールレの何よりの愉しみなのだ。最近彼を見かけなかったのも、酔っ払えるだけの大物を探し回って彷徨さまよっていたからに違いない。アーフィアは全く緩まぬ魔王の腕の中で弱々しく足掻きながら、必死に嘆願した。

「ちょっと、ちょっとだけ待って……」

「アーフィア」

「嫌だ……」

泣きそうな声をあげる恋人を抱え、魔王の姿は壁の奥へ消えた。バディッシュユが呑気に言った。

「あいつ、人気者だな」

「確かに。私としては羨ましいことだとは思えぬが」

「いつもどうやってあんなに酔っ払えるほど敵を見つけてるんだろ  
うな。俺なんかここんとこずっと探してるのに一柱も見つからない  
ぜ」

「アーフィアを抱きたい一心ではないか」

「ほやくバディッシュユに軽く返してから、魔僧は改めて言った。

「もともとがあちらの存在だからな。気配と勘で判るようだ」

「俺だって天軍だったんだが」

「ラトールレは特別な例外だ。歌っておびき寄せることもできると聞  
いたことがある」

「なあ、ラトーレって天軍と魔軍を行ったり来たりしてたわけだろ？」

バディッシュが唐突に尋ねた。

## 52 最終話 億劫遊戯

「なあ、ラトールって天軍と魔軍を行ったり来たりしてたわけだろ？」

バディッシュが唐突に尋ねた。

思いついたことをすぐに口にする彼の性格には慣れているリゲイルは、とりあえず頷きを返す。

「ああ。そうだが」

「どつという契約なんだ？ 俺が戦争に参加してから結構経つが、あの騒ぎ以外は一回もあつちに行つてないんじゃないか」

「いや……そなたが魔軍に来てすぐ辺りに、一度あちらに戻っているな。」

それから、アーフィアが来る前までの間にも数度あつたか」

リゲイルは少し考えてから応えた。

「来る時はあちらの上層部から連絡が入る。その時におよその滞在期間を決めて、期間が過ぎるかラトールが飽きたら帰っていく」

「何回か？ 全然気付かなかつたぜ」

バディッシュはやや驚いたように言った。

「確かにしばらく見かけない時はあつたが。戦闘でも遭わなかつたぞ」

「ラトールはあちらではほとんど戦わない。女神の閨むすめの相手程度しかしていないのではないかな。女神を抱いて酔い、殉教者として差し出される贄を喰つていれば、魔を斃たおす必要はないらしい。」

まあラトールに積極的になられると、それこそ先日の騒ぎのようなことになるゆえ、こちらにとっては幸いだが」

「じゃあ、あつちでは贄と女神を交互に喰ってるってことか。不経済極まりないな」

無駄だろうがなんだろうが面白ければ気にしない、不経済の権化のような男の言葉に、リグイルは微かに苦笑した。

「あの女神　大地母神にはどうしても夫たる相手が必要なのだ。本来ならばその相手がラトールでなければならぬということもなかるうが、溺れているものは仕方ない。」

だがラトールは美味なる猛毒だ。時折醒まさねば本当に墮ちてしまふ。

ゆえに不承不承魔軍に貸し出して冷却期間を置くというわけだ」

「破滅的だな」

「だから破滅してしまった」

リグイルは淡々と受けた。

「そういう意味では、私としてはアーフィアの存在は奇跡としか言いようがない。ラトールの心を奪ったのは無論として、あの猛毒に耐え抜いているのだからな。しかもたった数日の休息で回復してしまふ」

バディッシュはしみじみと頷いた。

「確かに凄いやな」

「凄いか」

実感のこもったバディッシュの言葉に、興味を引かれてリゲイルは訊いた。

この魔戦士はアーフィアと魂が混じっている。

二人の行為に“巻き込まれ”て、ラトールがアーフィアに注ぎ込む酔いを味わったことがあるに違いなかった。それも、口ぶりからするに、一度や二度のことではなさそうだ。

「ああ。俺なら絶対とつくに墜ちてるところだ。俺にはとてもじゃないがラトールなんて武器は使いこなせない」

「……バディッシュ、あまりアーフィアを虐めるな。

私としては、そなたに天軍に戻られる以上に、アーフィアにラトールごと寝返られるのが怖い」

「虐めてるわけじゃないぜ。俺だってやられてたろ。

俺に傷をつけられる奴なんてそうはいないぜ。自覚がないんだよ」

バディッシュは言った。

一転、朗らかな笑みを浮かべて魔僧を見る。

「それともお前が相手してくれるか？」

「断る」

「まあそう言っつな」

刹那、魔戦士の姿が滲んだ。雷速で抜き放たれた剣が魔僧のいた空間を薙ぐ。

だがそこには何も残らず、一陣の風が巻いたのみだった。

虚空に身を溶かしたりリゲイルは数歩離れた場所に再び現れた。切

り裂かれた法衣の裾が風に揺れる。  
バディッシュユが太い笑みを浮かべた。

「アーフィアが抱かれてる間は、何かしてないと気がおかしくなり  
そうなんでな。付き合えよ」

「野次馬根性がとんだ墓穴だったか」

珍しくリゲイルがぼやいた。

一方でその手には彼が滅多に持つことのない、武器 黒い錫杖しやくじょう  
が握られている。

「たまにはいいだろ？」

「まあな」

大地を揺るがす爆発音が響き渡り、王宮の一角が消し飛んだ。

数日後、魔僧の許に所属変更の報告が届いた。

最近魔王子となった七名全員が、魔王子位を辞して下層に降りる  
という。

せつかく復活した大神はラトローレが早々にまた墮としてしまったし、その威容だけで見ると見る者を圧倒するような、造物主級の大物もまだ起きていない。

一度にこんな大量の変更届けが来る理由は 。

「……あれか」

リグイルは呟いた。

先日、自分と二人の魔王子が王宮を半壊させた一件だ。

バディッシュとアーフィアの戦闘の気配を感じて様子を見に行ったりリグイルは、同じように新参の魔王子たちが見物に集まったのを知っている。

契約破棄の署名のうちいくつかは、震えた手で書いたのか、弱々しくのたくっていた。

特にウルバラムという名などは、魔王子昇格の際に書き殴った自信たっぷりの筆跡に較べると、同一の者が書いたものとは思えぬほどだ。

真の魔王子たる者の戦いぶりを目の当たりにして、よほど震え上がってしまったに違いない。

「まあよいか」

無論、リグイルにはどの名にも憶えがなかった。

どのみち怖気づいて去る者など、彼が記憶するにはあたわない。リグイルとて億劫戦争を愉しむ一人なのだ。

下らないことにかまけていると、ただでさえ少ないおいしい大物をバディッシュやラトローレに狩り尽されてしまう。

彼が卓から立ち上がると同時に、用済みとなった契約書は炎に包まれた。

魔僧は書類が燃え尽きるのも確かめず、執務室を立ち去った。



## 52 最終話 億劫遊戯（後書き）

『後日談の果てにの後日談』終了です。どうもありがとうございました。

これで物語はおしまいです。もう少しだけ設定などを更新します。

<設定など>>(前書き)

こちらは作品本文ではありませんので、読まなくても大丈夫です。蛇足です。激烈にネタばれです。苦手な方はご注意下さい。

## < 設定など >

ご覧いただきありがとうございます。

作中で雑に語られていたマニアックふう穴だらけ設定です。重大なネタばれを含みます。

一章終了時に公開したものに、少々加筆修正してあります。恥ずかしい気分になってきたら、また突然削除する可能性があります。

## < 億劫戦争世界 >

天軍と魔軍が覇権を賭けて永劫の戦争を繰り広げる世界。多層界から成り、存在する世界すべてが戦場となる可能性がある。戦場となった階層で決着がつく頃には大抵その世界は壊れ、滅ぶ。天が勝てば久遠の平安。神の国となった世界はあらゆる変化を喪い、すべての時が停まる。魔が勝てば永久の混沌。血腐り肉爛れる地獄絵図だが魔の側は強い相手と喧嘩しているほうが楽しいし、この状態で充分に混沌としているため勝つ気はない。億劫戦争こそが勝利。

## (魔王子リゲイル談)

うかつな作者の心のつぶやき

「億劫」の読みは「おくごう」です。「おつくう」ではありませんせんよ！「おつくうな遊戯に興ずる者」による「おつくう戦争」だと、だいぶダルい戦争になりそうです……。仏教用語では「おくごう」と読んで非常に長い時間を表すようですが、ここでは「おくごう」でお願いします。

そして異世界なのに神話の神が敵だったりするのは、平行世界は多数あれども神は普遍にして共通という大雑把な解釈です。

<天軍>

おおまかには三系統。勢力は一神系（ユダヤ、イスラム）≡仏門系（仏教、密教）>多神系（ヒンドウー、神道、北欧、ギリシヤ、エジプト等）。人間が昇れるのは基本的には菩薩ノ神級程度まで。奇蹟を主要な武器とするため、昇進には強固な信仰心が要求される。神々を完全に滅ぼすのは難しく、斃れても永い眠りの後復活する。下っ端と天部衆ノ天使級の間には、それこそ天と地ほどの隔たりがある。

（宗教混じり。作者が知ってるの全部）

### 階級

・至高神：天の統率者としては金色の女神。最強の神としては詩神。  
・造物主ノ造一切者ぞういっさいしや：三大宗教最高神あたり+。 基督教は造物主はヤハウエでキリストは大神。

・如来ノ大神にょらい たいしん

・菩薩ノ神ノ三大天使ぼさつ さんたいし

・明王ノ大天使ノ自然系の神みょうおう たいし

・天部衆（天）ノ天使ノ八百万てんぶしゅう たいし やおよびの神

・下っ端（僧兵、神官、預言者ノ聖獣等）：概ね人。獣は使われる側。

GTN（後日談 超どうでもいい ネタ）

『後日談の果てに』の想定神

・神の子：イエス・キリスト

・四面四臂の神：ブラフマー

・オリンポスの大神：ゼウス

- ・ 隻眼の戦神：オーデイン 多分アーフィア踏んだ神
- ・ 胎児の容を（略）黄金の造物主：ヒラニヤガルバ
- ・ 高天原の父神：イザナギ
- ・ 菩提樹の下で（略）如来：釈迦如来
- ・ 女神／大地母神：イシユタル

#### < 魔軍 >

天軍では宗教ごとに系統が分かれるが、魔軍は実力至上主義のため、基本的に階級のみで系統はない。魔族でも人間でも勝手に上級戦場上がり、生き残れば階級を認められる。生粋の魔族は生まれでた時点で力の等級が概ね決まっており、戦場をあまり動かない者が多い。昇って死ぬのは専ら人。死ななかつた人間は、昇って爵位を得る頃には「人出身の魔族」と言われるようになる。また魔軍の兵は死ぬと魂を奪われる。魂は霊気圧として貯蔵され、兵士に年棒として支給される。その霊気圧を魔は喰らって力とし、人は武器に込めて魔力を高める。

（ゲーム混じり。作者が知ってるの全部）

#### 階級

- ・ 魔王
- ・ 魔王子：力量差有り。基本的には如来級かやや下。自己申告制のため、時々見合わせぬ実力の者が混じることもある。バディッシュ、リグイルは造物主以上。
- ・ 爵位級：公侯伯子男。悪魔色々。宗教系の悪魔はこのランクのどこに入る。
- ・ 下っ端（人間／羅刹／夜魔／鬼）：なんでもあり。ずっと下はスライムとか。

< 靈気圧 >

魂を数値化したもの。年齢・能力等で若干の差があるが、単純に変換されてしまったため平均にさほどの差は出ない。あまり細かいこと決めてない。常人：1、兵士：3〜4、魔・天：10〜

< 登場人物 >

アーフィア

下っ端魔術師。魔術師過剰となった剣と魔法の世界で就職難にあえぎ、傭兵となる。用心深い性格で生き馬の目を抜く戦線を生き残るが、時にはその慎重さがあだに。

物語終了時の強さは、造物主に一人で勝つのはきついか……程度。

・口癖：「そんなの（こんなの）嫌だ……」

ラトール

魔王。強力な言霊を「歌」として操る。彼の歌声は神々がまとう強固な信仰の鎧をも打ち砕き墮落させる。その様子は彼を極限の酩酊状態に誘い、酔いを醒ますために人の魂を喰らう。平たく言うと女好きの酔っ払いで、しかも酒に吞まれるタイプ。

正体は天軍最強にして、その能力から「詩神」と称される至高の天神。信徒なき孤高の上位者であり、ほとんど戦いに出ることもないため、天でも大神以上の一部の神々にしか存在を知られていなかった。とある事情で魔軍に出向したことをきっかけに神を斃す愉楽を憶えてしまったのが、様々な方面にとっての運の尽き。

・口癖：「アーフィア」

ラトーレの歌について

いわゆる「音楽」として歌っているわけではない。彼が意図を込めた言葉は、万物の摂理を捻じ曲げる力を持つ言霊となる。紡がれる言葉の連なりが逆らい難く魅惑に満ちた楽の音のように感じられることから、畏怖を込めて「歌」と呼ばれる。

バディッシュ

人出身の魔王子。もとはとある異世界から墜ちてきた魔法大学の学生。仏門系の僧兵として天軍で戦っていたが、悟りを棄てて魔軍へと寝返る。天軍にとっては最も忌むべき裏切り者。「楽しければあとはどうでもいい」を信条に今日も神々を叩き潰す。

天軍での最終称号は仏門系上座部派の最高位である釈迦如来。『

39 予兆』の回で出た釈迦如来は後継で称号を得たが、バディッシュは上座部派にとり唾棄<sup>たき</sup>すべき黒歴史であるため「初代」扱いとなっている。また彼は天軍で悟りを啓き超絶的な強さを得る過程で性欲を引き換えにしたと見られ、その欲望と衝動は専ら戦いで解消される。

・最近の趣味：アーファイアいじり

彼の過去話

『墜ちたる者』 <http://ncode.syosetu.com/n4337u/>

リゲイル

最古参の魔王子で、無表情な闇の僧侶。バディッシュのような「もと人間」ではなく純粋な魔族。彼がいつからこの戦争で戦っているのか知る者はいない。城の管理やラトーレの女の世話なども一手に引き受ける魔軍の良心的存在？

実質上の魔軍の管理者であり、戦争のパワーバランスが崩れすぎないよう気を配るゲームマスター的存在。ただしその理由は自分が

楽しみたいからであり、所詮は自分のため。

・ラトールに一言：ご利用は計画的に

<タイトルについて、あるいは言い訳、もしくはあとがき>

この内容に合わないタイトル、何に対しての「後日談」というと、実は「プロローグ」の後日談です。一時期「一日一話」的なことをやっていて、そのときに単発で浮かんだのがプロローグ部分でした。ちなみに小話の暫定タイトルは「ファンタジー」。そのまんま。たまたま決めた主人公以外の3人の名前から妄想が暴走し始めて、あてもなく打ち込み始めたのがこの話です。魔王の人外ぶりがひどく、主人公が死なずに落ちがついて我ながらちよつと意外。

本来はタイトルを考え直すべきでしたが、けっこう昔に書いた話で今さらいい題名も思いつかず、そのまま投稿してしまいました。R18としてムーンライトノベルズで完結まで掲載しましたが、もともと描写が薄いこともあり、少し変更して全年齢向け（R15だけ）として転載したのがこちらになります。一章だけにしようかと思いましたが、やっぱり全章公開してしまいました。裏側の月からお越しくくださった方もいらっしやるようで（むしろかなり？）、同じ話で恐縮なことです。

物語としてはこれで終了となりますが、まあそんなこんなで少しだけおまけがあります。時系列としては後日談の果てにの後日談の後日談です（くどい）。しょせん億劫の繰り返しな小話なので、気が向いた方はお付き合いください。

読んでくださった皆様、本当に本当にどうもありがとうございます。でした。





ボディッシュユキ、乱心 前編(前書き)

残酷描写あり

## バディッシュさん、ご乱心 前編

遠く響く爆発音と、破損する王宮の一角。

「……またか」

瞑想の淵より呼び戻され、リゲイルは呟いた。

戦闘の気配ではあるが、戦局はこの地まで天軍に攻め入られるほど劣勢に傾いてはおらぬ。だとすれば、魔王子同士の小競り合いだ。この魔王宮にあっては珍しいことではない。

気配からするに、さほどの規模の戦闘でもなさそうだった。再び忘我の深淵に意識を沈めようと目を閉じる。

凧いで拡がった知覚の中、一つの気配が急激に弱まっていった。そして傍らには不釣り合いなほど巨大で膨大な破壊の衝動。

リゲイルは目を開いた。結跏趺坐けっかふざを解いて立つと、現場に向かった。

しかし中庭の一角では、もはやすべてが終わるところだった。

到着した魔僧の目の前で、片方が腕を引き絞って槍を投擲した。

極太の矢さながらに逃げる相手の背を貫いた槍は、数十メートル先の城壁に地の底まで響くような衝撃音を立てて突き立つ。

槍を放った者が、ぶらぶらと城壁に歩いて行く。横に回りこんで相手の頭を掴み、捻って己のほうへ向かせて言った。

「おい、もう終わりか？」

応えは、不明瞭な苦痛の声。

標本よろしく石壁に縫い止められ、ろくに動くこともできぬようだ。魔戦士を見返す瞳はうつろに濁り、すでにその魂が身体から離れつつあることを示す。

バディッシュは相手の頭にかけて手を首にずらした。

「そうか。じゃあな」

「バディッシュ」

リグイルの声に、魔戦士はうつそりと振り向いた。

「なんだ」

同時にごきり、と鈍い音が響いた。

頭があらぬ方に傾く。四肢が幾度か痙攣したあと力を失い、それきり動かなくなる。

「ほどほどにするがいいと言わなかったか」

「そうだったかな」

握り潰した頸骨から手を離し、バディッシュは肩をすくめた。

いつにない魔戦士の様子に、リグイルは眉をひそめる。

だが少し考えて原因に思い当たった。ほとんど確認に過ぎぬ、問い。

「アーファイアか」

果たして、魔戦士は唇の片端を皮肉に吊り上げた。

「まあ、な」

短く応えて石壁を貫通した槍を片手で引き抜く。軽く払って串刺しになっていた物体を地に落とした。

魔王ラトールが帰城したのは、つい数刻前のことだった。

戻るなり妻であり恋人たる魔王子のもとへ赴き、今は存分に酔いを分かち合っている最中というわけだ。

バディッシュユがぼやいた。

「久々に見つけた如来まで横取りされたよ。

この感じだと、他にもけっこう大物仕留めたみたい……

っ。

ああ、くそ。参るぜ」

こめかみを押さえて唸る魔戦士を見ながら、リグイルも軽く嘆息する。

相変わらずラトールは見境なく天の神々を狩っては酔い覚ましにアーフィアを抱く。

そしてバディッシュユはアーフィア経由で酔いの余波に悩まされる。獲物にありつけずにただでさえ欲求不満気味のバディッシュユは、その矛先を魔軍の強者に向けて解消しようとする。

結果がこれだ。

しかし、新参の魔王子たちの実力は、到底バディッシュユを満足させうるレベルではない。戦いを愉しむというよりも、鬱憤晴らしとストレス発散が目的の戦闘は、往々にして手加減とは縁のない力任せのものとなる。

実力の及ばぬ者が生き残れるはずがない。

ラトールがしらみ潰しとさえ言える執拗さで天軍の上位者を屠る

せいで、魔軍の直接の犠牲は多くはない。しかしバディッシュの憂さ晴らしにより屠られる、魔軍の上位者の犠牲も少ないものではなかった。

つまり現状では、魔軍に最も大きな被害を与えているのは、今唸っているこの魔戦士なのである。

とは言え、ある意味、被害だけで見れば戦争の均衡は保たれているとも言える。

結果はさほど悪いものではない。

リゲイルにとって問題なのは。

「くそつ。駄目だ」

バディッシュが毒づき、手にした槍の柄で力任せに地を突いた。

地響きと共に、地面に放射状にひびが走る。

魔戦士は肉食の獣を思わせる獰猛な笑みを浮かべ、ぎらぎらと異様に輝く目で魔僧を見た。

「遊ばつぜ」

以前ならアーフィアが九割がた引いていた貧乏くじを。

相当な確率で自分も引かねばならぬこと、だった。

そしてその結果。

「……………」

リゲイルは届けられた魔王子四名分の所属変更報告を、斜めに見て焼き捨てた。

これでまた魔王子の数は三たりとなった。

自尊心をへし折られ増上慢を思い知らされた新参の魔たちは、当座の己に相応しい階級へと下っていった。

この展開。

幾度繰り返しただろうか。

「……………まあ、よいか」

とは言え、ある意味、これで適正な魔のヒエラルキーが保たれているとも言える。

結果はそこまで悪いものではない。

問題があるとすれば。

帰ってきたばかりのラトーレは、当分愛する者との蜜月を満喫するはずだ。

かつてアーフィアは魔王への“ささやかな望み”として「目が覚めたときそばにいてほしい」と語った。バディッシュの無責任な煽りのせいもあって、恐らくあのラトーレ相手に何を願ったか気付いているまい。

さしものアーフィアも魔王の酔いを注ぎ込まれると、目覚めるまでに数日はかかる。

待つ間、忍耐と縁のないラトーレが手を出さないはずもなく、その時間は延びる一方だ。目覚めれば目覚めたで、待ちかねた魔王がどうするかなぞ判りきったことだ。

バディッシュにもそれなりの報いは与えた。

純粋な戦闘能力では魔戦士のほうが上かもしれぬ。だがあれほどまでに冷静さを欠いた状態であれば、優位に立つのはそう難しいことではない。

しばらく最前線に出るのを躊躇するであろう程度には痛めつけた。

魔王と、魔王子二柱がこの状況。

つまり、現状で最前線を支えられるのは、一人しかいないということになる。

こんな状況で大神あたりにも復活されると、魔軍もただでは済むまい。

唯一動ける自分が、雑務にかかずらっている場合ではない。

「仕方あるまいな」

リゲイルはゆるりと微笑むと、戦場へと去っていった。



ボディッシュロウ、乱心 後編(前書き)

ちやR15

## バディッシュさんと、乱心 後編

目覚めたアーフィアに気付くと、ラトールは寛いでいた長椅子から立った。

寝台に歩み寄って愛する者の額に唇を触れ、やわらかく囁く。

「ではアーフィア、行くよ」

「うん……行ってらっしゃい」

アーフィアは眩しげに目を細めた。

幾度見ても、いつまで経っても目を奪う、魔王の美貌にただ見惚れて微笑む。

「……」

だがそれは魔王にとっても同じらしかった。うっとり見つめる瞳を見下ろす漆黒の瞳に、ゆらりと欲望の光が揺らめく。

離れかけていた唇が、再び降りて今度はアーフィアの口を塞いだ。肩に手をかけ半身を抱き起こし、後頭部に手を添えて固定し、唇を食んで舌を絡める。幾度味わっても、いつまで経っても飽きぬ恋人の魂を、引き出した愉悦より存分に貪った。

「ん、んっ……」

深く濃厚なくちづけに翻弄され、あっという間にアーフィアの意識が墜ちてゆく。

だが再び眠りの国に戻る前に、気付いたラトールはしびしびといった様子で離れた。

今回もまた、魔王は酔いを雪いだあとと繰り返してアーフィアと愛し合った。

獣のごとく狂おしく求め合い、意識を喪えば馴染んだ肢体を遠慮なく堪能し、目覚めれば耳に心地よい甘い啼き声を愉しんだ。

しかしそろそろ潮時だ。

魔王の精は、彼の魔力の精髓でもある。幾度となく注ぎ込まれた魔性の毒は、魂を蝕む。さしものアーフィアといえども度が過ぎれば耐え切れぬ。

さすがに限界だった。

アーフィアには休息が必要だ。そしてラトールは恋人が回復するまでの間に天を狩って、程好く酔っておけばよい。

そうすれば、またあのめくるめくような至福の刻を過ごすことができる。

ラトールは艶っぽい吐息を漏らすアーフィアを名残惜しげに寝台に寝かせ直した。いま一度額に優しくくちづける。

「おやすみ、アーフィア」

ラトールはゆったりと笑って身を起こし、戦場へと去っていった。

魔王が去ったあと、浅いまどろみから浮上したアーフィアは、恐

るべきだるさに包まれながらしばらくぼんやりと天井を見つめた。

精気を凝った水がすぐ傍らの小卓にあるのは判っている。

それを口にすれば、かなり楽になるのも判っている。

だがあまりにもだるくて、動く気になれない。

毎度のことではあるのだが、今回はいつにも増して凄まじかった。ラトールは執拗で、全く以って容赦なかった。

しかもアーフィア自身も得体の知れない衝動がどこか奥のほうから湧き出して、余計にラトールを煽ってしまった。

何か狂おしい気分になり、求めずにいられなかったのだ。

とは言え、それが「何」か 見当がつかないわけではない。

アーフィアは疲れた声で呟いた。

「……バディッシュ……」

ほとんどこぼれただけの呟きに、やや置いて返答があった。

「なんだ」

寝台の数歩先に現れるなり、魔戦士は言った。

「ひどい状態だな」

アーフィアは一瞥をくれてから同じく返した。

「あなたもな。」

「いったい何をしていたんだ」

一見、バディッシュに常と変わる様子はない。だが魔戦士の纏う覇気は常よりも薄く、撒き散らす圧倒的な迫力も、不穏なまでに強いというわけではなかった。

衝動を感じたのは、最初の酔いを分かち合っていた頃だった。にも拘らず、今もまだかなりのダメージが残っているようだ。もっとも、今の彼女ほどではなからうが。

バディッシュは常と変わらぬ人を食った笑みを浮かべた。枕元まで歩み寄り、水差しから杯に注いでアーフィアに差し出す。

「リグイルにやられた。あいつ、全然容赦ないよなあ」  
「あなたがそれを言うのか」

呆れて呟き、アーフィアはどうにか起き上がって杯を受け取った。飲み干すとようやく一息つけて、魔戦士を見やる。

「リグイルか……道理で」

あの喻えようもない感覚は、バディッシュの凄まじいまでの破壊衝動だったのだ。

耐え難さに苛まれるままにラトールを求めてしまったが、魔王から与えられた見返りはその数倍だった。

滅茶苦茶に 滅茶苦茶に、された。

心身ともに、保たない。

保たないのに、ラトールは一片の容赦もない。

気絶しそうになっても、歌って強引に覚醒状態に留めるような真

似を平気でする。

平気以前に無意識にする。

恐らく幾度か発狂して呼び戻されてもいるだろう。

もしかしたら、死んだことさえもあるのではないかとアーフィアは疑っている。

「頼むから少しはこっちにも気を遣ってくれないか……」

「お前がそれを言うのか」

バディッシュは片眉をあげた。

「百歩譲って、お互いさまだろ？」

アーフィアは歯軋りした。言い返せるわけもない。負け惜しみに言ってみた。

「いつか殺されるぞ。リグイルに」

「かもな。凄かった」

バディッシュは心の底からといった様子で頷いた。

「あんなこてんぱんに負けたの久しぶりだぜ。

深追いしてるうちに、いつの間にかにっちもさっちも行かなくなってるんだ」

大きく嘆息する。

「愉しかったよなあ」

満足げな最後の一言が余計だった。

アーフィアが貌をしかめる。

やはり、あの時感じた混沌とした高揚感は、破壊衝動だけではなかった。強大な相手と戦う歓喜と陶醉だったのだ。

「最悪な男だ……」

吐き捨てたアーフィアを、バディツシュは何やら悪戯めいた表情で見下ろした。

「なんだ」

怪訝そうに問うと、にやりと笑みが返される。

「お前だって愉しかったんじゃないか？　なんか嬉しそうだぞ」  
「……」

アーフィアはむっとして目を逸らした。

確かに、ラトールがいつも以上に愉しんでくれたのを喜ぶ自分がある。魔王がアーフィアで悦びを見出すことこそが、自分にとっても何より嬉しいのだ。

だがそれを簡単に見抜かれたのが癢かゆだった。

だから、この男は嫌いなのだ。

ぬけぬけと人の心に立ち入り、しかも大抵凶星を衝く。

むっつりと黙り込んでいると、魔戦士は朗らかに言った。

「お前って、本当に俺のこと嫌ってるんだなあ」

アーフィアはかりかりと怒鳴った。

「放っとけ！」



バディッシュヨさん、し乱心 後編（後書き）

番外編終了です。ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3626w/>

---

後日談

2011年10月7日12時08分発行